

年報

平成 29 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences
公立大学法人大分県立看護科学大学

平成29年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学
学長・理事長 村嶋幸代

大分県立看護科学大学は、平成10年に開学後、平成29年度末で20年を迎えることができました。この間、1,393人の学部卒業生、172人の修士、18人の博士課程修了生が本学を巣立ち、大分県を始め全国で活躍しています。本学を創設し、導き、ご支援くださいました、大分県を始め多くの方々に心から御礼申し上げます。

本学の建学の精神は、「看護学の考究」「心豊かな人材の育成」「地域社会への貢献」です。全教職員と学生・大学院生が、この精神の下に地道に努力を重ねてきました。その足跡が、開学以来、毎年まとめられてきた年報です。

平成29年度は、第二期中期計画の6年目、終了の年でした。このため、第二期中期計画のまとめと、第三期中期計画への移行準備を行ってまいりました。

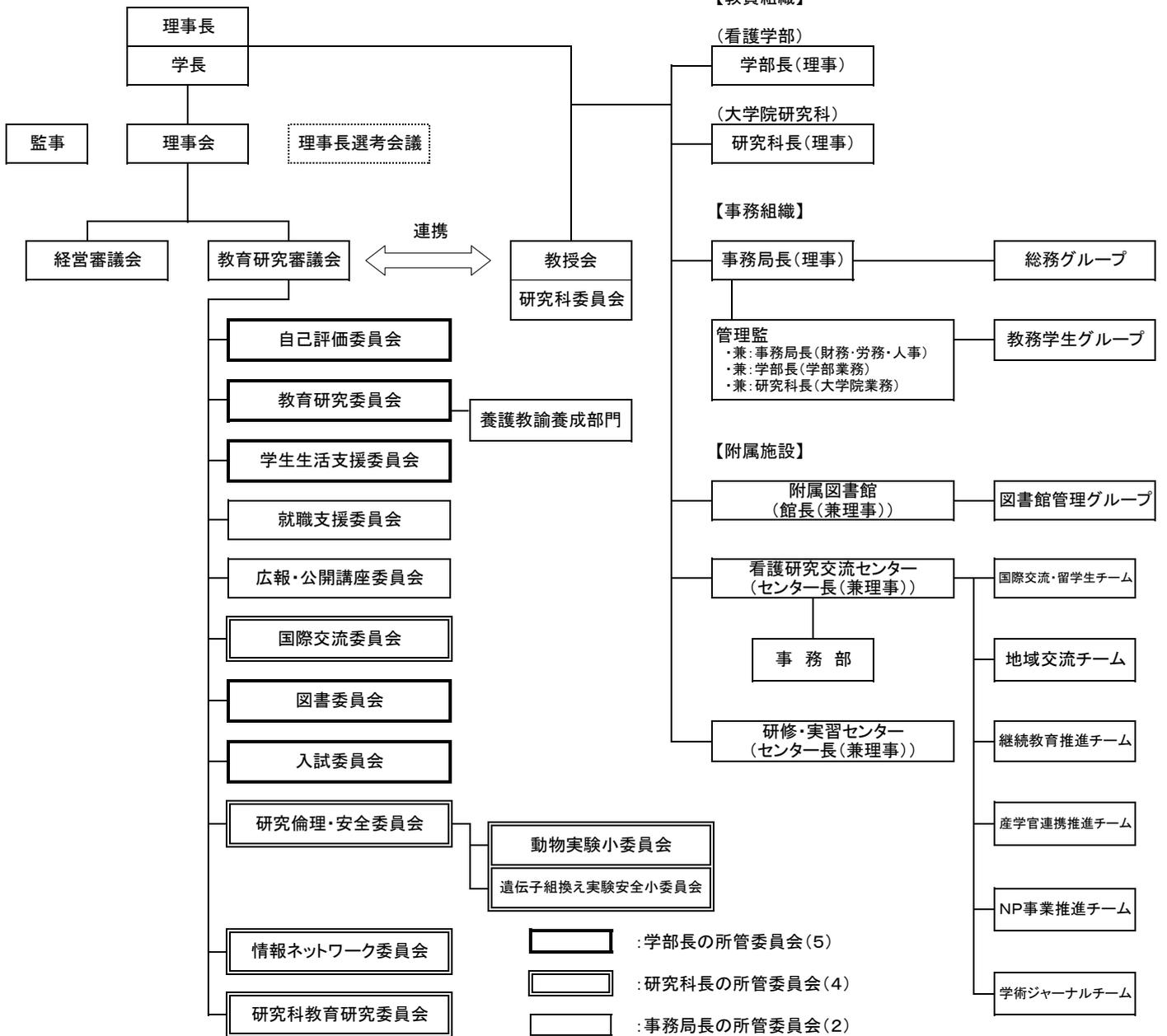
平成24年に始まった第二期中期計画では、学士課程4年間を通した看護師の教育と、大学院修士課程における保健師・助産師、ナースプラクティショナー（診療看護師：NP）の教育が骨格で、これを堅持して参りました。これに、学士課程における養護教諭1種の教育と、修士課程の看護管理・リカレントコースで看護管理を専攻した修了生に日本看護協会の「認定看護管理者」の受験資格を付与することが加わりました。いずれも、悩みを抱えながらも成果を出しつつあります。学部では、地（知）の拠点整備事業（COC事業）終了後も「予防的家庭訪問実習」を継続し、より地域に根差した大学へと転換しつつあります。

平成29年度は、また、学内で種々の議論が巻き起こった年でもありました。一人一人が意見を表明し、本学が成熟に向かって脱皮する兆候が見えたのではないかと思います。特に、自己評価委員会が、全教職員に「各種規定や委員会等の分掌事項に関するご意見・ご提案等の募集」を出して意見を集約してくださいました。その結果を教育研究審議会で議論し、組織を見直し、委員会を2つ新設してワーキングを8つスクラップしました。平成30年度は、新しい体制でスタートすると共に、必要な議論を継続していきます。この年報で本学の動きを見ていただければと思います。

本学は、今後も、大分県の看護学の拠点として、教育・研究・社会貢献を通して看護の水準の向上に努めます。特に、大分県全体を視野に入れ、看護から安心・活力・発展に貢献したいと思います。年報をお読みになって、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

法人組織図

平成29年4月 大分県立看護科学大学



平成 29 年度 委員会等構成

委員会名	委員長	副委員長	委員			担当		
自己評価	佐伯	関根	宮内	草野	緒方	(高橋(勝))	藤内	
教育研究	藤内	濱中	佐伯	川崎	石田	小嶋	(染矢)	藤内
学生生活支援	林	小嶋	関根	岩崎(香)	樋口	堀	(浜松)	藤内
就職支援	梅野	杉本	緒方	田中	足立	(飯田)	(神崎)	飯田
広報・公開講座	高野	安部(真)	品川	石丸	後藤	恵谷	(矢部)	飯田
国際交流	シャーリー	濱中	崔	伊東	桑野	吉川	徳丸	影山
図書	甲斐(倫)	宮内	山田	堀	(高橋(勝))	(白川)	(工藤)	(狭間)
入試			(非公開)					
研究倫理・安全	市瀬	平野	草野	秦	岩崎(香)	(高橋(め))		影山
情報ネットワーク	甲斐(倫)	品川	野津	恵谷	佐藤(栄)	(矢野)	(染矢)	影山
研究科教育研究	影山	小野	甲斐(倫)	梅野	福田	赤星	(神崎)	影山
プロジェクト名	リーダー	サブリーダー	メンバー					
NPプロジェクト	小野	甲斐(博)	藤内	藤内	高野	石田	佐伯	宮内
訪問実習プロジェクト	影山	藤内	岩崎(リ)	福田	小野	定金	秦	森
健康増進プロジェクト	稲垣		濱中	赤星	馬場	佐藤(愛)		
部門・小委員会・ワーキンググループ名	部門長・委員長 リーダー		部門員・委員・メンバー					
養護教諭養成部門	吉村	伊東	関根	赤星	草野	秋本	(浜松)	
実習運営小委員会	石田	川崎	森	佐藤(弥)	石丸	後藤	大矢	田中
動物実験小委員会	市瀬	影山	小嶋	定金	岩崎(香)	(高橋(め))	足立	徳丸
遺伝子組換え実験安全小委員会	濱中	影山	市瀬	甲斐(倫)	(高橋(め))			
国家試験対策小委員会	小嶋	伊東	石丸	山田	後藤	堀	佐藤(愛)	(染矢)
看護スキルアップ演習WG	伊東	林	佐藤(弥)	中金	山田	足立	佐藤(愛)	
進級試験WG	濱中	佐伯	石田	甲斐(博)	宿利			
大学案内パンフWG	杉本	大矢	足立	恵谷	馬場	秋本	(矢部)	
学外Web-WG	品川	後藤	宿利	恵谷				
英文Web-パンフレット-WG	シャーリー	桑野	岩崎(香)	徳丸	馬場			
ネットワークWG	品川	甲斐	小嶋	(染矢)				
WindowsサポートWG	野津	佐伯	佐藤(栄)	(染矢)				
MacサポートWG	小嶋	恵谷						
フェイスブックWG	野津	田中	平井	(高橋(勝))				
広報紙WG	飯田	関根	中金	(矢野)	(神崎)			
FD WG	高野	小野	梅野	稲垣	吉田	岩崎(香)		
20周年事業 式典部会	福田	佐伯	伊東	桑野	定金	秦	田中	教育研究委員会
20周年事業 記念誌部会								(アドバイザー) 市瀬 甲斐
看護研究交流センター	チーム名	リーダー	メンバー					
国際交流 留学生チーム	シャーリー	桑野	吉川	馬場	(久保)			
地域交流チーム	センター長	赤星	川崎	佐藤(弥)	岩崎(リ)			
継続教育推進チーム	伊東	樋口	後藤	佐藤(弥)				
産学官連携推進チーム	濱中	伊東	樋口	佐藤(栄)	平井	麻生		
NP事業推進チーム	福田	草野	甲斐(博)					
学術ジャーナルチーム	平野	定金	安部(真)	山田	馬場	秋本	シャーリー	(白川)

目次

1.	委員会／ワーキンググループの活動	1
2.	学内行事の概要	33
3.	教育活動	36
4.	学内セミナー	130
5.	学内研究活動	131
6.	業績	137
7.	地域貢献	155
8.	研究・開発・事業助成	168
9.	国内研修	174
10.	役員及び審議会委員名簿	175
11.	教職員名簿	176

1-1 理事会

理事長 村嶋 幸代
学内理事 藤内 美保、影山 隆之、飯田 隆次
学外理事 津村 弘、小寺 隆、高橋 靖周
監事 神品 実子、福田 安孝

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。

本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第1回は、各種委員会規定の一部改正、育児・介護休業法の改正に係る職員の介護休業等に関する規定等の一部改正について、第2回は、大学院学則の改定、大学院特待生授業料免除規程の改正、平成28事業年度に係る業務の実績に関する報告書、28年度決算、理事長選考会議の選出について、第3回は、大分県地方独立行政法人評価委員会による大分県立看護科学大学平成28年度事業年度の業務実績に関する全体評価は「教育研究の質向上」「財務内容の改善」はS評価、その他の3項目はA評価の報告、平成29年度職員採用試験スケジュールについて、第4回は、理事長選考結果が報告され、第3期中期計画、大分県立看護科学大学職員給与規定および役員報酬規程の一部改正、平成29年度中期決算、平成30年度予算編成方針について、第5回は学生表彰規定、各種委員会規定、職員退職手当規定等の一部改正、看護研究交流センター規定の改正、期限付き雇用職員就業規則の一部改正、特任教授に関する規定、公立大学法人における業務方法書の変更、平成30年度大分県立看護科学大学年度計画、平成30年度収入・支出予算等について審議された。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催した。

今年度の大学評価として研究活動や研究業績に関する課題があることから、来年度から新たに新設される自己点検・評価委員会やFD/SD委員会の機能強化を推進することが必要である。また平成30年度の中期計画が順調に遂行されているか継続的に審議する。

1-2 経営審議会

理事長 村嶋 幸代
学内理事 藤内 美保、影山 隆之、飯田 隆次
学外理事 津村 弘、小寺 隆、高橋 靖周
経営審議会委員 千野 博之、上子 秋生、松尾 和行、竹中 愛子

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告および審議事項は、理事会と同様の内容である。

外部資金の獲得をさらに推進すること必要であり、運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

1-3 教育研究審議会

学長 村嶋 幸代

学部長 藤内 美保

研究科長 影山 隆之

事務局長 飯田 隆次

学外委員 葉玉 哲生

委員 赤星 琴美、伊東 朋子、市瀬 孝道、稲垣 敦、梅野 貴恵、小野 美喜、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、ジェラルド T シャーリー、高野 政子、濱中 良志、林 猪都子、Myoung-Ae Choe、福田 広美、吉村 匠平

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は11回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項として、第1回は、養護教諭養成課程の3年次生の履修選抜、第2回は、大分県立看護科学大学研究費採択、本学が取り扱う個人情報の適正な管理のための基本方針、第3回は、大学院特待生授業料免除規程の改正及び評価要領の改正、大学院博士課程（後期）進学審査要項の改訂、広域看護学コース定員増・カリキュラム編成WGの新設、臨床教授の選考、第4回は、科研費に向けたピアレビューの試行、理事長選考、第5回は、アクティブラーニングの食堂利用、CALL教室の使用法、第6回は、就職に関する推薦基準、業績DBのresearchmapの利用、第7回は、20周年記念式典、第8回は、第3期中期計画案、平成30年度予算編成方針、教員評価の基本方針、第9回は、大学組織および看護研究交流センターの一部改正、各種委員会規定の変更、第10回は、大分県立看護科学大学学生表彰規程の制定、予防的家庭訪問実習の運営体制の変更、授業料減免制度の拡充、期限付き雇用職員の無期転換ルール適用についてなどが審議された。第11回は、教員の昇任、職員退職手当規定や業務方法書や期限付雇用職員就業規則など10件の規程改正、各種委員会構成、

独立行政法人評価に係る平成 30 年度計画案、平成 30 年度予算案、平成 29 年度進級判定、未来応援基金の創設などが審議された。また、国際看護学研究室の Myoung-Ae Choe 特任教授と学外委員として多大にご協力いただいた葉玉哲生委員が退任挨拶をした。

平成 29 年度は委員会やワーキンググループ等の編成を変更し、各委員会のミッション、分掌事項など明確にしたことから、来年度は各委員会等の目的状況や課題を共有し、改善を図る。また平成 30 年度の中期計画が順調に遂行できるよう推進する。

1-4 教授会

学長 村嶋 幸代
学部長 藤内 美保
事務局長 飯田 隆次
委員 影山 隆之、市瀬 孝道、稲垣 敦、梅野 貴恵、小野 美喜、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、ジェラルド T シャーリー、高野 政子、濱中 良志、林 猪都子、Myoung-Ae Choe、福田 広美、赤星 琴美、安部 眞佐子、伊東 朋子、石田 佳代子、小嶋 光明、川崎 涼子、品川 佳満、関根 剛、宮内 信治、平野 互、森 加苗愛、吉田 成一、吉村 匠平、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、杉本 圭以子、岩崎 香子、定金 香里

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は 4 回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。これまで学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞の表彰であったが、今年度は在学途中で表彰する奨励賞を新たに表彰対象とし、2 年次後期の進級試験で上位の成績であった学生が承認された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

平成 30 年度入学生は 83 名、卒業生は 84 名であり、今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、優秀な学生の輩出に向けて努力する。

1-5 研究科委員会

学長 村嶋 幸代

研究科長 影山 隆之

事務局長 飯田 隆次

委員 藤内 美保、市瀬 孝道、稲垣 敦、梅野 貴恵、小野 美喜、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、ジェラルド T シャーリー、高野 政子、濱中 良志、林 猪都子、Myoung-Ae Choe、福田 広美、赤星 琴美、安部 眞佐子、伊東 朋子、石田 佳代子、小嶋 光明、川崎 涼子、品川 佳満、関根 剛、宮内 信治、平野 互、森 加苗愛、吉田 成一、吉村 匠平、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、杉本 圭以子、岩崎 香子、定金 香里

本委員会は、大学院の教育課程の編成、学生の入学、修了等の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行う。

本年度は5回開催し、入学試験の可否判定・進学判定を行った他、修了判定等について審議し、課程修了者の修了を認定した。

学生表彰に関する規程が変更され、大学院生も対象となったので、次年度以降はこれについても審議事項とする。

1-6 自己評価委員会

委員長 佐伯 圭一郎

副委員長 関根 剛

委員 宮内 信治、吉田 成一、草野 淳子、緒方 文子、高橋 勝三

自己評価委員会は、自己点検・自己評価活動および第三者評価受審に関わる活動を主たる分掌事項としている。また、自己評価に関連して、年報作成や学内の基本情報としての議事録の整備等を担当している。さらに、FD活動に関する事項および人権・ハラスメント対策に関する各種活動も担当している。本年度からFDワーキンググループが設置され、本委員会の関根副委員長をWGリーダーとして活動を開始した。

1. 自己点検・評価

平成28年度年報を編集し、公開した。議事録の整備状況を随時確認するとともに、表記上の問題等についてチェックし、必要に応じて修正を依頼した。

学内の各種規定や委員会の分掌事項に関する意見や提案を学内の教職員から文書で求め、項目を整理したものを理事会に提出した。

2. 人権啓発・ハラスメント防止

人権に関する研修会として、3月7日にLGBTに関する研修会は奥結香氏を講師として開催した。教職員32名が参加した。また、3月23日には、アクティブラーニングにおけるクリッカー使用に関する研修会においてアカデミックハラスメントに関する視聴覚教材を視聴した。

ハラスメント対策の体制を維持するとともに、ハラスメント相談員の研修会を開催した。本年度の相談員への相談件数は0件であった。

平成30年度から、自己評価委員会は委員会としてはその分掌を大きくは自己点検・評価委員会とFD/SD委員会に分けて引き継ぐことになる。円滑な分掌事項の引継が残された活動である。

1-6 1) FDWG

リーダー 関根 剛

メンバー 吉村 匠平、定金 香里、緒方 文子、中釜 英里佳、巻野 雄介、高橋 勝三

本年度はFD活動として次の活動を行った。なお、すべてがFDWGのみの担当ではないがこの項に整理した。

- (1) 新任教職員研修：4月3、4日に開催し、新任教職員10名と前年度中途採用者2名が参加した。
- (2) 科研費申請研修会：9月26日に、科研費申請に関する研修会を開催した。
- (3) アニュアルミーティング：3月20日にアニュアルミーティングを開催した。演題は20題が発表され、当日の参加者は42名であった。
- (4) アクティブラーニングに関する研修会：3月23日にアクティブラーニングにおけるクリッカー使用に関する研修会を開催した。
- (5) 授業評価アンケート：全講義・演習科目で実施する前段階の試行として、1年次開講の講義・演習科目すべてを対象に授業アンケートを実施した。一部実施できなかった科目もあるが、29科目で実施し、各科目の項目別平均評価を学内外に公開した。
- (6) その他：FD関連、FDに関する研修会等の情報提供を継続して行った。

1-7 教育研究委員会

委員長 藤内 美保

副委員長 濱中 良志

委員 佐伯 圭一郎、吉村 匠平、石田 佳代子、川崎 涼子、小嶋 光明、飯田 隆次、染矢 哲朗

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例の委員会として11回

の会議を開催した。

1. シラバスの授業科目のフォーマットを改変した。目的は学生の学習意欲を促進し、授業方法や授業形態にも工夫を凝らし学修を活性化するためである。そのため、「具体的な到達目標」「その他授業の工夫」「時間外学修」「評価方法と評価割合」を追加した。
2. 高校までの理系の選択科目の違いが入学後の学習に支障がないよう自然科学の基礎を導入しているが、その評価のために入学直後に試験を実施し、前期終了後の試験結果と比較したが、問題となることはなかった。
3. 実習運営小委員会は、実習ガイドブックを刷新し、内容を充実した。また看護技術修得プログラム、看護スキルアップ演習、1～6段階の看護学実習について、演習や実習の連携、積み上げ、一連の流れ等に関する評価を行った。

第1段階～4段階の看護技術修得プログラムも順調に運営でき、卒業直前の4段階の看護技術演習では、大分赤十字病院の看護師13名が2日間指導・支援し、学生は実践的な学びができた。

実習室の水銀血圧計の環境測定を行い、データ化した。夏場の演習では学生への健康への影響もあることから、空調の温度管理を柔軟に対応するようにした。

4. 実習施設合同会議を7月19日に開催した。飯塚病院の森山由香看護部長の「新人看護師の成長を支援する職場づくり」の講演、および本学の実習説明、実習施設の領域毎に意見交換会を行い、大変貴重な機会となり実習施設の方々の満足度は高かった。
5. 看護スキルアップ演習はワーキンググループを立ち上げて活動した。ロールプレイの発表日は、本学卒業生がアドバイザーとして参加した。次年度は新4年次生の養護教諭Ⅱの実習時期と重なるため、時期や演習目標、内容を検討し、10月1週目に集中的に実施する計画とした。
6. 健康科学実験は、人間科学系の教員の合同授業で10領域の実験・実習を組み込んでいる。本学の特長となる科目であり、科学的根拠を追求した科目であることから、看護系教員への更なる理解を深め専門科目につなげられるようオリエンテーションに参加を呼びかけるとともに、オリエンテーション冊子を全教員に配布した。
7. 進級試験は、基本的かつ重要な知識を2年次で習得するという本来の目的を達成できる方法に見直し3年目の実施となる。教員全員が出題することで2年次に応じた難易度とし、プール問題を確保した。本試験での合格率は約56%、再試験では全員が合格した。
8. 養護教諭養成課程では、3年次で履修する学生を12名とした。履修カルテの作成や面談を行った。大分市教育委員会（大分市内小中学校）や大分県教育委員会（特別支援学校）との円滑な調整により、2月の1週間の養教実習Ⅰを初めて実施し無事に終了した。また、再課程認定申請の準備を行った。
9. 卒業研究は、84名の卒業研究論文、要旨、パワーポイントが全て提出され、12月6日、7日の卒論発表会で84名全員がプレゼンテーションした。卒論配置方法の見直しのため、2年次生および教員に卒論配置のアンケートを行った。また、養護教諭養成課程のスケジュールのため、卒論配置を12月とし、2ヶ月間早めに配属研究室を決定した。
10. 国家試験対策は、模試や補講の他、新しい取組として、国試対策の勉強の雰囲気作りのため、カレッジホールとメディアセンター前の廊下に国試問題を毎月更新し貼りだしたり、卒論発表

会後に昨年度国試受験した大学院生の体験談の時間を設けたり、毎日大学で勉強するよう各研究室に声かけした。

11. 総合人間学は、教職員から講師を募集し、8名の講師とテーマを決定した。COC+による他大学学生の単位互換制度も導入し Web 受講を可能にしている。
12. アクティブラーニングの実態と使用場所のニーズ調査を行った。その結果、アクティブラーニングのための使用場所について、1 学年全員が 1 ヶ所でできるよう食堂を有効利用することが決定し（利用可能時間は 1 限、4 限、5 限に限定）、必要な機材などを購入した。
13. 平成 29 年度のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーアンケートを本委員会が実施することとなった。評価項目も見直し、ディプロマポリシーアンケートは日本看護系大学協議会が提案しているコアコンピテンシーを参考にした。カリキュラムポリシーの評価項目も本学のカリキュラムポリシーに準拠した項目とした。2 年次と 4 年次生に 2 月に実施した。
14. 大分県立看護科学大学競争的研究費の募集、審査、採択をした。今年度から科研費で不採択であったが A 判定研究は奨励研究で積極的に募集した。奨励研究 3 件、先端研究 3 件、プロジェクト研究 1 件が採択された。
15. 大分県立看護科学大学の学生表彰規程を作成し、従来の卒業式に授与する学長賞、優秀賞、学生賞以外に、2 年次に実施する進級試験結果の上位 3 名を奨励賞等の表彰を追加した。
16. 文科省の看護教育モデル・コア・カリキュラムに関する情報収集と全教員への説明会を実施した。

今年度は、学生のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーアンケートの調査項目を変更して調査した。今後は、この結果を分析し、カリキュラム評価を行い、改善を図る。また同時に、文科省の看護教育モデル・コア・カリキュラムのためのカリキュラム検討も今後進めていくため、現状のカリキュラムや教育内容の過不足などを自己評価していくことが必要である。

看護教諭養成課程の教育は各学年 10 名を超える履修者を順調に教育し、来年度で 4 年目を迎える。4 年次でも養教実習 2 が初めて開始され、就職支援も必要となり、適宜教育指導を行っていく。

また、次年度は看護系実習の充実および連携を推進し、効果的な看護学実習教育を行うため従来の実習代表者会議を「看護学実習委員会」とし組織として位置づけることで、一層の実習教育の強化を図る。

1-7 1) 国試対策小委員会

委員長 小嶋 光明

委員 伊東 朋子、石丸 智子、後藤 成人、佐藤 愛、堀 祐子、山田 貴子、染矢 哲郎

看護師国家試験合格率 100%を目指し、学生と連携して業者・学内模試や補講を立案し実施した。具体的活動としては、国家試験ガイダンス、業者模試 7 回、学内模試 3 回実施し、学習への自覚を促した。また、業者模試の結果を分析して、学生が苦手な領域を絞り込み、夏休み直前（7 月）と冬

休み明け（1月）に集中補講を行なった。また、4年次生の所属研究室の教室主任に模試の結果を報告し、指導を求めた。さらに、成績不振の学生に対しては委員が個別指導を行い、学習支援を行った。平成30年3月26日に発表された合格率は、全国（新卒）の96.5%に対し、本学の合格率は100%であった。

平成30年度も引き続き看護師国家試験合格率100%を目指して昨年度と同様の学習支援を行なっていきたい。

1-7 2) 実習運営小委員会

委員長 石田 佳代子

委員 足立 綾、石丸 智子、大矢 七瀬、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、徳丸 由布子、森 加苗愛

実習運営小委員会の主な活動目的と役割は、① 1年次から4年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）を企画・運営・評価すること、② 総合看護学実習の運営を行うこと、③ 学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地実習における環境整備を行うこと、である。月1回の定例会議および臨時会議（1回）を開催し、上述に基づき、主に以下の活動を行った。

1) 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第1～3段階看護技術演習（ファーストステップ：2年次後期、セカンドステップ：3年次前期、サードステップ：4年次前期）を実施した。第4段階看護技術演習（フォースステップ：4年次2月、自主参加型）には、学生68名が参加した。参加した学生からは、大分赤十字病院の看護師と教員による丁寧な指導によって演習で経験できたことが自信につながったなどの肯定的な意見が多かった。

2) 看護技術習得確認シートの作成および卒業前の看護技術習得状況の調査

卒業前の看護技術習得状況（「AA」46項目の習得状況）の到達度について、4年次生を対象とした無記名自記式調査（平成29年11月実施、回答者48名、回収率57.2%）の結果、回答者全体の70%以上の学生が「AA」46項目のうち42項目（平成28年度の調査では43項目で1項目減少）、80%以上の学生が40項目（平成28年度の調査では38項目で2項目増加）を「単独で実施できる」と自己評価した。「AA」および「A」項目を中心に達成レベルの見直しを行っており、次年度の1年次生から改訂版を配付できるように準備を進めている。

3) 総合看護学実習の運営

全体的なスケジュールや流れは昨年度と同様に実施した。

実習目標を見直し、ケア提供システムにおける保健・医療・福祉の連携を学ぶこと（連携能力）と

マネジメント能力を強化することに重点を置くように変更した。また、次年度の実習受入れに関し、新規施設（地域包括ケアシステム推進の先駆的施設）を1施設増やした。そして、本実習の最大の特徴は、学生が希望領域を選択でき、計画から実施・評価までを学生が自身で創り上げていく点にあるが、近年、学生が希望する領域と各実習施設（領域）の配置人数等が合致していない部分があり、その調整がスムーズにいかないケースがあり、本年度は臨時会議を1回開催して調整した。施設決定のプロセスにおいては、学生個々の希望と実習施設（領域）とのマッチングや、実習目的と各実習施設で学習可能な内容とのマッチング、県内の広い地域での実習展開とそれに伴う負担など、諸事情を勘案して大学としての方針を定め、実習配置のスムーズな調整につながる改善策を検討する必要がある。

なお、次年度より本実習の運営は別組織に移行する予定である。

4) 各実習施設および学内実習室の実習環境の整備等

各実習施設の整備については、新たに実施したこととして、看護師国家試験問題集（レビューブック）を研修・実習センターおよび実習施設の学生控室等（計6カ所）に配置した。地域・在宅看護論実習用に電子体温計を購入し、整備した。また、実習センターの管理簿を更新し、倉庫内の物品整備をした。学内実習室の実習環境の整備については、演習等で使用する物品が過不足なく効率的に運用できるような整備に努めた。

5) 実習ガイドブックの作成と関連マニュアルの見直し

実習ガイドブック（2017年度版）を作成した。メモ帳の取り扱いなど、個人情報の取り扱い方に関わる内容を追加するなどして内容を適宜修正した。次年度のガイドブック作成にあたり、毎年更新が必要な内容は削除して各段階実習における共通事項となる内容を中心に全体を見直し、実習指導指針との整合性を検討しながら改訂した。また、関連マニュアル（個人情報取り扱いに関するガイドライン）を改訂した。

本年度より新たに実習指導指針の保管業務が加わった。

以上の他、看護学実習要項のサイボウズ掲載、学生および教員に対するナーシングスキル（e-learning 教材）の活用の推進、新入生の実習服等の注文、実習関連予算の管理などを例年通り行った。

平成29年10月31日に文部科学省より「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」が公表され、今後のカリキュラム検討の基礎資料として役立てられるように、現時点における問題や課題などを整理する目的で、全教員を対象に看護技術修得プログラムおよび看護スキルアップ演習の評価アンケートを実施し、意見を集約した。

1-7-3) 看護スキルアップ演習 WG

リーダー 伊東 朋子

メンバー 足立 綾、佐藤 愛 (9 月から)、佐藤 弥生、中釜 英里佳、林 猪都子、山田 貴子、渡辺 康人 (8 月まで)

教育研究委員会下部組織の看護スキルアップ演習 WG として、看護スキルアップ演習科目の実施日時が 9 月 8 日～10 月 3 日までの期間であったので、当該科目の事前準備、事後処理等の計画運営を行った。そのための WG 会議を 6 月より開始し、看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいにして、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開されていくように準備・調整・展開した。昨年の反省会で上げられていた当該科目の実施時期については検討し、変更実施した。演習発表会に講師として依頼する卒業生や修了生の人選および派遣依頼の手続き、演習発表会後には、提出レポートの集計やまとめなどの事後処理等にも対応した。

今年度の課題として、次年度以降、カリキュラムの改変時には 4 年次生の卒業研究、国家試験準備等との学習の効率性を考慮しながら、実施時期と内容についての検討が必要である。また演習発表会でのロールプレイに用いる物品等についても現在、臨床で使用されている物品に準拠した物品を準備するように配慮が必要である。

1-7-4) 進級試験 WG

委員長 濱中 良志

委員 佐伯 圭一郎、石田 佳代子、甲斐 博美

教員に進級試験問題を本試験・再試験をそれぞれ 3 問以上、作成依頼を行い、WG 内で推敲を行った。

平成 30 年 2 月 26 日に 2 年次生を対象に本試験を行い、合格率は 56%であった。

再試験を 3 月 5 日に行い、全員合格となった。

今年度の本試の合格率 56%が、昨年度の 80%に比べて低かった。これは、問題の難易度が上昇したことと、学生の試験への取り組みが遅かったことによると推測する。

1500 問題を目指して、問題作成を教員に依頼し進級試験を実施する。

1-7-5) 養護教諭養成部門

委員長 吉村 匠平

委員 伊東 朋子、関根 剛、赤星 琴美、草野 淳子、秋本 慶子、浜松 弘一

養護教諭養成課程の運営を担当した。本年度の活動は以下の通り。平成 27、28 年度入学の履修者を対象にした履修カルテ面談、図書整備（学術誌、雑誌、図書）、新入学生全員を対象としたガイダンス、オープンキャンパスでの高校生対象の相談会、日本養護教諭養成大学協議会への参加、履修希望者（1 年次生）に対するガイダンス、非常勤講師の土日講義対応、養護実習 I の開講に伴う教材全般の整備、実習校選定～実習依頼～実習校における週案作成サポート、実習校の巡回指導、平成 28 年度入学者対象の養護実習 I 履修者選考、養護教諭養成特別別科への進学を希望する 4 年次生 2 名を対象とした進学ガイダンスおよび受験指導、大学パンフレットへの関連情報の掲載、学年進行に伴う新規開講科目を中心とした時間割調整、文部科学省への教職課程変更届の提出を行った。本年度の課題であった、養護実習 I の運営に伴う大分市教育委員会、大分県教育委員会、実習校との連携については、順調に進めることができた。教育職員免許法改正に伴い、全国の教職課程を有する全ての大学で、再課程認定が行われるが、申請に必要な新規開講科目の開講に必要な人的配置に関しても滞りなく進めることができた。

平成 30 年度の課題は、再課程認定を受けることである。また、養護実習 II の開講に伴い教育委員会との連携の下、実習環境を整備する必要がある。本年度、養成課程一期生が採用試験を受験する。履修生の進路指導に関しても、大きな課題と認識している。

1-8 学生生活支援委員会

委員長 林 猪都子

副委員長 小嶋 光明

委員 関根 剛、岩崎 香子、卷野 雄介、樋口 幸、堀 裕子、酒井 敦美、浜松 弘一

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

学生関連イベントの企画・運営として、全学生オリエンテーション（4 月 7 日）、新入生オリエンテーション（4 月 10 日、4 月 11 日）、コンタクトグループの編成と会合（4 月 7 日）、全学スポーツ交流会（4 月 21 日）（ドッジビー、全学生・教職員への実況中継）、キャンパスクリーンデー（5 月 10 日）、DV 講演会（5 月 25 日）を行った。

学生相談は、各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの、GPA 下位 5 名に面接、1 年次の入学直後に既習科目・状況調査、前期前半終了時に学習状況調査を実施、1 年次生に対する学習相談（7 月 3 日）学生 7 名参加）、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。

学生の自主活動への支援は、サークル活動支援、若葉祭における学生支援全般、自治会活動支援などを行った。若葉祭の運営支援については、平成 30 年度の若葉祭を 20 周年記念事業として取り組んだ。

実行委員会の組織の再編成、マニュアルの作成、20 周年記念事業特別企画（予防的家庭訪問実習発表、風の広場の芝刈り、大分市（自殺予防対策）と大分県(エイズ対策)の企画展示の準備のため、会議を月 1 回開催し、学生を補佐した。

経済支援は、奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。HP に奨学金情報を整理して掲載した。

健康支援は、学生の健康管理支援（集団健康診断、風疹抗体検査（3 年次生一部）、個別相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室保健師を中心に行った。保健室の学生相談件数は 554 件で、そのうちメンタルヘルスによる学生相談件数は 63 件であり、メンタルヘルス事例に対応した専門職種による学生支援が今年度から可能となり、コンサルテーションを医師からは年 0 件、カウンセラーからは年 30 件（今年度新規 7 件）実施した。保健室の活動についてはネット内に保健室年報と保健室活動報告を提示し教職員に周知した。

交通安全推進については、交通安全指導の実施（自動車講習会 4 月 20 日・自動二輪実技講習会 7 月 1 日）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交痛事故対応、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）などを行った。

学生生活に関する調査は、学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）について実施した。学生生活実態調査の自由コメントについては各部署、担当委員会ごとに整理し、それぞれに対応を検討することを依頼した。

その他、新人教員オリエンテーション（4 月 4 日）、九州地区公立学生部長会議（9 月 9 日）、九州地区学生指導研究集会（9 月 7 日～9 月 8 日）、学外者クレーム対応などを行った。

若葉祭の運営については、実行委員会の組織の再編成や各担当者のマニュアルの作成をするなど 1 年間学生を補佐してきたが、今後は学生が自立して若葉祭を運営するため本来の姿に戻していくことが課題である。

メンタルヘルスにおける医師やカウンセラーの活用は相談件数をみると十分に活用できていない。今後保健室保健師と相談しながら活用方法について検討する。

1-9 就職支援委員会

委員長 梅野 貴恵

副委員長 杉本 圭以子

委員 田中 佳子、足立 綾、緒方 文子、神崎 正太、浜松 弘一

就職支援委員会は、学部生の就職・進学に関わることや就職広報及び就職後のフォローアップ、U

ターン支援に関することを主たる分掌事項としている。学生の就職・進学のパ滑化と県内就職率 50% を目指して、就職・進学活動を支援し年間計画に沿って 1)~7)の活動を行った。昨年に引き続き、就職支援相談員 1 名を配置し、3 年次生全員に就職面接を実施し、学生の就職・進学希望に関する実態を把握し、希望者には適宜相談に応じた。

- 1) 学生の就職・進路状況の確認と支援：卒業生 84 名であり、就職決定者 71 名（看護師 71 名）、進学者 13 名（保健師 7 名、助産師 5 名、養護教諭 1 名）であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行い、メールや面談で情報提供した。また、選考試験に備えて模擬面接を 3 回開催し、47 名の学生に実施した。本年度就職推薦を実施している 3 か所の施設の詳細情報入手次第、4 年次生にメールで周知し、希望者を募集し委員会内で選考した。また、推薦基準（委員会内規）について明らかにし、nekobus 上で学生にも周知した。
- 2) 就職・進学ガイダンスの開催：3 年次生対象に就職・進学ガイダンスを 6 月 16 日（金）、2018 年 2 月 21 日（水）の 2 回開催した。今年度は、第 4 段階実習前の 7 月 12 日（水）に、自らの進路を考える機会とするために進路の講話を実施した（株式会社マイナビ）。自己の看護観構築の必要性と臨地実習の重要性を認識し、病院説明会やインターンシップ参加の動機づけの機会となった。次年度は、ガイダンスの 1 つとする。2 月開催時には、卒業生 2 名を招聘し就職活動の体験談や入職後の活動状況を話してもらい、4 年次生 2 名にも就職活動の体験談を話してもらった。3 年次生も熱心に聞いており、卒業生や 4 年次生に質問していた。また、将来の転職や U ターンに備えて、本学の就職相談室の利用や各都道府県のナースセンターに相談し有料の転職サイトを利用しないことを説明し、「とどけるん」の配布を行った。6 月と 2 月には、県内のインターンシップの開催状況や参加の仕方について説明し、県内施設インターンシップ参加の促進を行った。
- 3) 県内施設就職説明会の開催：3 月 1 日（木）に 3 年次生対象に県内施設就職説明会を開催し、28 施設参加があった。説明会は午前・午後の 2 部に分けて、学生全体へ施設概要を 5 分説明し、その後施設ブースでの個別相談を行った（60 分間）。28 施設のうち 14 施設は就業する卒業生の参加もあり、個別相談では卒業生の話が聞けて好評であった。
- 4) 県内施設訪問：大分県立病院、大分大学医学部附属病院、厚生連鶴見病院、関愛会佐賀関病院看護部を就職支援委員会委員が訪問し、卒業生（新卒者）の活動状況を把握した。各施設の新卒者の適応状況の確認、新人教育体制や今後の卒業生の活動への期待やキャリアパスなどの意見交換を行うことができた。
- 5) 各種講座の開催：履歴書の書き方・面接講座は株式会社マイナビに講師を依頼し、4 月 18 日（火）4 年次生を対象に開催した。書類作成時期であり熱心にメモを取るなど好評であった。病院選び・身だしなみ講座は、2018 年 2 月 14 日（水）3 年次生を対象に、株式会社マイナビに講師を依頼し、九州内及び大分県内の看護職募集の現状や自分にあった病院の探し方や見学会マナーと身だしなみ講座を開催した。その後の県内施設説明会においてマナーや身だしなみを整え、積極的に質問する姿勢に活かされた。
- 6) 卒業生の県内施設 U ターン支援と県内施設在職状況調査：ホームカミングデイの際に、「大分県内求人情報」の冊子とナースセンターより提供された施設情報の冊子を設置し、卒業生に情報提供を行った。73 施設に県内施設説明会募集案内送付時に、本学卒業生・修了生の在職状況調査協力依

頼を実施した。54 施設に就職している卒業生・修了生を確認した。

7) 求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国 12467 人（315 件）、大分県 249 人（24 件）であり、平成 28 年度より全国の求人が 340 人（2.65%）、大分県が 5 人（1.96%）減少した。全国及び県内からの求人訪問対応は 26 件であった。

本年度は県内出身者が 59.8%で県内就職率は 45.1%であった。今後も県内就職率 50%を確保するための方策として、ガイダンス等の際に積極的に卒業生の招聘を行い、在学生との交流の機会を設ける。また、県内施設に就業する卒業生の状況を確認し、1 年次生に情報提供を行う。2025 年問題による高度急性期施設の病床数削減等により、看護職員の採用数が減少（本学求人数平成 26 年度比 36.5%減少）しているため、株式会社マイナビ等から情報収集し、最新の情報を学生に提供していく。

1-10 広報・公開講座委員会

委員長 高野 政子

副委員長 安部 眞佐子

委員 品川 佳満、石丸 智子、後藤 成人、恵谷 玲央、矢部 美香

1) 若葉祭教職員企画

5 月 13 日、14 日に開催された若葉祭において、教職員と学生のコラボイベントの企画募集と、パネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示など当日の運営を行った。全体の参加者は 2 日間を通して 899 名で、イベントは 12 企画を開催し、パネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示により、大学の教育内容や設備の紹介ができた。イベントへの総参加者数は 593 名であった。教職員と学生がコラボしてイベントを行うことで、学生と教職員との距離の近さが、今後本学を受験する予定の高校生などにアピールできたとともに、地域の人々とのふれあいの場ともなった。卒業研究のポスター展示は全研究室に協力してもらい 17 枚掲示し、7 月のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

2) オープンキャンパス

平成 29 年度のオープンキャンパスは 7 月 16 日（日）に実施した。当日は 371 名（高校生 242 名、保護者 123 名、その他 6 名）と多くの参加があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や、1 年次生の合格体験発表、3 年次生、4 年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業や体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。特に在学生が相談コーナーや体験イベントを担当したことや、学内の誘導を行ったことは、参加者が在学生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。

3) 地域ふれあい祭り

11月5日に大学に隣接するみどりの王国で開かれた「ななせの里まつり」に参加した。健康増進プロジェクトが身体測定をするブースの隣に、大学を紹介するパネルを展示し、大学紹介ビデオを流し、大学案内パンフレットやチラシを配布した。注目を集めるために実施した握力測定が好評で、400人を超える人が訪れ、年齢別握力の平均値を記載したチラシを配布しながら保健指導を行なった。また、お祭りのイベントへ参加し、玉入れや駕籠かきレースに学生チームのみならず、教職員チームも参加し、地域とのふれあいを図った。

4) 出前講義

看護系進学を希望する高校生を対象とした高校の出前講義に講師を派遣した。高校からの依頼で、教授と准教授、助教各1名を派遣した。県立中津北高校（10月13日）、県立臼杵高校（6月22日）、県立大分南高校（9月19日）の3件であった。その際、大学案内パンフを持参し広報を行った。

5) 大学見学・ミニオープンキャンパス

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者からの大学見学等の申し込みに随時対応した。県立由布高校（7月20日）1年生と教員40名が来学した。個別の大学訪問3組（8月18日、8月22日、12月27日）には大学の概要説明を行った後、入試や卒業後の進路についての質問などを受け、施設見学等対応した。

6) 公開講座

平成29年度の公開講座は9月9日（土）に大分駅前ホルトホール大分 大会議室で開催した。メインテーマは「災害に備えるー熊本地震から学ぶー」と題して、3名の学外講師を招聘し、本学の教員は、看護アセスメント学の石田 佳代子准教授と、地域看護学の川崎 涼子准教授の2名が演習を実施した。参加者は187名であった。公開講座の受講者の評価は、「大変良い」と「良い」が92%で高評価であった。チラシを作成し県下の病院や施設、保健所への配布や、6月の大分県看護協会総会など早期に配布したのが効果的であった考える。市報など地域広報に加え、マスコミや行政機関や病院等に参加を呼びかけた。

7) 大学オリジナルグッズの作成

大学名が入ったボールペン（1000本）と付箋（1200個）を大学オリジナルグッズとして作成し、大学広報の1つとして活用できるようにした

8) 大学HPおよびマスメディアによる広報

昨年度リニューアルした大学HPの運用を行った。大学のイベント案内（若葉祭、オープンキャンパス、公開講座・講義など）や、その実施報告（大学アルバム）など、43件を掲載した。また、大学アルバムでは、学生のボランティア活動や地域での社会貢献活動についても随時に公開した。教員の研究紹介を毎月更新し12件を掲載した。定期的に年3回（4月、7月、1月）大学HPに掲載している大学Q&Aを更新し、入試情報等を新たな記事にして公開した。また、大分県広報広聴課の広報

番組である OBS テレビ「オオイタコレクション」では「看護とものづくり」のテーマで看護研究交流センターの活動とへ平成 30 年度の創立 20 周年記念事業の広報をした。新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、番組制作に協力した。大学イベントの開催については、定期的に県政記者クラブに情報提供を行い、情報発信を行った。大分合同新聞での学長の連載記事や、教員の紹介など、計 32 件が掲載された。

9) 大学案内パンフレットの作成

委員会委員 2 名が大学案内パンフレット WG に参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2019 年度版の次年度 4 月中に納品できるよう適宜 WG を支援した。

10) 平成 29 年度の課題と平成 30 年度の計画

今年度の課題は、1)地域社会のニーズを満たすテーマの公開講座を開講する。2)大学の教育研究活動の状況や、その活動の成果に関する情報をホームページで公開する。3)本学のイベントの開催情報や学生の諸活動等をメディアやホームページ、広報誌等で発信する。次年度も、平成 30 年度と同様に、大学 HP の管理 (大学アルバム、新規に Face book、研究紹介等)、大学案内の作成、オープンキャンパス、公開講座、出前授業などに取り組む。

1-10-1) 大学案内パンフレット WG

リーダー 杉本 圭以子

メンバー 大矢 七瀬、足立 綾、恵谷 玲央、秋本 慶子、馬場 奈穂 (7 月末まで)、藤原 やよい (8 月から)、矢部 美香

2019 年版大学案内パンフレットを、明るくさわやかなイメージのパンフレットになるよう作成した。表紙を始めとして、学生、学部卒業生、大学院修了生の紹介は表情豊かな写真になるよう撮影を依頼し、全体を通して明るい印象とした。昨年までの内容をふまえつつ、新たに「学生支援のページ」を作成し、本学の特徴をわかりやすく伝えるようこころがけて作成した。

1-10-2) 広報紙 WG

リーダー 飯田 隆次

メンバー 中釜 英里佳、矢野 昌哉、神崎 正太

平成 24 年度に後援会との協働で創刊した大学広報紙「風のひろば」の第 10 号及び第 11 号をそれぞれ 6 月、12 月に発行した。本学の現在の取組や地域との協働事業、トピックス、研究紹介などを掲載し、在学生の保護者や卒業生を始め、関係機関に配付、広く情報発信を行った。今年度は大学院

修了生にも送付対象を広げた。印刷部数は2,500部とした。

1-10-3) 学外 Web WG

リーダー 品川 佳満

メンバー 後藤 成人、恵谷 玲央、宿利 優子

学外 Web サイトの更新・掲載（大学案内、イベント案内・報告など）およびコンテンツマネジメントシステムの管理・運用を行った。また、8月にシステムの利用ユーザ9名に対して学外 Web サイトの編集に関する基本方針、編集権限・担当に関する説明と Web ページの作成・編集方法に関する操作研修を行った。

1-10-4) 英文 Web・パンフレット WG

リーダー Gerald T. Shirley

メンバー 桑野 紀子、岩崎 香子、徳丸 由布子、馬場 奈穂（7月末まで）、久保 紘子

本年度の4月より本学英文 Web の改訂作業に取り組み、教職員の方々のご協力の下、Faculty ページをリニューアルし、10月1日に全ページの改訂を終了した。

英語 Website に関して平成30年度にトップページの最新情報を掲載すると共に留学生のための情報ページを作成・掲載する。

1-11 国際交流委員会

委員長 G.T. Shirley

副委員長 濱中 良志

委員 Myoung-Ae Choe、伊東 朋子、桑野 紀子、徳丸 由布子、吉川 加奈子、久保 紘子

国際交流委員会が平成29年度に行った活動は以下のとおりである。

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

7月に蔚山大学校と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的とした国際交流協定を締結した。7月17日から21日までの5日間、学部交流派遣である学部生5名と同行教員3名を本学に受け入れた。

2) 本学学生の派遣

7月に蔚山大学と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的としたMOUを締結した。本学からは8月21日から25日までの5日間、学部交流派遣として学部生4名を同行教員1名と共に蔚山大学に派遣した。交流の成果を記載したwebページを派遣学生が作成した。

3) 第19回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催で第19回看護国際フォーラムを10月28日に、別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。テーマを「はたらく看護職のストレスを活力に換える！」とし、オーストラリアから1名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は174名と前年度より減少したが、参加者アンケートの結果では満足度が高かった。

平成29年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容を十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

1-12 図書委員会

委員長 甲斐 倫明

副委員長 宮内 信治

委員 堀 裕子、山田 貴子、白川 裕子、高橋 勝三

図書館内にブラインド施工を実施し、日差しによる館内温度上昇を低減する対策を行い、館内温度の低減効果を確認した。リユース除籍の規定「本学附属図書館における図書館資料の除籍及び処分に関する内規」の作成および学外利用者内規の改定を行った。リユースデーを7月14日-21日に開催し、約60%がリユースされた。セキュリティ対策を検討するために、時間外利用の実態調査をおこなった。この結果、教員の25%が月1-2回、院生の50%程度が月1-2回以上使用していることがわかった。時間外利用の実態調査の回答で要望のあった時間外貸出しについて、ルール「大分県立看護科学大学附属図書館時間外貸出案内」を整備し、2月-3月を試行期間、4月から運用開始することにした。教育DVDに代わる「Education Video Online」の導入を決定し、DVDからクラウドで利用できる教育ビデオを推進することにした。

図書の紛失対策として時間外利用ができる仕組みを整備したが、この効果を検証していくと同時にセキュリティ対策をさらに検討していく必要がある。館内の夏冬の温度管理はブラインド施工と設定の温度管理によってより快適な館内となるように今後も確認していく必要がある。

1-13 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成 29 年度に実施した学部入学試験、大学院入学試験について審議し、入学試験全般を統括した。今年度の委員会は 22 回（入試問題印刷・チェック、集計作業、合否判定案作成等は除く）で平成 28 年度よりも 2 回、平成 27 年度よりも 6 回減少し、業務は効率化され、委員の負担は軽減した。

大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（2 回、8 月 31 日、12 月 12 日）および試験場設定大学連絡協議会（7 月 11 日）の他、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（5 月 23 日-25 日）、大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会（6 月 21 日）に入試委員会委員が参加した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は 25 箇所、高校教諭に対する進学説明会（6 月 9 日）の来場者は 25 名（前年度より 9 名減、26%減）であった。この他、若葉祭（5 月 13 日-14 日）及びオープンキャンパス（7 月 16 日）の会場に、進学相談コーナーを開設した。これらの合計として、290 名（前年度より 98 名減）の高校生や保護者ほかの相談を受けた。

大学院入学試験は例年通り 8 月に実施した（8 月 26 日）。大学院博士課程（前期）入試は、筆記試験と面接試験を行った。受験者数は博士課程（前期）41 名（前年度より 2 名増、5%増）、博士課程（後期）4 名（前年度より 2 名減、33%減）であった。これに加え、今年度は学部の前期日程と同日に、大学院博士課程（前期）2 次入試（定員 8 名）を実施した。入試内容は筆記試験と面接試験で、受験生は 7 名であった。

学部入試に関しては、平成 27 年度に設置された「学部入試のあり方検討会」の答申を受け、今年度の入試から特別入試の募集人数を 35 名から 30 名に減らし、県外推薦枠を廃止して教科評定平均値 4.0 以上の条件を課した。また、これに伴い、一般入試（前期）の募集人員を 35 名から 40 名に増員した。このため、特別入試（11 月 18 日）の志願者数は 84 名（前年度比 26%減）、社会人 2 名（前年度比 33%減）で、合計では前年度より 30 名減少した。学部の一般入試（前期 2 月 25 日、後期 3 月 12 日）の志願者数は前期 118 名（前年度より 69 名減、37%減）、後期 154 名（前年度より 47 名減、23%減）、合計では 272 名（前年度より 116 名減、30%減）であった。今年度は、後期試験の問題の出典に表記にミスがあったことが入試実施後に委員から指摘された。この原因が原本のコピーを用いて誤字脱字をチェックしたことであったため、今後はコピーではなく原本との比較でチェックをすることとした。一方、平成 28 年度に設置された「学部入試改革タスクグループ」では、今年度も引き続き本委員会から委員が出席し、平成 33 年度センター入試の変更に伴う本学の方針について検討した。

大学入試センター試験ではトラブルはなかったが、引き続き再発防止方法について検討する必要がある。

今後も入試の広報と運営方法の両面について改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動していく予定である。

1-14 研究倫理・安全委員会

委員長 市瀬 孝道

副委員長 平野 互

委員 岩崎 香子、草野 淳子、秦 さと子、杉本 圭以子

外部委員 二宮 高富、西 英久

事務局 高橋めぐみ

研究倫理・安全委員会は今年度 11 回開催した。平成 30 年 1 月を除いた各月ごとに教員と大学院生から申請された研究計画の審査を行った。今年度は申請された計画書 145 件を審査し、121 件が承認された。昨年度に比べると 55 件多く申請があった。今年度は件数が増えたぶん C 判定も 24 件あり、申請資料の不備が目立った。そのため、人を対象とした実験計画書を申請者が使い易いように変更し、また、研究計画の申請に関する手引きについても申請者が分かり易いようにリニューアル（平成 30 年 3 月）した。

研究倫理教育については今年度より日本学術振興会の e ラーニング（sLCoRE）を導入し、教員と大学院生が受講した。平成 30 年 1 月末までに教員全員が受講したが、大学院生の受講率がわるいため、3 月以降は CoRE 終了証明が無い学生は研究計画書の申請ができないこととした。

審査に関しての問題点は無いが、依然として大学院生の申請書の不備が多く、不採択率が高い。指導教員の指導不足が原因であるため、申請した書類には必ず目を通すように随時アナウンスするようにしたい。また、年度末にリニューアルした研究計画の申請に関する手引きの活用を促進し、採択率の向上を図る。研究倫理教育についても次年度 100%受講を目指す。

1-14-1) 動物実験小委員会

委員長 市瀬 孝道

委員 岩崎 香子、小嶋 光明、定金 香里

事務局 高橋 めぐみ

動物小委員会は今年度 8 回開催した。動物実験研究計画書 13 件の審査を行い、13 件が承認された。平成 28 年度の使用動物匹数はマウス 1,154 匹（市瀬 351 匹、定金 104 匹、吉田 548 匹、岩崎 151 匹）、ラットが 63 匹（市瀬 51 匹、定金 12 匹）であった。これらの使用された動物のそれぞれの実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し学長報告を行った。また、今年度の 12 月 26 日に公益財団法人日本実験動物学会による外部検証を実施した。動物実験に関する外部検証結果報告書では特に重大な問題となるような指摘事項等はなかった。しかし、動物実験計画書に関して、重要な項目の書き落としが無いように書式を改めるように求められたため、年度末に書式を改正（3 月末）した。また、これに伴い「研究計画の申請に関する手引き」の改訂（3 月末）を行った。動物実験教育訓練に関しては平成 28 年 12 月 21 日に実験研究（濱中）、29 年 2 月

2 日に研究の倫理と安全の中で動物を対象とした実験（市瀬）について学部 3 年次生を対象に実施し、平成 29 年 4 月 18 日には動物実験講習会（市瀬・定金）を実施した。また、動物慰霊祭は平成 29 年 6 月 14 日に実施した。

次年度は動物施設の雨漏りを修繕し、施設内の環境改善を整えると共に、これ迄と同様に動物実験の研究計画書を審査し、動物への配慮とよりよい動物実験環境の推進を図る予定である。

1-15 情報ネットワーク委員会

委員長 甲斐 倫明

副委員長 品川 佳満

委員 佐伯 圭一郎、小嶋 光明、野津 昭文、恵谷 玲央、佐藤 栄治、矢野 昌哉、染矢 哲朗

WG を中心とした日常的運用支援、委員会と中心とした新規計画の策定を主たる活動として行なった。新規計画は 30 年度に行う PC などの更新計画と教務システムの更新計画について、調査、オプションの検討、仕様案の決定、仕様書の作成に至る一連の作業を進めてきた。その結果、PC などの更新計画は、従来のプリンタ購入方式から複合機リースによる運用に転換することに決定した。印刷費用は枚数単価で計算され各設置部署・研究室の負担となる。これによって、プリンタ機能以外に、スキャナ機能、コピー機能、FAX 機能を備えた高機能の複合機を導入することが可能になった。教務システムは、パソコン OS のバージョンアップと教務実務の機能を効率的に行うためのシステム化を念頭に、プロポーザル方式によって新規システムを導入することに決定した。また、Office365 の導入によって学生が PC、タブレットなどの機器に自由にインストールして、教育に活用できる環境を整備した。

新規導入の教務システム、各設置部署・研究室の負担で運用する複合機の導入など新しいシステムとその利用法がしばらく定着するまで、トラブル、運用上の問題点などを確認し、委員会で対応を検討していく必要がある。Wifi 環境を含めて、ネットワークの利用が主流になってきたことから、情報セキュリティについて、講習会による周知徹底、規定の整備などの対策を検討する。

1-15-1) ネットワークシステム WG

リーダー 品川 佳満

メンバー 甲斐 倫明、小嶋 光明、染矢 哲朗

サーバ群（メール、グループウェア、ファイル、認証など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット・無線 LAN）の管理・運営を行った。また、次年度更新予定の認証システムのリプレースについて検討を行った。

1-16 研究科教育研究委員会

委員長 影山 隆之

副委員長 小野 美喜

委員 赤星 琴美、梅野 貴恵、甲斐 倫明、福田 広美、神崎 正太

本委員会の任務は、大学院研究科の運営および計画に関する事項について審議することである。

本年度は委員会を 10 回開催した。審議結果及び実施結果は以下の通りである。1) 定例学事として、大学院生オリエンテーション (4 月 6 日)、大学院説明会 (6 月 24 日、49 名参加)、研究中間報告会 (8 月 31 日)、研究計画報告会 (9 月 1 日)、論文レビュー報告会 (3 月 7 日)、研究成果報告会 (3 月 5 日、ただし NP コースは 1 月 11 日) を開催した。大学院生の指導教員の決定及び変更について審議した。提出された修士論文 7 篇に関する審査作業と、後期課程進学希望者 4 名の審査作業を行った。シラバスを改定して配布し、大学院生の奨学金・学費減免等に関する事項を審議した。TA の雇用に関して審議した。入試委員会に協力して大学院の入学試験を実施した(8 月 26 日及び二次募集 2 月 25 日)。2) 前年度に検討して改定した専攻・コース別のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、及びディプロマポリシーの適用を開始した。大学院学則を改定し、一部科目名を授業内容に合わせて変更するとともに、差し支えない科目については開講学年を柔軟にして学年を問わず履修できるようにした。3) 入学試験及び進学審査の見直しについて審議し、助産学及び広域看護学コースの特別選抜を次年度から実施すること(本学 4 年次生で所定の出願資格を満たす者に限り)、NP コースの出願資格として実務経験年数を次年度から追加すること、NP コースの選抜方法を次年度から変更すること(小論文、面接、地域枠における出願書類)、及び進学審査の口頭試問の方法を今年度から変更すること(審査委員の選考と評価方法)を決定した。4) 大学院の広報の強化策として「3 年次生が助産学・広域看護学コースの大学院生と語る会」を本学で開催するとともに (12 月 21 日、3 年次生 9 名参加)、3 年次生の卒業研究説明会 (12 月 8 日) 及び進学ガイダンス (2 月 21 日) で大学院進学について説明した。5) 広域看護学コース定員変更及びカリキュラム変更ワーキンググループを立ち上げ、会議を 2 回開催した。これらは本学中期計画の変更を伴うことで県の承認がなければ決定できないため、目指すべき方向性について議論するとともに、実際の変更は見送りとした。6) 遠方から通う大学院生のために E ラーニングを活用する準備として、授業の動画撮影用の機材を 35 講義室に設置した。年度末に大学院生室の使用についてヒヤリングを行い、消耗品等を整備した。大学院生室に新たに設置されるプリンタのランニングコストを次年度予算として要求した。7) 次期新生オリエンテーションにおいて指導教員の選び方に関する説明を詳しくすることを決定した。指導教員の変更に関する届出の様式を改定した。8) 同窓会及び継続教育推進チームの修了生動向調査に協力し、また修了生から 20 周年記念誌への寄稿者をリクルートした。9) 広域看護学コース 1 年次生を対象に「大分県で働く保健師との交流会」を本学で開催した (2 月 23 日)。

次年度にはさらに、以下のことが必要である。1) 受験生確保のための広報戦略をいっそう強化する(県内医療機関への広報など)。2) 新たに始める特別選抜や、変更した入学試験の方法について詳細な検討を行い、これらを確実に実施するとともに、その評価を行う。3) 広域看護学コースの定員拡充

とカリキュラム変更に向けた検討作業を行う。4)オリエンテーション、中間報告会等、及び成果発表会の方法について継続的に検討を行う。成果発表会については、発表時間を短くして1会場で開催する。5)学位論文の提出要領や審査の方法について、継続的に見直し作業を行う。

1-17 看護研究交流センター

センター長 影山 隆之

メンバー 岩崎 りほ、平井 和明、巻野 希和、神崎 純子、生野 法子

看護研究交流センターは大学と社会の窓口となる機関である。

本年度は、センター長（研究科長兼任）及びセンター専務の教職員に加え、別記6チームが分担して、チーム毎の業務にあたった。

当センターの業務が年々増えてきたため、学内理事が研究科長と当センター長を兼務するのは負荷が大きすぎる事が明らかになってきた。このため次年度からは、副センター長を置いてセンター長と業務を分担する予定である。また次年度は、文部科学省の地(知)の拠点整備事業の終了に伴い予防的家庭訪問実習プロジェクトを地域交流チームに一本化し、NPプロジェクトを発展的に解消して当センターNP事業推進チームに一本化するほか、健康増進プロジェクトも本センターの1チームとする予定であり、これらの体制の再構築が重要課題である。

1) 国際交流・留学生チーム

構成員：Gerald T. Shirley（チームリーダー）、桑野 紀子、吉川 加奈子、馬場 奈穂（7月末まで）、久保 紘子

国際交流の推進と留学生の支援が、当チームの役割である。

本年度の4月より本学英文Webの改訂作業に取り組み、教職員の協力によりFacultyページをリニューアルし、10月1日に全ページの改訂を終了した。米国コロラド大学校看護大学 Kathy Magilvy 博士を招聘した（大分訪問期間：8月3日・11日）。

海外からの研修生受入れや研修プログラムの企画・運営、本学で学ぶ留学生のサポートなど、いっそうの国際貢献を進める必要があるが、次年度は国際交流委員会に合流して任務に当たる予定である。

2) 地域交流チーム

構成員 影山 隆之（チームリーダー）、赤星 琴美、川崎 涼子、佐藤 弥生、岩崎 りほ

当チームの役割は、地域から大学へ要望等が寄せられた場合の一次窓口となることである。

本年度は、予防的家庭訪問実習を実施する中で地域から大学に寄せられる要望等を聞く窓口として対応した。野津原地域ネットワーク会議に参加し（年3回）、野津原地区の支所や関連団体と情報

交換を行った。豊後大野市の委託で「こころの健康についての市民意識調査」の実施に協力し、次年度にかけてその結果を分析する契約を交わした。

次年度以降は、予防的家庭訪問実習プロジェクトを発展的に解消して当チームに一本化し、看護研究交流センター専従スタッフを中心に実習を運営することとした。スタッフの入れ替わりもあるので、この体制の確立が次年度の最重要課題である。

3) 継続教育推進チーム

構成員 伊東 朋子（チームリーダー）、佐藤 弥生、樋口 幸、後藤 成人

県内の看護の質向上に向けて、県内医療施設や大分県看護協会との連携を緊密にし、また本学同窓会と大分県立厚生学院同窓会との共存共栄に力点を置いて両者を支援する方針で活動した。

1)若葉祭会期中の5月13日（土）にホームカミングディを開催した。第一部（16:30～18:00）は学内で、第二部（18時30分）は富士見が丘グリーンプラザ内で懇親会として開催した（第一部参加者54名、第二部参加者20名）。第一部では本学卒業生、厚生学院卒業生各2名にスピーチを依頼し、在校生、卒業生、教職員との交流を図った。2)大分県看護協会平成29年度研修計画の講師派遣調整を行い、教員22名を講師として派遣した。3)本学実習病院等の6施設に看護研究支援のため10名の教員を派遣し、対象機関と合同で平成29年度看護研究交流会を開催した（3月13日本学にて、参加者45名）。4)統計・情報処理相談の依頼3件に対応した。5)看護実践者講演会を開催（10月21日、本学講堂にて）、東京大学大学院医学系研究科の真田弘美教授を講師として「褥瘡を科学するパイオニアからのメッセージ褥瘡学から看護理工学への深化と進化—看護師が聴診器のようにエコーを使う—」と題し、看護職に求められる実践力、技術力について看護理工学研究で蓄積された知見・経験に関する講演をいただいた。参加者は72名で、NP修了生のフォローアップ研修も兼ねた。アンケート結果では、エコーの有用性に関して、興味深い講演であったとの意見がみられた。5)開学20周年記念誌への寄稿を募るため、同窓会と協力して学部卒業生・大学院・認定修了生の動向調査を実施した。そのために名簿整備を進め、学部卒業生に対してはWeb調査、修了生に対しては紙媒体での調査を実施した。回答率は、学部卒業生は11.2%、大学院修了生37%、認定修了生56%であった。これらの結果とまとめを20周年記念誌へ寄稿した。

次年度は開学20周年記念事業があるので、同窓会との連携をいっそう密にして備える方針である。

4) 産官学連携推進チーム

構成員 濱中 良志（チームリーダー）、伊東 朋子、樋口 幸、佐藤 栄治、麻生 優惠、平井 和明

平成28年3月28日に開催された「大分県立病院発ニーズ探索交流会」をきっかけに、共同研究2件、ならびに受託研究1件を開始した。超高齢化社会における生活の質の向上を実現するために“Happiness Long Life Open-innovation Workshop（Hallow）～生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ～が5回を1クールとして、2クール開催され本学の学生を派遣し

た。

産学官の共同研究にあたっては企業等との契約が必要となるが、これまでは仕組みが存在せず、県内の企業や病院からオファーのあった研究に関して協力体制が整っていなかった。また、Hallow に関する教員の負担が大きすぎた。

次年度は、自由科目として「看護とものづくり」を履修する学生のサポートを行う。産学官の共同研究を推進するとともに、そのための学内体制を整備することが課題である。

5) NP 事業推進チーム

構成員 福田 広美 (チームリーダー)、草野 淳子、甲斐 博美

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会について、第 1 回と第 2 回の理事会や社員総会の準備と開催を行い、事業報告ならびに事業計画、会計決算と予算計画について承認を得て進めた。平成 30 年度の診療報酬改定に伴い診療報酬 WG が中心となり、厚生労働大臣をはじめ、厚生労働省の関係部署へ要望書の提出を行った。診療看護師の研修を国立研究開発法人国立長寿医療研究センターで行った。診療看護師 (NP) 資格認定試験を開催し、67 名が合格した。佐久大学より入会希望があり、新たな会員校として大学院教育の課程認定を実施、新規会員校として理事会、社員総会で承認を得た。一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会のホームページをリニューアルした。診療看護師 (NP) 資格認定制度について Q&A を作成し導入に向けた整備を進めた。日本 NP 学会については、第 1 回理事会や総会の準備と開催を行った。診療看護師 (NP) 等によるブロック活動の規定を作成し、積極的な活動に繋がる基盤を整備した。

当該年度の活動で生じた問題点および次年度以降の活動計画として、一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会は、開設依頼 7 校で運営されてきたが、今年は新たに 8 校目が誕生した。特定行為に係る看護師の研修制度により診療看護師 (NP) や大学院教育も注目され、本協議会への問い合わせも多い。今後も会員校を増やせるよう活動を推進していく必要がある。

6) 学術ジャーナルチーム

構成員 平野 互 (チームリーダー)、G. T. Shirley、定金 香里、安部 真紀、山田 貴子、秋本 慶子、馬場 奈穂 (7 月末まで)、白川 裕子

看護科学研究編集委員会ならびに査読委員の事務を行ったほか、「看護科学研究」15 巻 1 号 (2017 年 4 月発行)、15 巻 2 号 (2017 年 9 月発行) および 16 巻 1 号 (2018 年 3 月発行) の審査・編集・発刊に関する実務を行った。

年間目標である年間 3 号の発刊は達成できず、年をまたいだ。年度内に 3 号を発刊できた。J-Stage 搭載後はアクセス数が増加し、論文の投稿も増加傾向にある。増加する投稿論文に対応し、倫理的要件を満たした質の高い論文の掲載を継続するために、編集委員会において投稿規定ならびに査読から編集までの事務手続きの改定を行った。今後も投稿論文を増やすための努力は必要であるが、同時に事務作業の効率化のための改善を編集委員会と事務局が一体となって進めていく。

1-18 衛生委員会

飯田 隆次（1号委員）、角 匡幸（2号委員）、赤星 琴美（3号委員）、佐伯 圭一郎、高橋 勝三（以上、4号委員）、工藤 優（6月30日退任）、酒井 敦美（7月1日就任）（以上、オブザーバー）、高橋 めぐみ（事務局）

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計9回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1 職員の健康管理

- (1) 定期健康診断を4月19日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査を行う必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。
- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを5月15日から26日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（63名受検、受検率82.9%、前年度比8.6%増）。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、10月31日に学内接種を行った（希望者27名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を5月18日と11月15日に実施し、その評価の報告を行った。
- (5) 夏季休暇の取得促進のため広報を行い、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

2 健康増進活動支援事業

- (1) 昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員39名が参加した。
- (2) 県主催の事業所対抗ウォーキング企画に1チーム参加した。

3 職場巡視

11月20日に体育館やキャンパス外周を巡視した結果、体育館天井パネルの一部破損を確認し、修繕を行った。また、駐車場の樹木の剪定、朽ちた支柱の撤去を行った。このほか、風の広場には照明がなく、夜間は真っ暗で危険であるため、外灯等の設置を検討する必要がある。

1-19 評価委員会

委員長 影山 隆之

委員 藤内 美保、市瀬 孝道、飯田 隆次

本委員会は、学内申し合わせルールに従って理事長・理事以外の常勤教員の年間活動に関する評価

を行い、理事長に報告する。

本年度は、前年度に改定した方式に基づき対象教員に資料提出を依頼した後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認した。

評価方式については、今後も随時検討する予定である。

1-20 NP プロジェクト

リーダー 小野 美喜

副リーダー 甲斐 博美

メンバー 村嶋 幸代、藤内 美保、高野 政子、石田 佳代子、佐伯 圭一郎、濱中 良志、福田 広美、
宮内 信治、森 加苗愛、草野 淳子、大嶋 佐智子

平成 29 年度の NP プロジェクトの主となる活動目標は以下の 5 点の活動を行った。

- 1) 「特定行為に係る看護師の研修制度」を大学院で教育展開するとともに NP 教育の質を担保する
平成 27 年度 4 月入学生から正式に「特定行為に係る看護師の研修制度」を組み込んだカリキュラムを展開し、本年度完成年度を迎えた。学内では毎月のプロジェクト会議にて研修を含んだカリキュラムの中で生じる課題や改善点などの意見交換を行い、以下の教育活動を行った ①段階的な試験を行った。1 年次生は 12 月 25 日口頭試問、3 月 1 日に進級試験を実施し学習体制を強化した。6 名が受験し全員進級となった。2 年生は実習前試験を実施（6 月 23 日筆記試験、7 月 2 日 OSCE 試験）10 名が受験し 8 名が合格した。また 2 月 2 日の修了試験では 6 名が受験し全員合格した。学生が到達度に満たない場合の確認など複数人での協議にて再試験実施や単位取得検討にて教育の質の担保を図った。②研修を査定するため外部委員 4 名を含めた特定行為管理委員会を年間 3 回開催した。第 1 回（6 月 26 日）は研修計画の妥当性を評価し、第 2 回（11 月 6 日）は実習中の学生の状況などの中間評価を行い、第 3 回（3 月 6 日）は、研修の修了判定を行い老年 NP コース 6 名の研修修了を認定した。③日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格試験に全員が合格した。以上の課程を経て 3 月 17 日老年 NP コース 6 名が修了した。

2) NP 学生の定員増加および遠隔学習に対する対策を講じる

平成 27 年度から地域枠 5 名の定員が増員され定員 10 名となった。平成 27 年度の大学院 1 年次生は 9 名、大学院 2 年次生は 8 名であり、福岡県や長崎県からの通学生もいる。そのため遠隔学習の試みとして、後期授業のうち「老年疾病特論」の録画発信を行った。試行の結果については現在アンケート集計中である。今後、対面式授業の良さを生かしながら、在学生や修了生の継続教育についても、遠隔学習ができるよう整備をし、遠方学生が学べる機会を開くことを課題としている。

3) 修了生に対するフォローアップ研修・研究支援を行う

通年通り年間 3 回の修了生のフォローアップ研修を実施した。第 1 回（7 月 21 日）は約 30 名が参加した。エコー検査と画像読影の研修とし、巻野助教の講義後 NP 修了生による実技研修を実施し

た。第2回(10月21日)は、東京大学真田弘美教授の公開講座にてエコーによる看護師アセスメントについて学ぶ機会とした。第3回(1月11日)は大学院生の成果報告会とあわせて研究フォローアップをテーマとし実施した。時期により3回の研修参加者数にばらつきがあったが、約50名が参加(のべ人数)した。

4) NPに関する研究活動を行い、NP大学院教育の特徴を社会に向けて発信する

平成29年度「看護師の特定行為研修支援事業費補助金」にて、平成28年度に継続して、地域包括的ケアに向けた在宅でのNP(診療看護師)の活動の調査研究を実施および発表した。介護老人保健施設や訪問看護のフィールドで活動している修了生や大学院生が特定行為を必要とする利用者への介入に焦点をあて、医師や看護管理者とも連携をとり事例研究とした。調査結果を含む最終的な報告書を作成し大分県内外の主要機関に配布した。また、プロジェクトメンバーが日本NP学会等の各学会でNPの活動や成果を公表した。

- ・日本看護倫理学会第10回年次大会 大会長講演他NP関係演題3題発表
- ・日本地域看護学会第20回学術集会 大会長講演他シンポジウム
- ・日本看護管理学会シンポジウム
- ・日本NP学会第3回学術集会(成田)16題発表
- ・日本医療マネジメント学会(別府)シンポジウム
- ・日本看護科学学会(仙台)シンポジウム
- ・第16回日本病院総合診療医学会学術集会 シンポジウム
- ・「看護師の特定行為研修の効果および評価に関する調査」

5) 地域枠の定員を確保し大分県の医療・福祉施設と連携した医療サービス向上にむけて活動を行う入学生の入学試験に向けたリクルート活動のため、NPチラシを大分県の医療機関に送付するとともに豊後大野地区や杵築山香地区などへの病院を訪問した。平成29年度は大分県内から8名の入学希望があり、試験にて5名が合格した。

また、看護職へのNPの認知度向上のため佐伯地区、国東地区、豊後大野地区にてフォーラムを開催し、修了生の活動を報告した。フォーラムには3会場あわせて約200名の参加があった。

さらに修了予定者の医療機関を訪問し継続教育の依頼や大学との連携を病院長、看護部長等に説明する機会をもち、理解が得られた。

NPプロジェクトは今年度をもって解消し看護研究交流センターNP推進チームとして役割を明確化し活動を継続する。

次年度の課題は次の2点である

1. チームとしての教育・研究・学外連携の役割の明確化
2. 教育に関する課題
 - ①大分県内の医療機関と連携による地域枠での質を担保した受験生の確保
 - ②遠方の学生が学べる環境、繰り返し学習による学習効果を整備したEラーニング体制の整備

1-21 予防的家庭訪問実習プロジェクト

リーダー 影山 隆之

メンバー 藤内 美保、福田 広美、小野 美喜、川崎 涼子、稲垣 敦、宮内 信治、岩崎 りほ、杉本 圭以子、定金 香里、佐藤 弥生、巻野 雄介、山田 貴子、村嶋 幸代、野津 昭文、高橋 勝三

本プロジェクトは、文部科学省地（知）の拠点整備事業として採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」の計画・実行・評価を担った。年度初め(4月12日)に訪問チームの学生・教員編成と学生・教職員へのオリエンテーションを行った。プロジェクト会議を4回開催し(6月8日、9月21日、10月23日、1月29日)、上記構成員と看護研究交流センター職員により、予防的家庭訪問実習と関連事業に関する運営方針を検討した。実習の運営自体は看護研究交流センターが中心となり、全教員の参加のもとに行った。3月に、5年間の事業の最終報告書を作成した。文部科学省の予算が終了する平成30年度以降は大学の自主事業として行う必要があるため、運営のあり方について検討した結果、平成30年度からは本プロジェクトを発展的に解消し、看護研究交流センター地域交流チームに一本化して同実習を担うこととした。

1-22 健康増進プロジェクト

リーダー：稲垣 敦

メンバー：濱中 良志、赤星 琴美、緒方 文子、佐藤 愛、秦 さと子、森 加苗愛、甲斐 博美、巻野 雄介、田中 佳子、安部 真紀、吉川 加奈子、石丸 智子

【事業・研究協力】

- ・ Smart Life Project (厚生労働省)
- ・ 大分県運動機能向上専門部会(大分県福祉保健部)
- ・ 大分県地域介護予防推進事業 (大分県福祉保健部、ほか)
- ・ 大分県リハビリテーション協議会 (大分県福祉保健部)
- ・ 地域ふれあいサロン事業 (大分市社会福祉協議会)
- ・ 姫島村健康づくり事業 (姫島村健康推進課、姫島村診療所)
- ・ スポーツ救護ナース及び救護員の養成、フォローアップ、派遣事業 (大分県スポーツ学会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院、西別府病院ほか)
- ・ 姫島村健康づくり事業 (姫島村健康推進課、姫島村診療所 9/26, 3/9)
- ・ おおいたスポーツ広場 2017 (大分市 10/9)
- ・ 第34回緑が丘体育祭 (緑ヶ丘中央公園 10/15)
- ・ 第23回ゆふいんスポーツレクリエーション大会 (大分県教育委員会、NPO 法人ゆふいんチャレンジクラブ 11/3)

- ・第32回ななせの里まつり（大分市、野津原地区商工会 11/5）
- ・おおいたスポーツ交流フェスティバル 2017（大分県教育委員会、SC おおいたネットワーク、NHK 大分、OBS 11/23）
- ・2017 森林セラピートレイルランニング大会 in 野津原（大分市、野津原商工会 3/18）
- ・第6回森林探検ウォーキング（富士見が丘中央公園 3/24）
- ・日本体育測定評価学会第16回大会（ホルトホール大分 3/4-5）
- ・大分県スポーツ学会第7回フォーラム（別府ビーコンプラザ 6/24）
- ・日本地域看護学会第20回学術集会（別府ビーコンプラザ 8/5）
- ・大分県スポーツ学会第9回学術大会（アイネス 12/3）
- ・高齢者用の機能食品の研究開発（ヤクルトヘルスフーズ株式会社 4/13 終了）
- ・看護関連機器開発（県商工労働部、県立病院、徳器技研工業株式会社、大分県産業科学技術センター4/27～）
- ・ICSEMIS2020（International convention on science, education and medicine in sport）招致活動

【研究】

- ・東九州メディカルバレー医療機器開発の助成を受けたリハビリ用電気刺激装置 DRIVE を 120 台販売（株式会社デンケン、井野辺病院）
- ・高齢者用機能食品の特許申請（ヤクルトヘルスフーズ株式会社）
- ・フットサルをするとどのような心理的効果があるのか？
- ・1人での1回の運動が気分及び影響：ランニングとレジスタンストレーニングの比較

【人材育成、啓蒙・啓発】

- ・研修会等：大分県スポーツ学会第8期スポーツ救護講習会（県看護研修会館 4/23、5/21、6/18：80名）、第6回スポーツ救護スキルアップ研修会（別府ビーコン 6/24）、介護予防教室（萌葱台公民会 7/19, 20名）、姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター第1回 9/26, 20名、第2回 3/9, 30名）、
- ・健康・体力チェック：本学若葉祭（本学 5/14-15、ストレスを計ろう！, 163名、腹筋を計ろう！, 179名）、大分トリニータホームゲーム（大銀ドーム 7/22, 711名）、日本地域看護学会第20回学術集会（別府ビーコンプラザ 8/5, 160名）、おおいたスポーツ広場 2017（コンパルホール 10/9, 536名）、第34回緑が丘体育祭（緑ヶ丘中央公園 10/15, 247名）、第23回ゆふいんスポーツレクリエーション大会（湯布院スポーツセンター11/3, 319名）、大分市野津原地区第32回ななせの里まつり（みどりの王国 11/5, 538名）、おおいたスポーツ交流フェスティバル 2017（大分県立総合体育館、大洲総合運動公園 11/23, 276名）、2017 森林セラピートレイルランニング大会 in のつはる（県民の森 3/18, 21名）、第6回森林探検ウォーキング（富士見が丘中央公園 3/24, 61名）

【広報・メディア】

- ・姫島村CTV：姫島村健康づくり事業研修会
- ・パネル展示：活動紹介（若葉祭 5/14-15、オープンキャンパス 7/17）

- ・チラシ：おおいたスポーツ広場 2017 (10/10)
- ・本学 HP：①地域・社会貢献、②大学アルバム 2017「健康・体力チェック」等 10 回
- ・パンフレット：本学パンフレット 2017 (p.27)
- ・パンフレット：「めじろん元気アップ体操」(市町村に 14,820 部配布)
- ・大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操&同ビッグ 4 パンフレット PDF 版
- ・YouTube・大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操動画再生回数①元気アップ体操 23,241 回、②リズム体操 15,790 回、③完全収録版 7,021 回 (1/1-11/24)

今年度は社会活動が増し、研究活動や広報活動が縮小した。来年度から、本プロジェクトは看護研究交流センターの下部組織となるため、予防的家庭訪問実習等の事業と連携しつつ、これまで醸成してきた県や地域との関係性も重視しながら学生とともに活動を継続してゆき、最終的な目的である既存の資源を活用した地域住民の健康増進システムの構築を模索していく。また、今日的な課題である地域振興や定住の問題も意識して活動してゆく。

1-23 看護系全体会議

学長 村嶋 幸代、学部長 藤内 美保、研究科長 影山 隆之、事務局長 飯田 隆次

構成員 梅野 貴恵、小野 美喜、高野 政子、崔 明愛、林 猪都子、福田 広美、赤星 琴美、石田 佳代子 (司会)、伊東 朋子、川崎 涼子、平野 互、森 加苗愛、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、杉本 圭以子、石丸 智子、岩崎 りほ、大矢 七瀬、緒方 文子、甲斐 博美、後藤 成人、佐藤 弥生、宿利 優子、田中 佳子、徳丸 由布子、中釜 英里佳、樋口 幸、平井 和明、堀 裕子、巻野 雄介、山田 貴子、麻生 優惠、足立 綾、今村 知子、大嶋 佐智子、佐藤 愛、佐藤 栄治、財津 友美、篠原 彩、生野 直子、中村 伊都子、姫野 綾、吉川 加奈子、渡辺 康人

4 月、7 月、12 月の年に 3 回、定例会議を開催した。毎回、学部と大学院の各実習における計画・進捗状況・結果の報告、予防的家庭訪問実習の計画・進捗状況・結果の報告、実習代表者会議からの報告、実習運営小委員会や看護スキルアップ WG による活動報告などを行い、学生の実習・演習状況や目標の達成状況などを共有した。また、実習指導指針の活用、実習施設合同会議 (7 月開催) における意見交換会内容、大学での教育について感じる事、各段階実習間のつながりなどについて意見交換を行った。

なお、本会議については、実習報告が多くを占め、議題の提案が少ない現状があり、開催回数・日程等の見直しを求める意見がある。それらの見直しや議題の検討が課題である。

1-24 理事長選考会議

議長 影山 隆之

委員 甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、市瀬 孝道、高橋 靖周、竹中 愛子

本会議は、理事長選考規程等に基づいて理事長の任期満了後の次期理事長予定者を選出し、理事長に報告する。

本年度は理事長任期の最終年度に当たることから選考会議を 5 回開催し、所定の方法で募った候補者について選考を行って予定者を決定し、理事長に報告した。

なお、選考委員の任期は本年度限りである。

2 学内行事の概要

2-1 学年暦

前期

4月

- 6 入学式
- 7 全学オリエンテーション
- 10,11 新入生オリエンテーション
- 10 2～4年次生授業開始
- 10～17 前期履修登録
- 11 健康診断
- 12 1年次生授業開始
- 21 全学スポーツ交流会

5月

- 8～6/2 地域看護学実習,
在宅看護学実習(4年次生)
- 10 キャンパスクリーンデー
- 13,14 若葉祭
- 13 ホームカミングディ
- 29～6/2 老年看護学実習(3年次生)

6月

- 14 学生大会
- 19 開学記念日
- 19～7/7 総合看護学実習(4年次生)

7月

- 10～14 初期体験実習(1年次生)
- 16 オープンキャンパス
- 21 夏期休業開始
- 21～8/7 小児看護(保育所)実習(3年次生)

8月

- 26 大学院入学試験

9月

- 1～ 成人急性期, 成人・老年慢性期, 小児,
母性, 精神看護学実習(3年次生)
- 5 夏期休業終了
- 30 前期授業終了

後期

10月

- 2 後期授業開始
- 2～10 後期履修登録
- 28 看護国際フォーラム

11月

- 18 特別選抜試験(推薦・社会人)
- ～24 成人急性期, 成人・老年慢性期, 小児,
母性, 精神看護学実習(3年次生)
- 30 卒業研究要旨提出締切(4年次生)

12月

- 5 卒業研究論文提出締切(4年次生)
- 6,7 卒業研究発表会
- 8～22 看護アセスメント学実習(2年次生)
- 24 冬期休業開始

1月

- 7 冬期休業終了
- 9～22 基礎看護学実習(1年次生)
- 12 大学入試センター試験準備
(2,3,4年次生休講)
- 13,14 大学入試センター試験

2月

- 18 看護師国家試験
- 25 一般選抜試験(前期)および特別選抜
試験(私費外国人留学生)
- 26 進級試験(2年次生)
- 28 後期授業終了

3月

- 1 春期休業開始
- 12 一般選抜試験(後期)
- 16 卒業式

2-2 オープンキャンパス

平成 29 年度の開催は夏休み中の 7 月 16 日（日）に実施した。当日は 371 名（高校生 242 名、保護者 123 名、その他 6 名）と多くの参加があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や、1 年次生の合格体験発表、3 年次生、4 年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業や体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。特に在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当したことや、学内の誘導を行ったことは、参加者が在在生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。

2-3 公開講座

平成 29 年度の公開講座は、9 月 9 日（土）に大分駅前のホルトホール大分・大会議室で開催した。メインテーマは「災害に備えるー熊本地震から学ぶー」と題して、講師は、元大分気象台長 気象予報士 花宮 廣務氏、熊本大学大学院生命科学研究部看護学講座 講師 生田 まちよ氏、独立行政法人国立病院機構 熊本医療センター 看護部長 佐伯 悦子氏の 3 名を講師として招き、本学の教員からは、看護アセスメント学の石田 佳代子准教授と、地域看護学の川崎 涼子准教授の 2 名が演習を実施した。参加者は 187 名であった。公開講座の受講者の評価は、「大変良い」と「良い」が 92% で高評価であった。チラシを作成し県下の病院や施設、保健所への配布や、6 月の大分県看護協会総会など早期に配布したのが効果的であった考える。市報など地域広報に加え、マスコミや行政機関や病院等に参加を呼びかけた。

2-4 第 19 回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催で第 19 回看護国際フォーラムを平成 29 年 10 月 28 日に、別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。テーマを「はたらく看護職のストレスを活力に換える！」とし、オーストラリアから 1 名、韓国から 1 名、国内から 1 名の講師を招聘した。参加者は 174 名と前年度より減少したが、参加者アンケートの結果では満足度が高かった。

2-5 海外の大学との学生交流

韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

7 月に蔚山大学校と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的とした MOU を締結した。7 月 17 日から 21 日までの 5 日間、学部交流派遣である学部生 5 名と同行教員 3 名を本学に受け入れた。

本学学生の派遣

7月に蔚山大学校と、科学技術の発展、人材育成と能力向上、看護科学への貢献を互いの目的としたMOUを締結した。本学からは8月21日から25日までの5日間、学部交流派遣として学部生4名を同行教員1名と共に蔚山大学に派遣した。交流の成果を記載したwebページを派遣学生が作成した。

2-6 若葉祭（大学祭）

5月13日、14日に開催された若葉祭において、教職員と学生のコラボイベントの企画募集と、パネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示など当日の運営を行った。全体の参加者は2日間を通して899名で、イベントは12企画を開催し、パネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示により、大学の教育内容や設備の紹介ができた。イベントへの総参加者数は593名であった。教職員と学生がコラボしてイベントを行うことで、学生と教職員との距離の近さが、今後本学を受験予定の高校生などにアピールできたとともに、地域の人々とのふれあいの場ともなった。卒業研究のポスター展示は全研究室に協力してもらい17枚掲示し、7月のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを研究棟入口に配置し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

2-7 地域ふれあい祭り

平成29年11月5日(日)に大学に隣接する「みどりの王国」で開かれた「ななせの里まつり」に参加した。健康増進プロジェクトが身体測定をするブースの隣に、大学を紹介するパネルを展示し、大学紹介ビデオを流し、大学案内パンフレットやチラシを配布した。注目を集めるために実施した握力測定が好評で、テントには500人を超える人が訪れ、年齢別握力の平均値を記載したチラシを配布しながら保健指導を行なった。また、お祭りのイベントへ参加し、玉入れや駕籠かきレースに学生チームのみならず、教職員チームが参加し、地域とのふれあいを図った。

2-8 アニュアル・ミーティング

本年度のアニュアル・ミーティングは3月20日に開催した。一般演題7件、奨励研究9件、先端研究4件、プロジェクト研究2件の合計22演題がポスターで発表され、活発な討論が行われた。参加者は42名であった。

3 教育活動

3-1 平成 30 年度入学者選抜状況

1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員				
			一 般 入 試		特 別 入 試		
			前期日程	後期日程	推 薦	社 会 人	私費外国 人留学生
看護学部	看護学科	80 人	40 人	10 人	30 人	注 1) 若干名	注 2) 若干名

注 1) 社会人の募集人員「若干名」は推薦の 30 人に含める。

注 2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 40 人に含める。

入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者			
					計	県 内 (率)	男 (率)	
特 別	推 薦	84	84	31	2.7	31	31(100.0)	3(9.7)
	社会人	2	2	0	0	0	0(00.0)	0(0.0)
	計	86	86	31	2.8	31	31(100.0)	3(9.7)
一 般	前 期	118	113	47	2.4	42	21(50.0)	2(4.8)
	後 期	154	60	10	6.0	10	3(30.0)	1(10.0)
	計	272	173	57	3.0	52	24(46.2)	3(5.8)
合 計	358	259	88	2.9	83	55(66.3)	6(7.2)	

試験教科等

区 分	教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	平成 29 年 11 月 18 日 (土)	平成 29 年 11 月 1 日 (水) ~11 月 7 日 (火)
	社会人		
一 般	前 期	平成 30 年 2 月 25 日 (日)	平成 30 年 1 月 22 日 (月) ~1 月 31 日 (水)
	後 期	平成 30 年 3 月 12 日 (月)	

2) 特別入学試験

① 推薦入試

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

3) 一般入学試験

平成 30 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数
前期日程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 6 科目
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ・数学B』	
	理 科	「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から 2 科目を選択	
	外国語	『英語』（リスニングを含む）	
後期日程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	3 教科 3 科目 を選択 または 3 教科 4 科目 を選択
	地理歴史 公民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、「日本史B」、「地理A」、「地理B」、「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・経済』から 1 科目を選択	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択	
	理 科	「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学基礎」から 2 科目を選択 または 「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から 1 科目を選択	
	外国語	『英語』（リスニングを含む）	4 教科 4 科目 または 4 教科 5 科目

3-2 平成 30 年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

1) 看護学専攻

概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者 養成	NP コース	10名 (うち5名は 地域枠)
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	10名
				看護管理・ リカレントコース	2名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
修士課程	40	40	27	1.5	24	17(70.8)	5(20.8)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成 29 年 8 月 26 日 (土)	平成 29 年 7 月 31 日 (月) ~ 8 月 4 日 (金)

二次募集

概要

8 月に実施した試験の結果、研究者養成コースについて志願者が定員を下回ったため、また、助産学コース、看護管理・リカレントコースについて合格者が募集人員に満たなかったため、12 月に再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者 養成	助産学コース	3名
				看護管理・リカレントコース	1名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
修士課程	7	7	6	0.9	6	6(100.0)	1(16.7)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成30年 2月25日(日)	平成30年 1月22日(月)～1月31日(水)

2) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(前期)	健康科学専攻	1名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
修士課程	1	1	1	1.0	1	0(0.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成29年 8月26日(土)	平成29年 7月31日(月)～8月4日(金)

二次募集

概要

8月に実施した試験の結果、合格者が募集人員に満たなかったため、12月に再度募集を

行ったが、志願者はいなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	1名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成30年 2月25日（土）	平成30年 1月22日（月）～1月31日（水）

3-3 平成30年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

1) 看護学専攻

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集したが、出願者はいなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	平成29年 8月26日（土）	平成29年 7月31日（月）～8月4日（金）

1) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集したが、出願者はいなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	平成29年 8月26日（土）	平成29年 7月31日（月）～8月4日（金）

3-4 平成30年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

1) 看護学専攻

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成30年3月修了見込みの者を対象に、学科試験（該当者のみ）、特別研究に関する発表及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
博士課程	3	3	3	1.0	3	3(100.0)	1(33.3)

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
学科試験 特別研究	平成29年 8月23日（水）	平成29年 7月13日（木）～7月21日（金）

1) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看

護職の人材を育成することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成 30 年 3 月修了見込みの者を対象に、学科試験（該当者のみ）、特別研究に関する発表及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	1(100.0)

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
学科試験 特別研究	平成 29 年 8 月 23 日（水）	平成 29 年 7 月 13 日（木）～7 月 21 日（金）

進学相談

概要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験について PR するため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内 12 カ所 25 回、教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、7,415 人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、277 人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。参加者は 29 人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

在学生の状況（平成 29 年 4 月 1 日現在）

学生総数 431 名（学部生 340 名、院生 91 名）

（単位：人）

学 生 数	学 生 数				
	計	県 内	県 外	男	女
1 年 次 生	89	54	35	11	78
2 年 次 生	86	52	34	5	81
3 年 次 生	80	48	32	10	70
4 年 次 生	85	52	33	7	78
計	340	206	134	33	307
割 合 (%)	100.0	60.6	39.4	9.7	90.3
大学院博士前期（1 年次生）	34	15	19	6	28
大学院博士前期（2 年次生）	37	25	12	5	32
大学院博士後期（1 年次生）	6	3	3	1	5
大学院博士後期（2 年次生）	4	2	2	0	4
大学院博士後期（3 年次生）	10	7	3	3	7
計	91	52	39	15	76
合 計	431	258	173	48	383

3-5-1 生体科学研究室

1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。

4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2 教育活動の現状と課題

昨年度の課題として、学部1年次生において生体科学を単純暗記ではなく、さらに、深く理解させることに重点をおくことの必要性があったため、その課題を克服するために、体育館で5分間走の前後のバイタルサインを測定させて、生理学的考察を行わせたため、バイタルに関する生理学の知識は定着したと思われる。課題は、疾患を学ぶ際にも、生理学的背景を念頭に置いて学習する習慣をつけることが出来ていない。今年度の大学院生への教育では、NPの実践者コースの大学院生が今年度から定員が5名から10名へ増加したために、学生の能力の差が拡大していた。例年の講義では難解に感じる学生がいたことは、来年度以降の課題である。

3 研究活動の現状と課題

現状で、4年次生の卒業論文の対応及び学会発表もできている。早く、論文として発表することが課題である。

3-5-2 生体反応学研究室

1 活動方針

教育活動に関しては生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。研究活動に関しては外部の競争的研究費を獲得し、積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

平成 29 年度は平成 23 年度カリキュラム（応用生体機能反応論：4 年次生）と平成 27 年度カリキュラム（生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：1 年次生、生体薬物反応論 I：2 年次生、生体薬物反応論 II：3 年次生）の講義と健康科学実験（血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験）を行った。平成 27 年度カリキュラムはそれぞれの科目で 5 コマ少なくなったため、基本となる重要な部分を理解しやすく教授した。看護実践を行ううえで、解剖学や生理学と共に病理学や薬理学を十分に理解しておくことの重要性を認識させ講義を進めることが重要である。しかし、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べると極めて悪い。講義の進め方の工夫や欠席者への対処（出席率が悪い）が今後の課題である。

3 研究活動の現状と課題

今年度の卒論生 6 名は、教員 3 名で、2 人ずつ指導することができた。生体反応学研究室の教員は外部の競争的研究費や学内の競争的研究費を獲得しているものの研究論文が少ない。本年度は英語論文 2 報に留まっている。研究業績は科研費等の研究費獲得にも繋がるため重要である。積極的に英語論文を投稿して行くことが今後の課題である。

4 その他

夏休み子どもサイエンス 2017

定金 香里 4 年次生：天野 佑香、大島 夕奈、川野 理恵、武末 沙己、福留 慶子

大分大学で行われた「夏休み子どもサイエンス 2017」（8 月 11 日、共催：大分大学、本学、大分県理科・科学教育懇談会 他）に指導員として参加した。「色が変わる不思議な花」という実験テーマで、4 回に分けて、小学 4 年生～6 年生とその父兄、計 75 組に対し実験を行った。

3-5-3 健康運動学研究室

1 活動方針

科学的なものの見方や考え方を学び、個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。また、実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感すると共に、健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する。そして、自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。さらに、ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。

2 教育活動の現状と課題

学部の授業では、看護系の授業や実習を視野に入れ、社会と学生のニーズに配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

2年次は「健康運動ボランティア演習」から始まる。この科目では、無償で人のために働く体験を通して、人間は何のために生きるか、自分はどう生きるかを考えることを目指している。また、地域や社会のために人々と協力して何かをすることで喜びを感じ、人間としてごく自然な暖かい感情を育むこと、地域や社会の構成員としての自覚を確認し、相互に支え合うという意識を醸成することも目指している。このように、ボランティアを通して、生きていく上で大切な何かを自分で発見する授業である。

大学に入学すると身体活動量は低下し、特に一人暮らしになると、食事や休養の量、バランス、リズムが崩れ易い。これにより、体力の低下、ストレス亢進、自律神経活動の低下、肥満が懸念される。そこで、できるだけ実習を入れて体を動かす機会を増やすことを心がけている。1年次の「健康運動」では運動強度と運動量の確保のために、行動変容理論等を活用している。この授業では、外部講師の協力を得て10年前からヨガを授業に取り入れてきたが、今年になって学生がヨガサークルを創設した。また、一昨年からは、国際化時代に対応して日本の伝統文化を知るためにも、運動的要素を合わせもつ和太鼓を取り入れた結果、学生が和太鼓サークルを創設した。

今年から、2年目となる2年次の「健康運動学演習」では、生涯スポーツにつなげるため、学生が課題を見つけ、主体的に目的や目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して毎週実施し、最初と最後に効果判定のための目標に合った計測を実施することで、科学の実証性やEBNを意識させた。また、途中で目標や運動の見直しの機会を与え、PDCAサイクルを意識させた。

大学院に関しては、休学していた修士課程の学生が修士論文のテーマを変更し、修士（健康科学）を取得した。

研究室の課題は、スタッフ3名の研究室が実施しているのと同等の授業数を教員1名で担当しており、分担や協力ができないため負担が極めて大きいことである。この課題は依然として解決されていないが、当研究室だけで解決できる問題ではないため、研究室の教員配置の見直しを執行部に提案していく必要がある。

3 研究活動の現状と課題

今年は掲載論文がなかったが、前年に掲載された論文で学会賞を受賞した。かつては学会誌の査読が年間数十本あり、現在は代表として3つの学会の運営に追われており、これらが研究時間を圧迫してきた。今後は学会運営を効率化し、研究時間を捻出に努めたい。

3-5-4 人間関係学研究室

1 活動方針

本学の建学の理念の一つである「心豊かな人材の育成」を念頭に置いて活動している。人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。

2 教育活動の現状と課題

人のこころに関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解および体験を、目的として教育活動を展開している。理解が表面的なものにとどまることのないよう、レポートの作成、学習したカウンセリングスキルの実践、ペアワークなど、アクティブラーニングの機会を積極的に取り入れている。学生が受け身になることなく、主体的に授業に参加する機会は十分に保障されていると理解する。

実質的に養護教諭養成課程の運営を担当しているが、養護実習 I、II、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応などにより、どの程度の業務が発生し、それが学部や大学院の教育活動にどのように影響するのか目途が立たない状況である。次年度の課題として、卒業研究や大学院生の指導と教職課程運営のバランスを取ることをあげる。

3 研究活動の現状と課題

卒業研究を九州心理学会で発表した。また、研究室担当講義における教育実践に関しては、京都大学で開催されている大学教育研究フォーラムで発表した。研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導（6名）、博士課程の学生（3名）の指導がメインになっている。大学院生の専攻や生活環境により、集団によるゼミナール形式をとった指導ができず、個別の指導になるため、大学院生同士が学び合い教え合うという環境を整えることができていない点が大きな課題である。

3-5-5 環境保健学研究室

1 活動方針

環境保健学研究室は、広義の意味での「環境」と健康との関係を把握するための基礎的事項を教育している。いわゆる環境問題は社会的な性格が強いために、科学的側面だけでなく、社会科学的側面、とくに倫理的側面との関係も含めて最新の動向を理解できるよう環境問題の構造も教授する。学部教育では、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に

対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどのような要因と関係しているのか、そのことを知るためにどのような科学的アプローチがとられていて、また、どのような考え方で健康問題に向きあうべきとしているのかを講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで看護職および保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。放射線が看護のコアカリキュラムに導入されることになったことので、さらに、本学のこれまでの教育経験を生かした教育法を看護系大学の基本となるように進めていく。大学院の広域看護学コースの学生を対象に行う「環境保健学特論」は、保健師を目指す学生が学ぶべき項目をカバーし、最新の英語原著論文を読ませることで実務者として備えるべき力を生むように努めている。また、健康科学選考の学生は放射線に従事している社会人であることから、物理から生物までの幅広い放射線の知識をテキストで習得させ、最新の英語原著論文を読ませる力を生むように努めている。

2 教育活動の現状と課題

3年次以降は実習や国試の勉強が中心となって、環境保健に対する関心が低下することがこれまでの課題であった。3年次の演習「環境疫学・生物学演習」では、毎回課題レポートを課して基礎力の向上を狙って実施しているが、今年度からレポート提出を演習時間内とすることで、全員が自力で完成できるようにした。放射線に対する学部生の関心は低いが、放射線が看護のコアカリキュラムに導入されることになったので、講義と健康科学実験とを連携した取り組みはこれまで行なってきたが、さらにこの方法が効果的な教育となるように検討を進める。

3 研究活動の現状と課題

放射線はさまざまなレベルの量で医療において利用されている。とくに、低線量放射線の健康リスクは放射線診断や原子力事故後の対応において重要な課題とされてきた。我々は、研究費を獲得し、マウスを利用した放射線発がんリスクの仕組みにおいて線量率効果を調べる研究を行ってきた。一方でCT診断に伴う放射線リスクの分析も継続して実施してきた。これらの研究と関連して卒業論文や修士・博士論文の指導を行なっている。研究の性格上、共同研究のスタイルをとりながら、生物実験研究も臨床での観察研究もさらに発展させながら、新たな成果をだしていく必要がある。

3-5-6 健康情報科学研究室

1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

2 教育活動の現状と課題

学部教育に関しては演習以外の科目で再試験受験者および不合格者が比較的多いというこれまでの反省を踏まえて、授業内容の精選やポイントを絞った課題の実施により、単位取得状況から見た学習成果に関しては向上していると判断する。ただし、授業アンケートから考えると、疫学や統計学分野の理論については、興味関心や必要性に関する認識が低いままであると考えざるを得ない。授業内容や方法も改善を継続する必要があるが、次のカリキュラム改訂に向けて、年次配置についても考えていきたい。

大学院教育においては、健康科学専攻では少人数の受講者のニーズに合わせての教育するスタイルが確立し、成果があがっていると考える。博士前期課程の保健情報学特論および広域コースの科目については、小テストをこまめに実施することにより、学習の定着が不十分な点については、進行途中でもある程度把握して対処できるようになり、理解不足のまま終わる受講者の発生は避けられるようになったと考える。ただし、受講者全員の学習成果の下支えはできたものの、優秀な受講者をさらに伸ばすという点では、別種の対応策を必要としている。

3 研究活動の現状と課題

研究室メンバー全員が、学内外の研究費を獲得し、発展的に研究を継続している点は評価できる。卒論においても教員の研究と関連したテーマを設定し、学生への教育にも良い効果をもたらしている。ただし、研究テーマがそれぞれの専門領域のものであり、看護領域との共同研究を今後は推進することが望まれる。また、学術論文やその他の手段で積極的に研究成果を発信していくことが必要であることは言うまでもない。

3-5-7 言語学研究室

1 活動方針

言語活動の四技能である **Speaking, Listening, Reading, Writing** をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (**Computer Assisted Language Learning**: コンピューターを用いたウェブ学習システム) による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習する。1 年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2 年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について 3~4 週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1 年次生前期の授業では、CALL 学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL 学習を行なう。1 クラスを 2 グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数 100 万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生 (1~4 年次生、大学院生) が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALL システムによる TOEIC 対策のための英語学習、学習期間前後の TOEIC IP 試験を実施している (前期: 1 年次生必修。後期: 全ての学生を対象に希望制にて実施)。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALL システムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7 月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

3 研究活動の現状と課題

米国ナースプラクティショナー (Nurse Practitioner: NP) 制度の創設に尽力されたフォード博士へのインタビューから、今後の NP の方向性を検討するための示唆をまとめた論文を日本 NP 学会誌に投稿し、学会員へ提供した。今後は、卒論生の研究成果についても関連学術誌へ投稿

する予定としている。

3-5-8 基礎看護学研究室

1 活動方針

4年間での看護師教育の充実を教室員全員の共通目標にして、結束して努力している。教室員は常勤職員4名、非常勤職員1名の計5名であるが、ヒエラルヒーという階層構造は望ましくないイメージを持つものの、5名という小さなコミュニティの中では必要悪である場合もあり、特に入学後間もない学生を対象に授業等を展開する関係上、剣道の団体戦で言う先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の順的な関係を可能な限り維持しながら教室運営を行っている。それぞれが個性を生かしながら、お互いが持っていない部分を補う形で教室運営はバランスが取れていると考えている。臨地実習指導等で教室員の大半が不在になる場合には、全員野球の精神を持ちながら、卒論研究にも、それぞれが多く時間を費やして指導している。初期体験実習や基礎看護学実習などの実習要項の再検討などを十分に行い、学生の学習効果を第一義とし、初学者である学生に看護師という専門職について理解させ、将来の進路に対して、より具体的なイメージや方向づけができるように教材の準備や精選に教室員全員で取り組んでいる。階層構造は維持しながらも、切磋琢磨して情報共有や意見交換などが率直に行える環境にあることは教室運営上、望ましい点と考えている。

2 教育活動の現状と課題

今年度の1年次生の数は昨年より3名減少した83名であったが、実習施設の受け入れ開拓や学内演習のグループ編成等も配慮しながら、効果的な学習ができるように努めた。カリキュラムの展開上、基礎看護学研究室が手掌する生活援助論、医療技術論等は後期より開始になる臨地実習指導で教室員が不在になるため、前期に圧縮して実施しており、1年次生、2年次生の同時展開であり、1日4コマを週2日間、連日実施している。学生の学習効果については、今後の客観的な評価を待たねばならないが、前期に圧縮して実施することによる教員の疲労や今後の授業効果の上からも検討課題と考えている。また一昨年より実施している人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目とを有機的に統合させ、一方的な講義形式に偏らないように、基礎看護学研究室、生体科学研究室の教員が協同して講義に当たるという新規の取り組みに挑戦してきているが、学生の学習効果については、客観的な評価を実施しておらず、この点も課題として残されている。従来とは異なる方法、研究室を越えた協同授業という授業展開は新しい試みであり、学習情報共有や意見交換などが率直に行える環境にあることは望ましいことではあるが、授業効果の上からも客観的な評価が必要である。

昨年の課題として掲げた初期体験実習、基礎看護学実習の成果と課題について、改善のために取り組んだが、臨地実習実施時期の問題や実習担当教員の問題など、1研究室のみで取り組み、改善することは難しく、次年度に新に看護系実習に関する委員会が立ち上がることになり、看護系研究室の教室代表者と今後、検討していくこととなった。

3 研究活動の現状と課題

研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって鋭意努力し、研究している。常に論文投稿を目標にして取り組んでいる。科学研究費だけではなく、その他の外部資金にもできるだけ、応募するように努めている。5名それぞれの研究分野は現在、異なっているが、今後、可能な限り、全員が共同研究できるように領域を広げ、関連分野を模索しながら研究室全体で取り組めるような研究体制になることが課題である。

3-5-9 看護アセスメント学研究室

1 活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としている。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1年次、2年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを迫及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるといふ教育的役割があると考えている。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。事例を通して個人およびグループワークにより看護過程の展開をする。2週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし専門看護学領域の基盤とする。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

毎年、学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目はメカニズムが押し寄せられるように工夫し、筆記試験は過去問による断片的で暗記の知識にならないよう、理解させるための試験問題を毎回新たに作成した。さらに「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演

習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もある。前年度の看護過程の演習では、理論的根拠や思考のプロセスに課題があった。そこで、演習の仕方やフィードバックの仕方に改善を加え、患者の状況や症状がイメージできるよう DVD の視聴をしたのちに、看護過程の展開をするなど工夫を行った。

課題としては、病態の理解、症状のメカニズムの理解の到達度が高くなく、断片的な知識で知識や理論が体系化されていない。今後は、人間科学講座の教員とも連携をとりながら、重要な知識やメカニズムの理解の積み上げや統合ができるような授業の工夫が必要と考える。

3 研究活動の現状と課題

それぞれの教員が、自分の専門的研究領域で研究を推進している。3名は科学研究費を取得し、1名は本学の競争的研究費の奨励研究を取得している。また、卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。論文としての公表を積極的に推進することが必要である。

3-5-10 成人・老年看護学研究室

1 活動方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、ディスカッションやグループワーク、ディベート等を設け、学生が思考する学習方法を取り入れた。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して学生自身が看護の模擬体験をする機会を取り入れるよう取り組んでいる。また、大学院では老年 NP コースを運営し、NP 論、老年 NP 論、老年アセスメント演習、老年薬理学演習、老年 NP 実習 I II III と講義・演習・実習の構成の中で教授している。老年 NP という新しい看護の役割について責任をもった自律性のある高度実践看護師の育成に取り組んでいる。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。代表的疾患を持つ対象者の生活と看護を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるように科目を構成し、卒業時の成果につながっている。しかし、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理

解を学生が主体的に学習する必要があり、それを助けるために、ナーシングスキル等の E ラーニングを活用した学習の導入を試行している。大学院では特に遠距離学生が学べる体制づくりが必要であり、授業録画と発信などの E ラーニングの構築に取り組んでいる。さらに学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することが今後の課題である。

3 研究活動の現状と課題

成人・老年看護学では認知症や糖尿病などの慢性期疾患、急性期など幅広く各教員のテーマによる研究を行っている。また、今年度は日本看護倫理学会第 10 回年次大会を運営し、全国の看護師との研究交流の場に貢献した。国内外での研究成果の公表をさらに強化することが課題である。

3-5-11 小児看護学研究室

1 活動方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族の関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、2年次前期に10コマ1単位で行う小児看護学概論と、2年次前期に2単位20コマの小児看護援助論と15コマの小児看護学演習を行った。概論では小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。2年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。最近では兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動画的な子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにして

いる。学生は欠席も少なく意欲的に受講していた。小児看護学の学習内容の定着のために小テストを行い工夫した。また、再試験を行いフォローした。

3 研究活動の現状と課題

小児看護学研究室では、小児看護の中でも小児がん看護の研究や、小児保健分野の予防接種や食動と保護者の食育意識の研究、また、小児在宅医療に関連した医療的ケアの研究を軸に取り組んでいる。平成 29 年度は、昨年に引き続き文部科学省研究費助成金を基に、地域で小児の訪問看護をしている、あるいは今後開始するという看護職に対して、小児 NP を一部講師とするプログラムを発するのために研修会を研究的に取り組んだ。今後の課題としては、小児 NP のニーズ調査などを系的に行うことが課題と考えている。

3-5-12 母性看護学研究室

1 活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論 I、母性看護援助論 II、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学の講義時間数は平成 27 年度カリキュラムによって 10 コマ減少した。母性看護学演習に講義内容を含めて知識の充実に努めたが、母性看護学実習において、事前学習や知識の習得が足りないことが次年度の課題となった。また、実習期間中に各施設における分娩や産褥婦、新生児などの経験値が異なるとの課題が例年あがっており、分娩や産褥・新生児の経験が少ない施設で、実習施設で人形を使用して沐浴を行うなど、臨地において実習指導の工夫を行っている。

3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、睡眠や生活活動量を用いた研究、産後ケアに関する研究、父性に関する研究、性教育、受胎調節、家族計画に関する研究に取り組んでいる。今年度は研究室内のメンバーの出入りが多く、また欠員のままの現状でもあった。まず人材を充実させて、研究活動に取り組んでいきたい。

3-5-13 助産学研究室

1 活動方針

大学院助産学コースは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけさせるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーションや体験型の演習、技術試験などの段階的 OSCE を取り入れた教授方法を推進している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、個別面談や他学年を交えた発表の機会を設けディスカッションの場とする。研究活動は、各教員のテーマを深め研究力をつけること及び卒業研究、課題研究の指導が学会、研修参加をとおして助産学領域全般の研鑽を積むこととする。

2 教育活動の現状と課題

大学院助産学コースの助産学専門科目は、昼間に教育を実施している。学生は、夜間に共通科目を履修しており、1年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があることから課題の重複や体力の維持など学生の学習状況を確認している。段階的 OSCE により、臨地での多重課題に混乱する場面は減少しているが学生個々の対人対応能力にもよるため、個別に応じた指導をしていきたい。2年次生は、5月から7月にかけて11週間の実習を行い、個人差はあるものの実習目標は達成できた。昼夜を問わない実習であるため、心身の疲労を含めた体調管理に全教員で引き続き支援していきたい。2年次後期には、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、助産師としてのアイデンティティの基礎を形成することできた。課題研究は指導を受けながらまとめ、全員提出し成果を報告したが、指導教員の指導の受け方等社会人としての対応に課題のある学生もあった。今後、関連学会等で発表する予定であるため支援していく。今後は、現在実施している段階的 OSCE の評価を行い、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながらカリキュラム全体を見直していく予定である。

3 研究活動の現状と課題

教員の半数は、学内外の研究費を獲得し各自の課題を探究し続けており、関連学会等で発表している。助教の研究が日本母性衛生学会の学術奨励賞を受賞した。卒業研究は、教員の研究テーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を行なった。課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として第58回日本母性衛生学会にて発表し、成果を残した。

4 その他

平成 29 年度地域医療介護総合確保基金の助成をうけ、大分県内の助産師を対象に平成 30 年 2 月 11 日に大分県立病院の佐藤副院長を講師に招き、本学講義室と母性・助産実習室で助産師能力強化研修「経腹超音波検査」を行った。大分県母性衛生学会事務局として通年で活動し、第 14 回大分県母性衛生学会学術集会の実行委員を支援した。

3-5-14 精神看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、1)精神科領域だけでなく他のさまざまな場での精神看護、2)対象者の社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や治療的人間関係に留意した看護、及び4)医療のみならず保健・福祉サービスとの連携を意識した看護の学修のために、講義・演習・実習の流れを意識して構成している。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。教員の研究については、それぞれの専門領域を生かすだけでなく、行政や病院と協働で研究を推進できる体制の構築を図っている。

大学院では、精神看護学特論、メンタルヘルス特論、看護政策論、看護コンサルテーション論などを担当している。広域看護学コースの精神看護学特論は、国家試験出題範囲にとらわれず、保健師の地域・職域精神保健活動の実際に必要な内容を扱っている。それ以外の科目は、大学院各コースの共通科目に指定されている単位が多いので、履修者全体の関心とニーズに対応する授業内容を目指している。

2 教育活動の現状と課題

学部の講義では、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などについて、具体的な事例や視聴覚教材を紹介しながら、できるだけアクティブラーニングを実現できるよう努めている。演習は、紙上事例演習、グループワーク、体験的学習、実習施設や家族会・NPO のスタッフによる活動紹介などで構成し、続く実習への準備性を高めることを狙っている。前年度から病棟実習と障害福祉サービス事業所での実習日数を変更したが、これが適切だったので引き続き同様のカリキュラムとした。各実習施設とは、前年の学生の状況をふまえて密に連絡を取り、実習運営や学生指導の細部を改善した。卒業研究は、学生の希望と計画の実現性をすり合わせながら進めており、学生の満足度は高い。

3 研究活動の現状と課題

自殺予防の領域では、大分市や豊後大野市と協働で住民調査を行い、そのデータを解析して

論文作成中である。産業精神保健の領域では科研費を用いて、交代勤務者の睡眠と眠気に関する調査・実験を、大学院生や卒論生との協働で進めており、一部は論文投稿中である。精神科看護領域では実習病院等と協働で、精神障害者の社会参加に向けた心理教育（IMR）の効果評価や、患者の拘束に関する看護者の意識調査などを行い、研究成果をまとめつつある。前者については成果の一部を論文投稿中であり、後者は日精看大支部の推薦演題として学会発表を予定している。学校メンタルヘルス領域では、コーピング特性簡易評価尺度の思春期版を作成し、そのフィージビリティに関する論文が学術誌に受理された。今年度中に publish された論文は少ないが、近日中に発表できる研究成果が相当あるので、論文化を急ぐ必要がある。

3-5-15 保健管理学研究室

1 活動方針

学生が地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得できるように教育を行った。また、学生が自律した学習態度を身につけるため、主体的に取り組める教育方法を積極的に取り入れた。保健管理学研究室の教育全般として、4年間の看護師教育に相応しい講義、演習、実習の内容を検討のうえ該当科目において学生が深く学べる教育を重視した。保健福祉の社会システムをはじめ、在宅におけるケアマネジメントや看護管理のマネジメント等、地域社会で生活する人々の多様な健康ニーズにあわせた看護を提供できるよう科目ごとに教育を行った。特に、地域包括ケアシステムやケアマネジメントについては、在宅看護を強化するため、社会資源の活用や他職種との連携や共同など、幅広くマネジメント能力を育成する教育を進めた。

2 教育活動の現状と課題

講義は最新の知識や情報を提供し、多様な人々の健康ニーズと社会の要請に対応できるよう教内容や方法を検討した。3年次生の在宅看護論では、1年次、2年次で学習した内容から、学生が在宅で療養する対象について具体的なイメージができるよう、実習で経験した事例をもとに計画を考え、演習を取り入れるなど学生が主体的に取り組める教育を行った。また、3年次生が4年次生の実習を見据えて、地域の資源を活用したマネジメントができるよう、管理運営の視点も加え、講義・演習を工夫した。学生がこれまで学んだ内容を応用し、自ら考えて看護を提供できるよう、さらなる学習方法の工夫が必要である。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究については、5名の学生に保健管理学研究室の教育に関連したテーマで研究指導を行い、成果を得た。学生が研究成果を活用し発展できることが今後の課題である。大学院の研究では、担当教員が各学生へ指導を行った。看護管理学や在宅看護学等に関する研究成果が得られ、今後は、学会発表や論文の公表を行う。

3-5-16 地域看護学研究室

1 活動方針

学部では、看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉え、生活の場での看護や生活に目を向けた看護が重要視されており、すべての看護職者の基礎的知識として「地域看護」の思考を持った看護師の育成に取り組んでいる。大学院教育では、少子高齢化社会において生活者として健康づくり、産業での従事者や学校における学生の健康づくりの担い手として社会変化に対応できる能力、保健師特有の個から地域社会全体、地域社会全体から個をみる能力を持った保健師の育成に取り組んでいる。

2 教育活動の現状と課題

学部では、地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行ってきた。昨年度は、その課題を十分に理解できないまま実習に臨んだ学生がいたため、今年度は、コミュニティ・アセスメントの手法を教授した。大学院の実習では、学生・教員・自治体（企業）が一体となって行っており、テーマ設定の場面から、学生の関心のあるやりたいことと、実習地が直面している「現代進行形の健康課題」などについて打ち合わせを行い、一緒に考え、実習に臨むなどの工夫を凝らしている。この形式で3年目を迎え、定着してきている。広域看護学コース入学生の人数が増加してきているため、来年度以降は再検討していかなければいけない。

3 研究活動の現状と課題

学部では、4年次生の卒業論文、大学院では、実習を「日本地域看護学会」、「日本公衆衛生看護学会」、「日本公衆衛生学会」等の学会での発表や全国の大学院修士課程保健師養成の学生との交流会を持つなど、活発に研究活動も行っている。早く、課題研究成果を学会論文誌に投稿することが課題である。

3-5-17 国際看護学研究室

1 活動方針

In our undergraduate courses, our department's program is designed for students to obtain knowledge to provide sensitive, competent and responsible care to people in different and similar communities and countries in the world as well as acquisition of skills and attitudes for nurses who can provide culturally sensitive caring to promote health and well-being. In addition, this program is designed for students to develop global leadership potential and a strong basis of professional identity in the global era.

In our graduate courses, the program is designed for students to enhance their capability to apply global nursing concepts and knowledge, and principles of transcultural nursing to the health care setting.

2 教育活動の現状と課題

All classes were conducted both in English and Japanese. We provided students with current knowledge of global nursing to expand their knowledge regarding culturally competent care which can meet the need of people living in different and similar communities and countries through the lectures. We arranged either group discussion or watching DVDs relevant to the content of lecture following each session. In some seminars, students are required to present their group work, ask questions, and comment in English.

Based on the last year course evaluation from the students, they had more opportunities to engage in indirect international nursing experiences through special lectures on real experience associated with Red Cross activities, JICA activities, and NGO activities as well as the actual situation of foreign patient care in Japan.

Although students could learn the basic knowledge related to global nursing, future issues with respect to practical knowledge about global health issues could be pointed out.

3 研究活動の現状と課題

Our research interests include transcultural nursing, and differences/similarities of the nursing/health care delivery system between Japan and other countries. We had presentations in international conferences, and publications related to these research area.

Senior students belonging to the department had conducted their graduation thesis research actively. One of our alumna made a presentation of her study in an international conference. More students are expected to present their study in conferences or publications.

3-6 学部講義

人のこころの仕組み

1 年次前期

吉村 匠平

外界の対象や自分自身を認識する存在として人間の機能の特徴、2 年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識について、講義時間内での小実験・DVD 視聴、ペアによる話し合い活動を通して、修得する機会を提供した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、教室全体での交流を心掛けた。時間外学習の機会として、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求めた。講義に先立って評価基準を学生に開示し、各授業終了時点の学習到達状況を個別にフィードバックした。

コミュニケーション論

1 年次前期

関根 剛

コミュニケーションについて、プロセス・レコードの理解につながるようなキーワードとして、情報の〈受信〉―〈理解〉―〈発信〉という構造で解説するとともに、体験や演習を通じて、感覚的にもコミュニケーションの重要性、他者とのコミュニケーション、自己観察など自分自身とのコミュニケーションにつなげていった。

具体的な内容は、プレゼンテーションの重要性について、グループエクササイズを通じて経験を通じた理解を促進した。さらに、〈受信〉として行動観察、理解として文化、〈発信〉としてプレゼンテーション、手話、〈受信―理解―発信〉の流れとしてプロセス・レコードの講義、今後のグループワーク等の為のリーダーシップの解説などを行った。

入学直後の講義であり、看護の基礎スキルとなるコミュニケーションについて、体験的に理解させるために、知識に偏らない、演習やエクササイズを取り入れたものとするを重視して展開した。小レポートおよび試験によって評価を行った。

英語 I-A1

1 年次前期

宮内 信治

英語の音声については、発音記号と発声法を確認し、練習させてその定着を図った。講読では、20 世紀のエッセイ、文学、哲学を題材にした英語名文集をテキストとして用いた。併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源 CD を活用してスムーズな音読の習得を目指して練習させた。学んだ英文を帳面に書写し、機会講義までに音読暗唱できるようにすることを課題とした。講義後半で、易しい英語で書かれ

た書籍を自ら選択して読む多読を実施した。英語を通して世界に通じる教養を体得できたと思う。

英語 1-B1

1 年次前期

Gerald T. Shirley, Naho Baba

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

環境保健学概論

1 年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

環境保健学概論は環境保健の基本的な考え方や、環境中に存在する様々な有害因子と健康影響との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。健康影響として環境保健上注目されるがんを中心に取り上げ、環境との関係について最新のトピックスと関係づけて講義を行うことで、環境リスクという概念を紹介し、環境保健に学生が興味をもてるように努めた。

健康情報学

1 年次前期

佐伯 圭一郎

保健統計・疫学領域から内容を厳選し、保健統計指標の意味と現状、EBN の基礎となる疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、「健康情報処理演習」において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図った。

筆記試験結果からは、過去数年に比して基礎的な内容の定着度は高まったと考える。ただし、興味関心や満足度が低いという授業アンケートの結果からみて、現在の構成と進行では受講者とのミスマッチが大きいと判断する。次年度以降に向けて、講義中に学生の理解度を把握することやこの領域への興味関心を高める工夫を行う必要を認める。

健康情報処理演習

1 年次

品川 佳満、野津 昭文、佐伯 圭一郎

看護職に必要な ICT（情報通信技術）のスキルや知識について教授した。各種アプリケーションの操作、データ管理、Web 技術、画像処理、データベースの利用等については、実際にコンピュータを使った演習により技術の習得を図った。コンピュータやネットワークを安全に活用するために必要な情報セキュリティ・情報モラルに関することや、看護師が医療現場で扱う病院情報システム（オーダーリング、電子カルテシステム等）については、講義形式で教授した。また、「健康情報学」、「生物統計学」で学んだ講義内容の理解を深めるために保健統計・疫学・統計データの分析を演習に組み込んだ。

コンピュータの操作能力は、年々向上しているが、医療職者に必須の情報セキュリティやモラルに関する理解度は、十分とは言えず、今後、教授方法や内容の検討が必要である。

生体構造論

1 年次前期

濱中 良志、岩崎 香子

人体の構造（解剖学）について、1 年次生は意味づけをしないで丸暗記する傾向にあり、短期記憶にとどまっていた。そのため、active learning の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室・看護アセスメント学研究室の協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の構造（解剖学）事例シートを通して人体の構造（解剖学）に関する議論を通して教授した。

生体機能論

1 年次前期

濱中 良志、岩崎 香子

人体の機能（生理学）について、1 年次生は、莫大な量を処理すると感じていたため、理解するべきところを単純暗記に切り替えて学習する傾向にあった。そのため、active learning の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室の協力を得て、グループの中の 1 名の代表者に 5 分間走ってもらった。その前後の体温・血圧・脈拍・酸素飽和度・発汗量の測定をしてももらい、その変化について生理学的考察を加えて発表を行った。その発表の議論を通して人体の機能（生理学）に関する知識を教授した。

健康運動ボランティア演習

1 年次

稲垣 敦、福田 広美、佐藤 弥生

教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に 20 のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が 3 つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。

スポーツ救護

1 年次前期

稲垣 敦

受講者は、大分岡病院で開催された大分県スポーツ学会主催の第 8 期スポーツ救護講習会に一般受講者と共に 3 日間（4 月 12 日、5 月 21 日、6 月 18 日）受講した。認定試験に合格した者は、スポーツ救護士のライセンスを取得し、看護師免許を取得後、学会に届け出ればスポーツ救護ナースのライセンスに変更される。

自然科学の基礎

1 年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、吉田 成一、佐伯 圭一郎、野津 昭文、恵谷 玲央

自然科学の基礎は看護学を専攻する学生の基礎教養として生物、物理、化学、数学の基本的事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶと同時に自然科学の考え方を理解できるように努めた。講義の終わりに確認テストを行い、学生の理解度を把握しながら講義を進めた。

大学ナビ講座

1 年次前期

藤内 美保、村嶋 幸代、影山 隆之、甲斐 倫明、安部 眞佐子、吉村 匠平、関根 剛、野津 昭文、石本 田鶴子（非常勤講師）、南保 昌孝（大分労働局）

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学とはなにか学ぶこと考えること」「アルバイトリテラシー」「メモ・ノートの取り方」「大学カリキュラムの方針・考え方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「伝える技術 1：文を書く、レポートを書く」「伝える技術 2：話す、プレゼンする」「伝える技術 3：質問する、議論する」「メ

ディアリテラシー：新聞・報道、インターネット活用」の10回の内容とした。早めに知りたい内容が多かったという学生の意見を反映し、今年度は4月5月に集中して実施した。また出席カードにより、参加状況を把握した。今年度は欠席学生がおり、次年度は本科目の意義、オリエンテーションを入れることを予定する。

看護学概論

1年次前期

伊東 朋子

看護の本質や機能、歴史的変遷および看護活動の場と看護職の役割などについて概括的に理解させた。またそれらを支える倫理や法律などについても学ぶことを通して、自らの看護に対する姿勢を考えさせた。講義一辺倒な授業展開ではなく、できるだけ学生が参加する形態を目指し、毎回課題として、ミニレポート等も課して、講義の理解と日常生活の中で考えていることを記述させた。

生活援助論

1年次前期

秦 さと子、巻野 雄介、石丸 智子、伊東 朋子、麻生 優恵

対象の状態に合わせた援助技術を判断し実施できる力の育成を目指して授業を展開した。看護技術の原理原則については、人体の構造・機能や物理学的知識等を踏まえて講義形式で教授した。演習では、援助対象の状況を提示することで、講義により得られた知識や考え方を活かして、学生間で考えながら課題を解決するように展開した。技術修得のための支援として、演習時間内の直接指導、個人学習のための動画提示、希望に応じて課外での指導を実施した。演習中は得られた知識を生かして援助方法を考えながら工夫する姿勢がみられるが、実技試験では手順通りに技術展開を行おうとする傾向がみられた。今後は技術力の評価をどのようにすべきかが課題である。

初期体験実習

1年次前期

伊東 朋子、麻生 優恵、足立 綾、石丸 智子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 栄治、財津 知美、秦 さと子、田中 佳子、中釜 英里佳、中村 伊都子、巻野 雄介、山田 貴子、吉川 加奈子、渡辺 康人

平成29年7月10日～7月14日に実施した初期体験実習 Early Exposure は早い時期に学外に出て看護の現場を体験することで、看護とは何かを考え、自ら看護の力を身につけようとする自立性を育むための実習である。看護体験によってその後の学習の動機付けとキャリア

パスを視野に入れた自分の将来像に多様性をもたせることに力点を置いて展開した。外部講師の講話にも、学生の進路希望の1つでもある養護教諭や助産師による講話も取り入れた。実習中、体調を悪くする学生もなく、実習の目標を達成させることができた。実習施設が市外地にある施設では移動のための時間や交通費等の問題も出てきており、次年度は再度、実習施設等の検討を行う必要がある。

健康論

1 年次前期前半

福田 広美、平野 互

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本 21 などの取り組みを交えながら講義を行った。

予防的家庭訪問実習（1 年次）

1 年次

濱中 良志、福田 広美、影山 隆之、岩崎 りほ、平井 和明

2～4 年次生とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問する実習を行った。本実習で 1 年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。4 月 14 日の全学オリエンテーションの後、担当教員の指導の下、グループワークを行って訪問準備を開始した。学生は一人当たり年 4 回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって 4 回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。訪問計画が順調に進んでいるかを年度途中で二度確認したことにより、年度末に訪問回数不足が問題となる学生はほとんどなかった。訪問時に協力者に急変が起こった場合に備え、対応マニュアルを年度途中で作成し、各チームに配布した。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。一年間に協力者 80 名中 17 名が、健康事情等により協力を辞退したので、代替りの協力者をリクルートした。学生の本実習に対する感想や意見を収集するため年度末にアンケート調査を行った。回答率は 28.6%と低かったが、回答の範囲では、半数以上の学生が「高齢者とのコミュニケーション」「高齢者の生活」「個人の健康・強みに目を向ける必要性」などを学べたと回答し、自主性・主体性の成長を自覚している学生は 4 割を超えた。実習の目的や目標、チーム構成、実習評価項目については適切とする回答が比較的多かったが、訪問前後のカンファレンスについて「効果的ではない」とする学生が 3 割を超えた。次年度に向けて、マネジメント体制を看護研究交流センター地域交流チームに一本化し、協力者交代を減らすため新規協力者の年齢条

件を引き下げ、記録の様式や提出方法を改善する方針である。

人間関係学

1 年次後期

吉村 匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。自他を状況論的に理解するために求められる態度としてカウンセリングマインドについて学習する機会を提供した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークをベースとして学習を進めた。授業時間外の学習機会として、ショートレポートの作成に加え、任意提出の自由課題を課した。

カウンセリング論

1 年次後期

関根 剛

看護に必要なカウンセリング技術とカウンセリング理論等についての解説およびカウンセリングスキルに関するロールプレイを行った。コミュニケーション・スキルの解説3回、ロールプレイ3回を行い、実習や今後の実務に必要となるスキルの習得を中心に構成した。ロールプレイは、学生を4人グループに分けて、スキルの難易度を変えたり、気をつけるポイントを示した相談内容の事例を学生に示して実施した。事例に従って、学生それぞれが聞き役、話し役、観察者となって、実際のコミュニケーション・スキルの基本を獲得させた。

また、カウンセリング理論は、認知行動療法、精神分析、来談者中心療法、PTSD等の危機介入などについて解説した。特に、それぞれの理論が、看護場面とどのように関わるかについても言及して、看護におけるカウンセリング理論という視点からも解説をした。ロールプレイのレポートおよび試験による評価を行った。

英語 I-A2

1 年次後期

宮内 信治

前期と同じ教科書のうち、未習のテキストを用いて日本語訳を介した文法理解、テキスト音読と書写、課題としての音読暗唱を行った。また、教科書にないテキストとして、シェークスピアのソネット、新渡戸 稲造『武士道』を使って同様の演習を行った。日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を通して、いわゆる「国際人」といわれる人に求められる思考の一端に触れさせた。講義後半では、前期と同様、多読活動を行った。

英語 1-B2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

生物統計学

1 年次後期

野津 昭文、佐伯 圭一郎

EBN の基盤となり、看護研究を遂行する上で必要とされる統計学の基礎知識を身につけることを目標に講義を行った。小テストやレポートを組合せ、単なる手法の理解だけでなく、統計学の考え方、特に確率論から推測統計学の考え方を筋道立てて理解できるように配慮した。

生体代謝論

1 年次後期

安部 眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体での代謝がイメージできるように、低分子から高分子へとすすみ、酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達、遺伝子発現へとすすんだ。エネルギー代謝を生化学での細胞内の反応として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食サイクルの臓器の代謝について講義した。栄養学では、食品の特性の理解、食事バランスガイドのなりたち、食事摂取基準について説明した。毎回講義中に学生が教科書を読んで前回のふりかえりをして要点をレポートとして作成し、4 段階の評価を行い、返却してテスト対策ができるようにした。

生体反応学概論

1 年次後期

市瀬 孝道

生体反応学概論では病理学総論を講義している。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解

できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の教科書（カラーで学べる病理学）を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリントを配布してパワーポイントも使って講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

生体反応学各論

1 年次後期

市瀬 孝道

生体反応学各論では病理学の各論を講義している。系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器疾患、感覚器疾患。

微生物免疫論

1 年次後期

吉田 成一、松本 昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

講義内容を、着実に習得すべき内容に整理したが、講義後の復習を適切に行わないことに起因する、理解度が低い学生が存在しており、試験直前ではなく、各回講義後の復習が重要であることを周知する必要がある。

また、本科目は2年次から3年次への進級必須科目であることから、本科目の単位未修得により進級できない学生が生じたことは、残念であった。

健康運動

1 年次生後期

稲垣 敦、濱中 良志、池辺 泰俊、大津留 麗理

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、学生がしたことのないような多くのレクリエーション、ニュースポーツを行い、また、バドミントン、テニス（濱中）、ヨーガ（大津留）、和太鼓（池辺）を行なった。運動強度や運動量の確保にも配慮した。

看護理論入門

1 年次後期

伊東 朋子

看護学を支える基盤としての看護理論をわかりやすくとらえさせるために、3つのカテゴリーに分けて学習をすすめた。主な理論家について事前学習をさせて、学習内容を発表させながら、それを中心に展開した。2段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、生活援助論で学んだ具体例などを取り上げ、実際の臨床現場における看護理論の考え方について指導した。学生の授業アンケート結果では出席率や満足度は8割以上ではあったが、自由記述の中に、「理論が難し過ぎて、勉強する意味がわかりません」などという記述がみられ、次年度への反省、改善点として取り組みたいと考えている。

基礎看護学実習

1 年次後期

伊東 朋子、麻生 優、足立 綾、石田 佳代子、石丸 智子、今村 知子、大矢 七瀬、佐藤 栄治、篠原 彩、秦 さと子、田中 佳子、藤内 美保、中釜 英里佳、中村 伊都子、巻野 雄介、山田 貴子、吉川 加奈子

平成30年1月9日～1月22日、入院患者1名を受け持つ本格的な実習として、初めての学習を行った。1年次前期に実施した初期体験実習を基盤として、自己の看護師像を形成しながら学習意欲を高めるようにねらいを定めた。その導入として、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけをオリエンテーションで実施した。学生の構成メンバー、担当教員との関係性を十分に検討し、実習配置を決定した。冬季という実習時期のため、インフルエンザ予防や体調管理についても指導した。インフルエンザが蔓延したが、大きな支障もなく終了することができた。

看護疾病病態論Ⅰ

1 年次後期

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

2単位20コマで、内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、アクティブラーニングを導入している。講義は、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。腎・泌尿器疾患、消化器疾患、内分泌・代謝疾患、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚疾患、循環器疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。アクティブラーニングは、病態探究演習を1コマ設定し、事例を提示して、病態やメカニズムを論理的に考え小グループでディスカッションする試みをした。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。

看護疾病病態論Ⅱ

1 年次後期

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

2 単位 20 コマで、内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、アクティブラーニングを導入している。講義は、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。脳・神経疾患、呼吸器疾患、感染症、生殖器疾患、運動器疾患、血液・造血器疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。アクティブラーニングは、病態探究演習を 2 コマ設定し、事例を提示し、病態やメカニズムを論理的に考え小グループでディスカッションする試みをした。教科書は系統看護学講座シリーズを使用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかりと学ぶ必要性を認識するようである。

教職概論

1 年次後期

伊東 朋子、吉村 匠平、関根 剛、赤星 琴美、麻生 良太、堀本 フカエ、横山 秀樹

専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。受講者 24 名。

音楽とこころ

2 年次前期

小川 伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 41 名であった。

美術とこころ

2 年次前期

澤田 佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと（造形表現）の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は 19 名であった。

言語表現法

1 年次前期

松田 美香

人と人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために有効な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に、講義を行った。単位認定者数 76 名であった。

韓国語

1 年次前期

劉 美貞

ハングル文字と発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 70 名であった。

哲学入門

1 年次前期

西 英久

医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本的問いを考察する講義を行った。単位認定者数は 50 名であった。

社会学入門

1 年次後期

大杉 至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単

位認定者数は 6 名であった。

法学入門（日本国憲法）

1 年次前期後期

二宮 孝富

日本国憲法について、歴史的意義・基本原理をふまえ、特に人権に関する諸問題を学び、市民としての基本的な法的素養を身につけることを目的に、講義を行った。単位認定者数は 71 名であった。

文化人類学入門

1 年次後期

足立 恵理

医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を通して、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるように講義を行った。単位認定者数は 59 名であった。

行動療法と発達心理

2 年次前期

吉村 匠平

言語発達、運動発達について、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進める形をとり、長い時間をかけて進化した結果として現在の人間の姿があることについて考える機会を提供した。講義後半では、広汎性発達障害を中心に、障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて、演習形式を取りながら講義を進めた（発達心理）。1 年次の学習心理学の考え方を応用した行動変容技法である行動療法について講義を行った。特に看護師として生活習慣の変容をターゲットとした解説および、自分の行動改善プログラムの作成を行わせ、夏季休暇中に実践・レポートを提出させることで、より具体的に理解を深めさせるよう企図した。評価は試験および行動改善プログラムのレポートによって行なった（行動療法）。

英語 II-A1

2 年次前期

宮内 信治

原書 Word Power Made Easy を用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起

源の語源についての知識を習得しつつ、性格描写、医療職者などを表わす語彙を学び、その派生語についても習得させた。各講義の次週に単語小テストを行い、学習確認と評価に活用した。期間内に、教員が指示した教科書内の原文について音読暗唱の課題を与え、評価した。1年次に引き続き、多読活動に取り組ませた。

英語 2-B1

2年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

保健ボランティア

2年次

藤内 美保

保健医療に関するボランティアを体験し、体験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探し、参加手続きをとり、体験し、参加レポートを記載するなど、自主性や行動力の向上につながっている。心理リハビリテーションキャンプ、高齢者サロン、多世代交流プラザでの健康チェック、ALS患者会の総会にボランティアとして活動したり、リレーフォーライフの会場準備や久住コロニーのボランティア活動を行うなど、様々な場で幅広く活動していた。

環境保健学詳論

2年次前期

小嶋 光明、甲斐 倫明

環境保健学詳論は生活の中で遭遇する身近な環境因子が及ぼす健康影響についての基礎知識を講義している。熱中症などの身近な健康影響を例にして、その予防策を学生に発表してもらうことにより、問題の把握、予防や管理のあり方を考えることができるよう配慮した講義を行った。

生体薬物反応論Ⅰ

2年次前期

吉田 成一

生体薬物反応論Ⅰは薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、一部学生にとっては、解剖生理、疾患に関する知識と、医薬品に関する知識を統合することが難しいためか、学習範囲が広いと感じ、理解度が低くなると思われる学生が散見された。これらの状態は、3年次で行う生体薬物反応論Ⅱでより多くの各種疾患治療薬を理解することの妨げになるため、今後、本科目内容を習得するためには、解剖生理および疾患に関する事前学習を周知する必要があると考える。

また、処方内容を理解するために、講義で使用した処方箋に関する復習を指示しているが、実施している受講者が少なく、次年度以降、徹底することで理解度の向上を図りたい。

健康運動学

2年次前期

稲垣 敦

ボディメカニクスの導入として人間固有ともいえる二足歩行を取り上げ、その後も生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、運動の重要性や健康との関連性を講義した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義し、運動療法についても概説した。さらに、厚生労働省「健康づくりのための身体活動量基準 2013」等に準拠したエネルギー消費量の計算や身体活動量の測定実習も行なった。

医療技術論

2年次前期

秦 さと子、石丸 智子、巻野 雄介、伊東 朋子、麻生 優恵

対象の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。看護技術の原理原則については、人体の構造・機能や医療機器の特徴等を踏まえて講義形式で教授した。演習では、対象と医療職者の安全確保の重要性を実感できるようなシミュレーターの選択や独自で作成するなど教材の工夫を行った。技術修得のための支援として、演習時間内の直接指導、個人学習のための動画提示、希望に応じて課外の指導を実施した。滅菌操作における「清潔区域」と「汚染区域」の判断はできるが、その判断と技術展開が伴っていない傾向がある。今後は自らの技術展開を学生間で意見交換しながら気づき、改善しながら理解していく方法の工夫が必要である。

ヘルスアセスメント

2 年次前期

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、連続の時限ではなく間隔を設けて実施し、学内実習前に講義の復習をして臨むようにした。試験は、筆記試験と実技試験を実施した。実技試験は、呼吸器系、循環器系、消化器系、神経系の基本技術が確実に身に着くように事前課題を提示した。また、最終の演習は、「地域高齢者演習」とし、既習の知識・技術を活用し、地域の高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルアセスメントの機会を設けた。高齢者とコミュニケーションをとりながら、聴診器で肺音、心音、腸蠕動音を聴取、関節可動域の測定、瞳孔の観察などをして、正しい技術でフィジカルアセスメントし、正常・異常の判断など効果的に学んだ。

看護アセスメント概論

2 年次前期

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義を行った。昨年度の改善点として、看護過程を展開するために作成された大腿骨頸部骨折事例の DVD を視聴させ、映像として対象者をとらえることができるように工夫したことに加え、今年度は、必要な追加情報を提示し、病態の理解が深まるように工夫した。1 人の学生が一連のプロセスで看護過程の思考が整理できるよう個人ワークを行い、身体面、心理面、身体面から必要な情報をピックアップすることから、アセスメント、看護診断、計画および評価の記載を行った。学生の記録を確認し、なにができて、なにができていないかを学生に資料としてまとめフィードバックし、再度修正させ、個人ワークのレポートを提出させた。必要な学生には、個人面接をして看護過程の学習の理解を強化した。

看護アセスメント演習

2 年次後期

藤内 美保、石田 佳代子、山田 貴子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、5 名～6 名からなるグループで、ディスカッションしながら看護過程を展開させた。看護過程を展開するために作成された白血病、脳梗塞、慢性心不全の事例の DVD を視聴させた。病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を選定した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行っているので、

グループメンバーとディスカッションし、視野が広がり、理解が深まることを意図した。中間発表会と全体発表会を3グループに分けて、前半は、前述の3事例のうち同事例でディスカッションする形式とし、後半は異なる事例でのディスカッション形式とした。患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員への発表会に参加を促し、記録物を配布するなどして、学生のレディネスを把握することで、実習指導の際の参考になるように配慮した。

予防的家庭訪問実習（2年次）

2年次

藤内 美保、市瀬 孝道、石田 佳代子、吉田 成一、定金 香里、山田 貴子、田中 佳子

1、3、4年次生とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問する実習を行った。本実習で2年次生は特に、在宅高齢者の生活・人生のアセスメントと、これをチーム内で共有することを主眼とした。4月14日の全学オリエンテーションの後、担当教員の指導の下、グループワークを行って訪問準備を開始した。学生は一人当たり年4回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって4回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。訪問計画が順調に進んでいるかを年度途中で二度確認したことにより、年度末に訪問回数不足が問題となる学生はほとんどなかった。学年毎の目標を前年から修正し、4年生では地域への視点を強化することとした。訪問時に協力者に急変が起こった場合に備え、対応マニュアルを年度途中で作成し、各チームに配布した。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。一年間に協力者80名中17名が、健康事情等により協力を辞退したので、代替りの協力者をリクルートした。

学生の本実習に対する感想や意見を収集するため年度末にアンケート調査を行った。回答率は28.6%と低かったが、回答の範囲では、半数以上の学生が「高齢者とのコミュニケーション」「高齢者の生活」、「個人の健康・強みに目を向ける必要性」などを学べたと回答し、自主性・主体性の成長を自覚している学生は4割を超えた。実習の目的や目標、チーム構成、実習評価項目については適切とする回答が比較的多かったが、訪問前後のカンファレンスについて「効果的ではない」とする学生が3割を超えた。

次年度に向けて、マネジメント体制を看護研究交流センター地域交流チームに一本化し、協力者交代を減らすため新規協力者の年齢条件を引き下げ、記録の様式や提出方法を改善する方針である。

成人看護学概論

2年次前期

小野 美喜

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルに

おける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を
実践していく上で基盤となる知識や中範囲理論を教授した。小テストや小グループディスカ
ッションを適宜実施し、学生の実習体験をいかしながら成人看護学の授業につなげた。学生
の思考をいかに深め、学生が発言していくかを工夫することが課題である。

老年看護学概論

2年次前期

小野 美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイク
ルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、
慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。
また、高齢者の機能低下と QOL に関する意見交換を実施し、学生の参加度が高められた。
引き続き来年度も継続していきたい。

成人看護学援助論

2年次前期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、中釜 英里佳、宿利 優子、佐藤 栄治

成人期にある対象の特性をふまえ、系統的に特徴のある健康障害について、急性期、慢性
期、回復期、終末期の看護援助方法を、各教員がハンドアウト資料と教科書を用いて教授し
た。グループワークや学内実習で、がん患者へのケアや周手術期看護を実践的に学べるよう
にした。今後は、更にグループディスカッションを行う場面を多くして、学生が主体的に学
べ発言できる講義内容にしていく必要がある。

小児看護学概論

2年次前期

高野 政子、草野 淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的とし
ている。基本的概念として小児看護では、小児保健や福祉の保育の視点や、小児医療の動向
を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容
は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)子ども観の変遷と子どもの
権利、3)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、4)小児の栄養、5)小児の成長
と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)小児看護で用いる理論などである。最終回は、
学生の子ども観レポートを発表して共有することで、各個人の子ども観を意識できるように
動機づけを行った。

母性看護学概論

2 年次前期

林 猪都子、梅野 貴恵

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。リプロダクティブヘルスケアはグループワークを取り入れて、自主学習を進め、学んだ学習の中から課題を抽出し発表した。今年度も学生は活発なディスカッションがみられた。

社会保障システム論

2 年次

平野 亙

在宅医療や介護と医療の統合が重要視される今日の看護職にとって、社会資源に関する理解は不可欠であり、同時に社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。講義時間数の制約もあり、今後の他の科目での講義の展開に備えて、社会保障の全体像が把握できるよう講義内容を整理し、特に他の講義で触れることの少ない福祉を中心に講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで医療・保健システム、福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者といった対象者ごとの保健・福祉政策について講義した。

出席者の受講態度は良好であったが、固定される傾向が強く、期末試験の内容を大きく変えた昨年度は、欠席者を中心に試験成績が非常に悪かったが、過去問が出回っているのだろう、出席とはほぼ無関係に試験成績は良好であった。

養護概論 I

2 年次前期

赤星 琴美、堀本 フカエ

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などについて教授した。具体的には、養護についての本質や基本的概念、養護教諭の沿革、職務内容の変遷などについて、既存の資料や図書館におかれている本・資料などを用いてディスカッションを行い学びを深めた。さらに、養護教諭の職務と果たすべき役割、子どもを取り巻く環境とその解決の支援について、現職の養護教諭を講師として招き、学びを深めた。

教育学概論

2 年次前期

鈴木 篤

教育に関する本質的理念について、これまでに受講者が有してきた経験や理解を問い直すことを通して、教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

生徒指導

3 年次前期

長谷川 祐介、吉村 匠平、関根 剛

教師として生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

教育相談

2 年次前期

柴田 雄企、飯田 法子、河野 伸子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解を構築させた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

英語 II-A2

2 年次後期

宮内 信治

前期に引き続き同じ教科書を用いて英語語彙増強学習を行った。医療職者を含む実践者や科学者を表わす語彙とその派生語を学習した。毎週単語小テストを行い、教科書原文を用いた音読暗唱を課題にして、それぞれ評価した。講義後半では多読活動を実施した。

英語 II-B2

2 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

放射線健康科学

2 年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

放射線健康科学は現代医療に必要不可欠な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物・健康影響、その防護についての基本的な事項を講義している。医療における放射線利用に対する基礎知識を同時期に実施している健康科学実験（自然放射線の測定、診療用 X 線装置の散乱線の測定を通して放射線の量的な理解）と合わせて理解できるように努めた。

健康運動学演習

2 年次後期

稲垣 敦

学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して 15 週間実施した。また、この最初と最後に各自の目標に合った計測を選んで実施し、前後の値を比較して効果判定を行い、考察した。今年は途中で目標や運動の見直しの機会を取り入れ、PDCA サイクルを意識させた。さらに、運動継続のための行動変容理論等の講義を行った。

健康科学実験

2 年次後期

濱中 良志、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央、稲垣 敦

本健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 11 テーマからなる実験を行った。1) 人体解剖学実習 (担当者: 濱中 良志、岩崎 香子、安部 眞佐子)、2) 組織学実習 (担当者: 濱中 良志)、3) 血液検査 (担当者: 定金 香里)、4) 基礎微生物学実習 (担当者: 吉田 成一)、5) ラットの解剖 (担当者: 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里)、6) 測定誤差と変動 (担当者: 甲斐 倫明)、7) 放射線 (担当: 恵谷 玲央)、8) 染色体異常 (担当者: 小嶋 光明)、9) 呼吸循環器系持久力 (担当者: 稲垣 敦)、10) 心電図 (担当者: 岩崎 香子)、11) 食物栄養学実習 (担当者: 安部 眞佐子)

看護アセスメント学実習

2 年次後期

藤内 美保、石田 佳代子、伊東 朋子、麻生 優恵、石丸 智子、後藤 成人、佐藤 愛、佐藤 栄治、篠原 彩、秦 さと子、田中 佳子、中釜 英里佳、中村 伊都子、堀 裕子、巻野 雄介、山田 貴子、吉川 加奈子

1 名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院 8 病棟、大分赤十字病院 7 病棟、大分大学医学部附属病院 4 病棟の計 19 病棟に 6~7 名の学生を配置した。インフルエンザの流行時期を避けるため、従来の 2 月から 12 月へ変更したことで、インフルエンザに関するトラブルはなかった。スタッフ一人一人の熱心な実習指導により内容の濃い実習ができた。全員が実習目標を到達した。病態の理解やアセスメントでは、さらに努力が必要であるが、実習態度やカンファレンスの参加態度は、評価が高かった。また、実習記録への焦りから患者中心の関わりなど、初めての看護過程を展開する学生と患者への配慮ある指導の見直しが必要である。来年度から GPA で S 評価が導入されるため、試行により仮の S 評価をいれて担当教員に評価をしてもらい意見を参考にした。

老年看護学援助論

2 年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、甲斐 博美、堀 裕子

老年期の身体、心理、社会的機能の特性をふまえ、老年期に代表的な障害や疾病をもつ高齢者およびその家族への看護援助方法を各教員がハンドアウト資料と教科書を用いて教授した。特に認知症や加齢による合併症を持つ患者、及び緩和ケア対象患者の生活の質や症状マネジメントをグループワークでディスカッションを通して学べるようにした。今後は、学内

実習も取り入れ、実践的な学びも追加していく必要がある。

母性看護学援助論 I

2 年次後期

林 猪都子

妊娠期、分娩期の生理と異常およびその家族への看護について学ぶことを目的に教授した。今年度は妊娠期と分娩期について講義範囲を広げたため、妊娠期の異常と看護については講義を行い、次年度母性看護学演習で TBL の学習法を取り入れる予定である。また、知識の定着を図るために、毎回講義の開始前に小テストを実施した。小テストへの学生の取り組み姿勢は良好であった。

精神看護学概論

2 年次後期

影山 隆之

健康を心理－社会的側面から理解するために、健康日本 21、精神力動論、心理社会的発達論、ストレス論、及び国際生活機能分類などの考え方と、アディクションや自殺などのトピックを紹介するとともに、歴史と法制の概要を講義した。学生の積極的参加を促すため、ハンドアウトに記載した“答えやすい質問”に関し席順に指名して発言させ、さらに質問や感想を記載できるミニペーパーを毎時間提出させて出欠確認を兼ねた。

問題設定が適切な場合には授業が活性化され、平易な質問に連続する思考力を求める質問についても積極的な発信が見られた。しかし、既存のパワーポイントを用いて情報紹介を続けた時間には参加態度が受け身になったので、すべての教材を後者のタイプに切り替える作業を進めたい。

地域看護学概論

2 年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、佐藤 愛、村嶋 幸代、藤内 修二、江口 由紀子、大鶴 真由美、佐藤 綾美

地域における個人・家族、集団への看護活動を行う意義、看護師に求められる役割について考えることのできる素地を養うため、地域看護の歴史と最新の情報を交えた講義を行った。地域看護の基本的知識として、地域住民が主体的に活動することを支える看護職の基本的姿勢、公衆衛生意義、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）などについて講義を行った。また、大分県の地域看護活動についても、地域で活動する保健師や訪問看護師を招いて

教授した。学生が地域で活動する看護職をイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

家族看護学概論

2年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、佐藤 愛

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。家族看護の概念や家族の機能や構造といった基礎的な知識のほか、家族看護に関連する重要な理論（家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論）については時間を十分にとって教授した。また、家族看護過程の演習では、家族システム理論に基づいて家族を一つのユニットとして捉えて支援することを目指し、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、発表では学生同士が活発な意見交換を行い、家族看護の視野が広がるよう工夫した。

国際看護学概論

2年次後期

崔 明愛 (Myoung-Ae Choe), 桑野 紀子

The objectives of this course are the following: to develop an understanding of the characteristics and nature of international nursing, to enhance knowledge regarding implications and strategies for international nursing, to promote an understanding of risks to health and life in the world, and to facilitate acquisition of knowledge related to international organization. This course was an introduction to understanding the concept of international nursing and health, the global perspectives on health, and the global cooperation of nursing and health.

We have revised and updated the lecture contents as well as statistical data. We have invited a lecturer from WHO Kobe center to provide students with current knowledge on global health problems and strategies to manage the problems. Students have participated in a workshop operated by Oita JICA staff. During the workshop, they have discussed how to approach and solve problems related to people's health in developing countries, and they have shared the results from the workshop.

看護管理概論 I

2 年次後期

福田 広美、平野 互

看護管理の概念および看護管理を取り巻く社会背景を理解し、看護職として看護のマネジメントについて主体的に学ぶことをねらいとした。2 年次が、医療政策における看護管理について理解を深め、社会の変化を予測しながら対応できる組織的な看護の必要性を理解し、看護の対象となる人々に効率的かつ質の高い看護を提供するための看護管理に関する基礎的な知識を学ぶことができるよう講義を行った。

看護の倫理

2 年次後期

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「生と死のかたちに関わる倫理」・「意思決定の倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」の 9 回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。また講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、学生に予習の習慣がないこともあって、事例演習が双方向的な討論の場になりにくいことがあげられる。

第 1 段階看護技術演習

2 年次後期

石田 佳代子

本科目は、4 つのステップからなる看護技術修得プログラムのファーストステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。学生に生活援助技術に関する事例課題を提示し、学生同士でロールプレイをしながら事例に応じた援助を考える学習過程を通して、患者にとっての安全や安楽を確保した実践能力を養うとともに、技術の根拠を再確認でき、自己が実践した生活援助技術について評価する能力の強化を図った。例年通り、担当教員 1 名につき 4 名程度の学生を指導する体制とし、最後に技術チェックを行う方法で実施した。

今後の課題として、血圧測定 of 技術の定着が充分ではない学生がいたので、習得レベルの確認を行ったうえで安全かつ確実な技術習得につなげる必要がある。また、学生の学習レベ

ルに応じた事例課題の精選が必要である。

学校教育心理学

2 年次後期

藤田 文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけから入り、発達、知能、パーソナリティ、学習などの個々の生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2 年次後期

今井 航

将来教員として授業を計画する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基礎力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）及び「学習指導要領とは何か」といった2点の問いを持って、授業を進めた。

英語 III

3 年次前期

Gerald T. Shirley、宮内 信治

講読担当：英語表記の原著論文の構成を教授、確認したうえで、看護分野の原著論文を読解させた。使用する文献をウェブ上にある翻訳ソフトを用いて日本語に翻訳し、その不完全な翻訳文例をまともな日本語に改訂させる演習を行った。講義ごとに使用する文献の専門分野を変え、様々な看護分野の原著論文に触れさせた。また、看護・医療に関連する新しい語彙のリストを事前に配布し、講義のはじめに単語小テストを行って、語彙習得の確認と評価に活用した。

生体薬物反応論 II

3 年次前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり

臨床上使用する医薬品全般について講義した。

2 年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。しかし、脂質異常症、中枢神経系疾患に用いる医薬品については、理解度が低く、今後、理解度の低い分野に関しての教授内容および方法の検討が必要である。

ただし、昨年度までと比べると、学生毎の理解度の差が大きくなっており、単位修得ができなかった学生数が増加したことは、今後、学生理解に対して積極的な関わりが必要であると考えられる。

成人・老年看護学演習

3 年次前期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、中釜 英里佳、宿利 優子、佐藤 栄治、中村 伊都子

成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした。発達段階（成人期、老年期）における特徴を踏まえた上で、様々な健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、臨床現場における看護援助の実践がイメージできるよう演習を行った。成人看護学演習では、胃がん周手術期の患者事例を用いて看護過程を展開した。術直後の患者観察や看護援助、術前の情報を基に立案した看護計画を術中・術後の患者の状況に応じて評価修正ができるよう指導した。老年看護学演習では、認知症をもつ高齢者に焦点を当て、グループディスカッション、ロールプレイなどを通し学生間の学びの共有を図った。

老年看護学実習

3 年次前期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、中釜 英里佳、甲斐 博美、佐藤 栄治、中村 伊都子、巻野 雄介、田中 佳子、石丸 智子、麻生 優恵、後藤 成人

施設に入所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設 6 施設、介護老人福祉施設 6 施設の合計 12 施設において 1 週間の実習を行った。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたリクリエーションの企画や実施などができた。

予防的家庭訪問実習（3年次）

3年次

甲斐 倫明、小野 美喜、影山 隆之、岩崎 りほ、平井 和明

1、2、4年次生とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者絵を継続的に訪問する実習を行った。本実習で3年次生は特に、協力者のアセスメントを基に必要な支援を考え実践することを主眼とした。4月14日の全学オリエンテーションの後、担当教員の指導の下、グループワークを行って訪問準備を開始した。学生は一人当たり年4回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって4回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。訪問計画が順調に進んでいるかを年度途中で二度確認したことにより、年度末に訪問回数不足が問題となる学生はほとんどなかった。学年毎の目標を前年から修正し、4年次生では地域への視点を強化することとした。訪問時に協力者に急変が起こった場合に備え、対応マニュアルを年度途中で作成し、各チームに配布した。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。一年間に協力者80名中17名が、健康事情等により協力を辞退したので、代わりに協力者をリクルートした。

学生の本実習に対する感想や意見を収集するため年度末にアンケート調査を行った。回答率は28.6%と低かったが、回答の範囲では、半数以上の学生が「高齢者とのコミュニケーション」「高齢者の生活」、「個人の健康・強みに目を向ける必要性」などを学べたと回答し、自主性・主体性の成長を自覚している学生は4割を超えた。実習の目的や目標、チーム構成、実習評価項目については適切とする回答が比較的多かったが、訪問前後のカンファレンスについて「効果的ではない」とする学生が3割を超えた。次年度に向けて、マネジメント体制を看護研究交流センター地域交流チームに一本化し、協力者交代を減らすため新規協力者の年齢条件を引き下げ、記録の様式や提出方法を改善する方針である。

小児看護援助論

3年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健を講義し、援助技術の演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほかである。授業は、看護過程の展開を個人とグループで作業を行い、グループワークで展開を完成した事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

小児看護学演習

3 年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、足立 綾

演習は 2 つの課題を設定した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を 4 事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。2 つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。小児看護技術の演習は、教員 4 名で、1)高機能シミュレーターを用いてバイタルサイン測定の実施と技術、2)静脈点滴の固定、子どもの計測などを実施した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20 名ずつの 4 グループに分けてローテーションする方法で指導した。学生と臨床看護師との相互関係が構築されるようにした。

母性看護学援助論Ⅱ

3 年次前期

林 猪都子、徳丸 由布子、樋口 幸

産褥期と新生児の生理と異常およびその家族への看護を学ぶことを目的に教授した。3 名の教員で産褥期の生理と経過、産褥期の看護、新生児の生理と看護に分担して実施した。産褥期・新生児の看護は母性看護学実習で大きな柱となり、産褥期は日々の退行性変化や進行性変化がみられるため、視聴覚教材を用いてイメージができるようにした。

母性看護学実習

3 年次前期後半

林 猪都子、徳丸 由布子、今村 知子、大矢 七瀬

母性看護学実習施設は 3 施設であり、実習期間は 1 グループ 2 週間（延べ 12 週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生 4～5 名配置（合計 27 名）、大分県立病院は学生 4～5 名名配置（男子学生 5 名）（合計 27 名）、アルメイダ病院は学生 4～5 名配置（男子学生 5 名）（合計 25 名）、担当教員は各施設 1 名配置した。実習は学生 1 名につき妊婦または褥婦を 1 名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して生命の尊厳や自己を振り返る実習を期待して指導を行った。1 週間に 1 回帰学日を設けて、帰学日は記録のまとめや看護技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。

精神看護援助論

3 年次前期

杉本 圭以子、後藤 成人

学生にとってイメージしにくい精神看護の目標と役割を考えることを、科目を通して心がけ、視聴覚教材、事例を多用し講義した。精神科看護における治療環境、安全管理、権利擁護をはじめ、地域生活を支える支援の理解を深めた。各精神疾患の病態・治療・看護の学習はアクティブラーニングの手法を取り入れ、自己の予習を基にグループでの話し合いで学びを深める時間を設けた。また、援助技法として社会生活技能訓練、呼吸法、ハンドマッサージなどを演習した。実習において見学や実施する機会を持てた学生もおり、講義内容と比較して学びを深めることができた。

精神看護学演習

3 年次前期

影山 隆之、杉本 圭以子、後藤 成人

精神疾患をもつ対象者を想定した紙上事例教材を用いた事例検討では、学生の個人ワークに続けて教室でシェアリングの時間を持ち、必要な着眼点を確認した。精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスについては、実習施設等から招いた外部講師の講演により、生々しい現状を学生に提示した。最後の時間は、各自が実習を行う障害福祉サービス事業所毎のオリエンテーションとした。これ以前の講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続したい。

精神看護学実習

3 年次

影山 隆之、杉本 圭以子、後藤 成人、佐藤 弥生、篠原 彩

実習期間のうち2～3日は4つの福祉サービス事業所に学生が分散して実習を行い、残りの期間は大分丘の上病院、大分下郡病院（実習前半のみ）、衛藤病院（実習後半のみ）に分かれて病棟実習を行った。病棟実習で学生は、それぞれの受け持ち患者について、全人的な理解とアセスメント、及び患者が受けている看護の理解について指導を受けた。記録様式を一部修正し、プロセス・レコードを省略して、上記学修の焦点に必要な記録に集中させた。病棟・病院内カンファレンスの意義と参加の仕方について意識付けを強化し、前年よりは有効なまとめができた。障がい福祉サービス事業所では、利用者と共に各種プログラムに参加しながら、精神障がい者が社会で生活できるための条件、そのために必要な援助、リハビリテーションのニーズを把握するためのアセスメントなどの実際を見て学んだ。さらに、実習最終日を帰学日とし、二つの場での学びを統合する最終カンファレンスを行った。全体を通して、前年より学生の参加が積極的になったが、一部には参加態度に問題のある学生も見られた。

今年も最終カンファレンスが活発になるグループと表面的な情報交換で終わるグループが見られたので、カンファレンスの時間配分について見直す予定である。

第2段階看護技術演習

3年次前期

石田 佳代子

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムのセカンドステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることである。第4段階実習までに身に付けておくべき基本的看護技術（診療の補助技術を含む）に関する事例課題を提示し、学生同士でロールプレイをしながら事例に応じた援助を考える学習過程を通して、技術の根拠をふまえて援助方法を選択できる判断能力を養うとともに、自信をもって実習に臨めるよう準備の強化を図った。例年通り、担当教員1名につき4名程度の学生を指導する体制とし、最後に技術チェックを行う方法で実施した。

今後の課題として、学生の学習レベルに応じた事例課題の精選と、単なる How to を覚えて行うのではなく、学生が自己研鑽しながら看護実践能力を高めていける姿勢をもつことができるような教育的工夫が必要である。また、練習期間が夏季休暇中であるため練習期間に関することや練習項目数が多いことに対する意見が例年聞かれているので、それらの改善策を検討する必要がある。

在宅看護論

3年次

福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。3年次が、2年次の看護アセスメント学実習と老年看護実習の体験をもとに、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例を示しながら教授した。また、「在宅酸素療法」、「終末期における在宅看護」についてアクティブラーニングを取り入れながら講義を行った。

学校保健学

3年次前期

伊東 朋子、赤星 琴美、堀本 フカエ

学校における保健管理、保健学習、保健指導について取り上げ、学校保健の重要性を教授し、児童生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について理解が深まるよう授

業を進めた。学校保健に関する新聞記事や雑誌、学術論文などを用い、最新の状況をより具体的にトピックとしてプリント配布しディスカッションを交えながら授業を進めた。

成人看護学実習Ⅰ

3年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、中釜 英里佳、佐藤 栄治、中村 伊都子、巻野 雄介、田中 佳子、吉川 加奈子、麻生 優恵、山田 貴子

今年度から成人看護学実習Ⅰへと名称が変更となった。

成人看護学実習Ⅰは、第4段階の専門看護学実習として、成人期および老年期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。

実習施設は、今年度は大分県立病院 8 病棟および大分赤十字病院 5 病棟とし、各病棟に 3 人ずつ学生を配置して 12 週間の実習(学生 1 人 4 週間の臨地実習と 1 週間の看護探究セミナー、1 週間のナーシングスキルによる学習)を実施した。

教員の指導体制は常駐型としながらも、学生が自律して看護スタッフとの連携を図ることができるよう指導を行った。実習指導者の協力のもと、指導体制も充実してきた。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

教育方法論

3年次前期

佐伯 圭一郎、生田 淳一、麻生 良太

教師による指示や発問、それに対する子どもの考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授や理論の実際を概説した。加えて、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

成人看護学実習Ⅱ

3年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、中釜 英里佳、佐藤 栄治、中村 伊都子、巻野 雄介、田中 佳子、吉川 加奈子、麻生 優恵、山田 貴子

今年度から成人看護学実習Ⅱへと名称が変更となった。

成人看護学実習Ⅱは、第4段階の専門看護学実習として、成人期および老年期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、慢性期・終末期の健康段階にある対象に、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を

発展させることを目的とする。

実習施設は、今年度は大分県立病院 8 病棟および大分赤十字病院 5 病棟とし、各病棟に 3 人ずつ学生を配置して 12 週間の実習(学生 1 人 4 週間の臨地実習と 1 週間の看護探究セミナー、1 週間のナーシングスキルによる学習)を実施した。

教員の指導体制は常駐型としながらも、学生が自律して看護スタッフとの連携を図ることができるよう指導を行った。実習指導者の協力のもと、指導体制も充実してきた。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

小児看護学実習

3 年次後期

高野 政子、草野 淳子、足立 綾、佐藤 愛、石丸 智子

小児看護学実習は、大分県立病院に 1 グループ学生 8~9 人で 6 グループ (合計 53 人)、別府発達医療センターに学生 4~5 人で 6 グループ (合計 26 人) 配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生 1 人に対象児 1 人の受け持つことを目指した。在院日数の短縮化で困難も多いが、患児を 2 人の学生が受け持ちすることは避けることができた。継続的に関わった場合は、学生の遊びへの援助に工夫もみられたが、複数の子どもを受け持つことで看護実践まで到達できたという学生もいた。3 日間の保育所実習は、7 月末から 8 月第 1 週までに実施した。子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもと関わる実習は必要である。実習の時期は、夏季に行うことで冬期の感染予防の視点からも効果的と考える。7 日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。

学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

養護概論 II

3 年次前期

赤星 琴美、堀本 フカエ

子どもの健康課題解決に向けた養護教諭の役割や健康相談活動の支援のあり方について教授し養護教諭が行う支援活動について学びを深めた。現職の養護教諭を講師として招き、現代における子どもの健康問題やエイズ教育等養護教諭が行っている支援の実際について講義演習を通して学んだ。

道徳教育と特別活動

3 年次前期

鈴木 篤

道徳教育および特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

環境疫学・生物学演習

3 年次生後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

環境疫学・生物学演習は健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みを講義している。疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を演習・事例を通して理解できるように努めた。

看護探究セミナー（学部）

3 年次後期

小野 美喜、森 加苗愛、堀 裕子、中釜 英里佳、佐藤 栄治、中村 伊都子、麻生 優恵、田中 佳子、巻野 雄介、山田 貴子、吉川 加奈子

成人看護学実習Ⅰ・Ⅱを履修した3年次生79名に対し、実習での受け持ち患者1名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケーススタディのまとめを行った。各担当教員が学生2～10名を担当し、テーマ決定から発表までの過程を指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポート作成と発表を行い全員が合格した。

健康支援論演習

3 年次後期

福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。後半は健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークによる作業を行った。発表は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。

学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるとといった点について、グループワークの過程で学習できていた。また、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていたと考える。

地域生活支援論

3年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、佐藤 愛

地域で生活している人びとの健康課題の特性を理解し、地域看護活動の展開方法について講義と演習を行った。母子保健活動や成人・高齢者保健活動、障害者保健活動、難病保健活動などの基本的な知識のほか、コミュニティ・アセスメントの手法を用いて地域を理解する演習を設け、看護職が「地域志向のケア」の視野が広がるよう工夫した。

国際看護比較論

3年次後期

崔 明愛 (Myoung-Ae Choe), 桑野 紀子

The objectives of this course are the following: to enhance knowledge regarding MDGs, and health problems of each population group, to promote an understanding of culture and transcultural nursing, to facilitate acquisition of knowledge associated with human resources for global health care, to expand knowledge related to global strategies for health for all, and to gain insights into international relief activities and foreign patient care in Japan. This course was designed to promote the understanding of the new roles and responsibilities of nursing in diverse eco-geological, socioeconomic, cultural and political contexts, and to gain insights for cultural competency of transcultural nursing.

We have provided recent global health issues using updated WHO statistical data. Additionally, we have provided global mental health problems as one of the global health issues. We have invited nurses as guest lecturers who have experience in international nursing practice or activities from JICA, Red Cross, and Rinku hospital.

国際看護学演習

3年次後期

崔 明愛 (Myoung-Ae Choe), 桑野 紀子

The aim of this course is the development of perspectives on national, regional and global health issues and strategies, the realization of the roles and responsibilities of nursing in the development of

strategic planning on nursing/health, and the development of global leadership potential.

In this course, students were divided into 12 groups, and each group decided their theme and topic according to themes such as health issues and strategies of a nation/population group, impact and context of the aid of JICA, and human resources for health / nursing of a nation. Students researched information and data related to their topic and made power points presentations based on their discussion. We gave feedback on both the progress and results of the discussion as well as contents of their presentation.

Case studies were also conducted. Through a case study, students learned how the health of the clients is affected by socioeconomic conditions, political climate, and cultural factors.

災害看護論

3 年次後期後半

石田 佳代子、福田 広美、川崎涼子、佐藤 弥生、石丸 智子、松 久美（非常勤講師）

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、地域における災害時保健活動、在宅療養患者に対する災害看護活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とし、災害および災害看護の基礎的知識の習得に重点を置いた。演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使って机上訓練を行った。評価はレポートによって行った。過去の災害で印象に残っている災害について自らテーマを決めて概要を調べ、具体的な問題や課題、看護の役割を考えることなどを通して、災害看護のあり方などについて考えをより深めることができたと考える。

教育制度論

3 年次後期

今井 航

まず、世界主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村 匠平、関根 剛、赤星 琴美

事前指導では、実習生としての遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理した。また、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定した。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。

養護実習 I

3 年次後期

吉村 匠平、関根 剛、赤星 琴美、伊東 朋子、草野 淳子

2 月 14 日～23 日内の 5 日間、大分市立南大分小学校、荏隈小学校、東植田小学校、碩田学園、上野が丘中学校、大分県立新生支援学校で、学校体験を中心とする実習を行った。

応用生体反応科学論

4 年次前期後半、後期前半

濱中 良志、市瀬 孝道、吉田 成一

1 年次に学習した生体の構造・機能・代謝を看護実践の現場で生かすために病態生理学を教授した。また、臨床病理では、症例を取り上げて疾病の全体像を理解するための病理学を教授した。更に、臨床薬理学では、臨床で頻回に用いられる治療薬についての薬理学を教授した。

総合人間学

4 年次後期

藤内 美保

さまざまな分野で第一線として活躍され、かつ造詣の深い講師を招き開講した。看護学実習や演習を経験した 4 年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるよう、講師の選定や講義のテーマについて教育研究委員会で検討を重ね実施した。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第 1 回 9 月 8 日

ダイバーシティマネジメントができる優秀な人材育成
社会医療法人敬和会 統括院長補佐 / 総務企画室長 栗秋 良子

第2回 9月15日	空間デザインからみた地域創生のためのまちづくり 日本文理大学工学部建築学科 教授 近藤 正一
第3回 9月22日	みんなで支える明日の社会 長崎大学大学院工学研究科 教授 石松 隆和
第4回 9月29日	がんと共に生きる患者・家族の支援 国立がん研究センター東病院 副看護部長 關本 翌子
第5回 10月6日	オモイをカタチに ～学生の力を被災地につなぐ～ 日本福祉大学 准教授 山本 克彦
第6回 10月13日	いま地球は病気です ～温暖化と食と異常気象～ 気象予報士・防災アドバイザー 花宮 廣務
第7回 10月20日	県議会の仕組みや役割、議員活動等について 大分県議会議員 木田 昇・吉岡 美智子
第8回 10月27日	グリーフ：その理解とナースの役割 モナシュ大学（オーストラリア） 講師 下稲葉 かおり

看護管理概論Ⅱ 政策等含む

4年次後期

福田 広美、伊東 朋子、吉川 加奈子

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解することを目標とした。昨年度から看護管理学入門を担当し、すでに学習した内容も含まれているが、系統的に看護管理について教授した。次年度は、4年次後期から前期の講義となり時間数も増えることから、看護を実践するにあたって必要なマネジメントについて、実践的な課題を考えられる機会となるよう、講義内容を検討していきたいと考えている。

第3段階看護技術演習

4年次前期

石田 佳代子

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムのサードステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、これまでに学んだ基礎看護技術を、eラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に能力を高めることである。例年通り、看護技術習得確認シートの卒業時到達目標AAの看護援助技術46項目の強化を図った。

学生からは第5段階実習、第6段階実習で活用できた、知識の再確認ができた、看護師国

家試験の学習につながっている、などの意見が多く、国家試験対策にもなり有意義であるとの意見が多い。学生にとっては知識不足に気づく機会となっており、学習へのモチベーションアップにつながっていると考える。

卒業研究

4年次

藤内 美保

4年次生84名は、各研究室に所属し、開学以降行っている1人1テーマで研究に取り組むことを継続した。スケジュールは、1月8日に各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行っている研究テーマやこれまでの卒業研究などを紹介した。その後、学生の希望を考慮し17研究室に配属され、それぞれの研究室において教員の指導のもと、卒業研究のテーマを3月31日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。実験研究や調査研究、文献研究など多彩なテーマや方法で興味深いものが多い。文献研究以外は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、研究倫理についての学習過程を踏み、学びを深めた。研究室の配属から約10ヶ月間で、研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。12月6日・7日の2日間は、口頭による研究発表（6分間の発表、4分間の質疑応答）を講堂で行った。今年度の工夫として、質疑応答の時間で、質問までの待ち時間を少なくするため、学生の配席やマイク本数を増すなど工夫した。また、全教員が口頭発表を聴き5段階評価による評価を行い、実験研究部門と調査研究部門の区別をなくし、上位1割の論文を選出し、それらの論文について、審査員として選出された5名の教員が論文審査を行い、最高得点者を選定した。卒業式に表彰される優秀賞は上位2名を対象とした。

総合看護学実習

4年次前期

看護系教員全員

総合看護学実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことである。本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点にある。

6月下旬から約3週間の実習を行い、学生は指導・助言のもとに実習目標を達成することができた。実習終了後のアンケートにおいて、9割以上の学生は本実習が集大成であることを意識して実習したと回答しており、“自分の学びたいこと、目的にそった実習ができた”、“学びたい領域で学びたい看護を選択できるため、目標達成のための行動がしやすかった”、“自主性が身についた”など、達成感を感じることができていた。しかし、保健・医療・福祉の連携と課題を考えることや、必要なマネジメント能力について考えることについての目標が、他の目標と比べて達成度が低かった。次年度に向けて、上述の2つの点を重点目標と

し、マネジメント能力を強化できるように、各施設の特徴をふまえ、地域住民の疾病予防からケアに至るまでの包括的な活動の場面を実習計画に組み込むような調整や、地域包括ケアシステムの推進を積極的に行っている施設を実習施設に追加するなどして、実習目標の達成に向けて取り組むことが課題と考えられる。

地域看護学実習

4年次前期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、渡辺 康人、篠原 彩、福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子、桑野 紀子

大分県下全域の保健所（保健部支所含む）10か所、市町村保健センター及び支所16か所、合計26か所の施設に、それぞれ2～4名の学生を配置し2週間の実習を行い、地域で生活する人々を理解すること、多職種との連携の必要性について学んだ。実習指導体制では、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。また、金曜日を帰学日とし、学内で教員と学生間で学びを深めた。実習終了後、まとめ会を開催し、実習成果を学生間で共有した。

在宅看護論実習

4年次前期

福田 広美、平野 互、佐藤 弥生、吉川 加奈子、赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、渡辺 康人、篠原 彩、桑野 紀子、山田 貴子、田中 佳子、麻生 優恵

在宅看護論実習は、訪問看護ステーションでの実習を通して、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケアマネジメントを通して、訪問看護の必要性和援助方法の実際、様々な機関や他職種との連携・協働について理解することを目的とした。事例を受け持ち、アセスメントと看護計画の立案から看護計画に基づいた実践と評価までを行う看護過程の展開に力を入れるとともに、ケアマネジメントとして、さまざまな職種との連携や、関連する施設や事業者等との連携の場を体験することを目標にした。

学生は、訪問看護師に同行し様々な対象への訪問看護を体験することができていた。また、実習期間が2週間に、情報収集しアセスメントに基づいた看護過程の展開ができていた。また、対象者本人と家族に対する個別的な看護の重要性について学ぶことができていた。さらに、さまざまな在宅の場の体験を通して、在宅看護における訪問看護師の役割や他の職種や機関との連携を学ぶことができていた。

第4段階看護技術演習

4年次後期

石田 佳代子、足立 綾、石丸 智子、大矢 七瀬、川崎 涼子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、徳丸 由布子、森 加苗愛、安部 真紀、緒方 文子、中釜 英里佳、樋口 幸、堀 裕子、巻野 雄介、山田 貴子、麻生 優恵、今村 知子、佐藤 愛、佐藤 栄治、篠原 彩、中村 伊都子、吉川 加奈子

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムのフォースステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、基礎看護技術のうち、習得度が低い項目について、正確な知識、状況判断に基づいた的確な実践能力を養うことである。対象学生は希望者のみである。大分赤十字病院の看護師と担当教員が連携して個別・グループ指導を行う体制で、昨年度と同様に、心肺蘇生法、点滴静脈内注射、採血の各技術について、臨床現場に近い設定の下で実施した。終了後の感想やアンケートの結果、学生からは「卒業後に就職先で実施できる自信がついた」などの声が聞かれ、また外部講師からは「就職後の新人研修における当院での看護技術の習得がスムーズ」などの肯定的な意見があったことなどから、演習効果を確認することができた。

3-7 大学院講義

3-7-1 博士（前期）課程

健康増進科学特論

1 年次前期後半

稲垣 敦、安部 眞佐子

はじめに、科学について概説し、測定と評価、運動の強さと量の測定について説明した。臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、加齢と体力、エネルギー代謝、運動強度、身体活動量、呼吸循環器系持久力、筋力トレーニング、ストレッチ、運動療法等について講義した。また、エネルギー消費量、身体活動量、柔軟性、最大酸素摂取量、運動強度の測定実習等を行った。

健康社会科学特論

1・2 年次後期

平野 亙

人間の健康に関わる考察・研究においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、社会学や文化人類学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的な思考と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。

受講生が1名であったため、方法論や基本的な理念に関する知識を伝授するための講義のほかは、受講生の視野を拡大することと、キャリアや研究テーマに寄与できることを目的に、これまで接してこなかったであろう分野の文献の紹介と討論を行った。課題演習は、受講生の選択したテーマに沿った文献の抄読と討論を行った。

生体科学特論

1 年次前期

濱中 良志、安部 眞佐子、岩崎 香子

臨床経験有しているため、生体科学（解剖・生理・生化学）の分野の基本的な理解はできていた。よって、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を“対話形式”で授業を進めた。

病理学特論

1 年次前期

市瀬 孝道

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、また、腫瘍、代謝障害、先天異常などの病気の基礎を講義し、更に系統別の個々の疾患についてプリントとパワーポイントを用いて詳しく講義した。系統別疾患の講義の中では疾患症例について、マクロ病理（解剖時の所見）とミクロ病理（病気の組織像）についてパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

病態生理学特論

1 年次

崔 明愛、巻野 雄介

This course is designed to provide students with knowledge on alterations in human physiological functions that result from disease processes. We provided the students with knowledge on pathophysiology of diseases and information on how to study about the pathophysiology of diseases. We guided students to conduct case study using the knowledge of pathophysiology of diseases and directed them to explain rationale of the occurrence of clinical manifestations using the knowledge of pathogenesis. We led the students to gain in-depth knowledge regarding the fundamentals of diseases so that it could be applied to clinical practice.

Each student presented pathophysiology of two diseases. In addition, they conducted case study and presented it. In preparing presentation materials, they were received feedback several times from us.

Through presentation about pathophysiology of disease and case study as well as discussion on the presentation, they acquired in-depth knowledge on etiologic process, mechanism of disease development and clinical manifestations that result from diseases.

看護理論特論

1・2 年次後期

伊東 朋子、桑野 紀子、秦 さと子、高野 政子、筒井 真優美、藤内 美保

看護実践の基盤となる看護諸理論を理解し、看護実践と理論のつながりを考えることを通して、看護を探究させた。また看護と科学的解釈の本質を考究するための導入であることを主軸にして、外部講師の筒井真優美教授に看護理論の総論の部分の講義担当を依頼した。各論として他の5名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式で講義した。また履修学生には看護理論のパラダイムの視点から課題として調べさせた理論家について発表させて、看護実践を考察させた。

看護教育特論

1・2年次後期

高野 政子、藤内 美保、梅野 貴恵、石田 佳代子、吉村 匠平、山崎 清男

看護を担う人材育成が質の高い看護教育に基礎をなすという観点から、教育的機能の基本を理解するために、看護教育の歴史的変遷と看護教育制度を学ぶことから始め、看護学教育の現状を理解するようにした。履修生は、看護管理・リカレントコース、助産学コースの6名であった。看護基礎教育の内、専門分野の看護教育学、看護教育課程、看護教育方法、看護教育評価を含む内容を教授した。平成28年度以降外部講師に教育原理、教育心理学を講義している。後半は、各自の立場で教育的視点に立ち、問題を明確化した。レポート提出と発表を課題として意見交換した。

人間関係学特論

1・2年次後期後半

関根 剛、吉村 匠平

本講義は、シラバスの構成を中心に、受講者の関心や希望を取り入れて講義テーマのバランスをとっていくなどの配慮をして講義内容を決定した。講義内容に応じて、関根、吉村が担当を分担した。吉村は人の行動変容を促進させる行動分析の基本理論や応用などを担当し、関根はカウンセリング理論を応用しての対象者理解や支援方法、認知行動療法、プレゼンテーションなどについて担当した。講義は、座学、討議、発表、作業など、様々な方法を取り入れ、自ら考えていくような手法を取り入れたものとなっている。評価は関根・吉村がそれぞれ独自にレポートを課し、合計による評価を行った。

看護管理学特論

1・2年次後期

福田 広美、佐藤 弥生、甲斐 仁美、柿本 貴之

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授し、管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能や看護管理者に必要とされる能力について学生自身が考える機会となることを目指した。学生には、いくつかの課題を提示して、文献や自らの経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションは実施した。看護職の業務管理のあり方、病院経営と看護管理についても講義やディスカッションが活発に行われた。

看護倫理学特論

1・2年次前期

平野 互、小野 美喜、関根 剛

倫理的思考は、専門性や領域を問わず全ての看護職に不可欠であることから、受講者が専攻する領域で活かせるよう、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく思考訓練を行うことを目的に講義を組み立てている。11回の講義と3回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告（レポート）による討論を行った。

講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「人間の尊厳と自己決定権」・「プライバシー権」・「苦情解決と倫理」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行った。最終回の事例報告は、受講生が29名と多かったので、レポートのテーマをもとに3名の教員に割り振って、それぞれ討論を主宰して評価を行った。

看護コンサルテーション論

1・2年次後期後半

杉本 圭以子、吉村 匡平、関根 剛、竹村 陽子

受講生は、看護管理・リカレントコース、NPコース、助産学コースの5名であった。看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略の講義の後、対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について講義した。県内の専門看護師によるコンサルテーションの実際の講義、事例の演習により臨床現場に則した現実なコンサルテーションについて考察した。後半には学生が経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることでさらに理解を深めた。

看護政策論

1・2年次後期

影山 隆之、小山 明夫、小池 智子、中西 三春、立森 久照、村嶋 幸代

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向、これらの政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。

看護科学研究特論・健康科学研究特論

1・2年次前期

小嶋 光明、村嶋 幸代、影山 隆之、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、福田 広美、平野 互、関根 剛、大田 えりか（非常勤講師）

看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、文献研究などを実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。

Intensive English Study

1年次前期

Gerald T. Shirley、馬場 奈穂

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructors during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructors. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

英語論文作成概論

2年次前期

甲斐 倫明、影山 隆之

テキスト（ボタージュ先生の医学英語論文講座）と作成資料を用いて、英語論文の書き方の概要に始まり英語表現まで、英語論文の作成に際して理解しておくべき項目を教授した。実験系および調査系の英語論文の構造化アブストラクトを書けることを目標に講義を行った。

原書講読演習

1 年次生前期

宮内 信治

発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の習得、英文法基礎知識の確認と演習を行ったうえで、看護(Nurse Practitioner)に関する英文原著の読解翻訳演習を行った。各講義のはじめに単語小テストを実施し、学習確認と評価を行った。

基盤看護学演習

2 年次後期

伊東 朋子、影山 隆之、品川 佳満、藤内 美保

基盤看護学における研究の方法について様々な視点から、その手技方策を具体的に解説することを目的に4名の担当教員によるチュートリアル形式で展開した。履修学生には与えられたテーマである「精神健康測定法」、「看護師の臨床判断と形成過程」、「自律神経機能とその測定方法」、「看護研究における実験的研究」に沿ってレポートを作成させ、プレゼンテーションやディスカッションなどで通じて、内容を深め、共有化させた。

看護アセスメント学特論

1 年次前期

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライアントマネージメントを遂行するために、問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点目は、看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2 点目は、小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。3 点目は、在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

成人看護学特論

1 年次前期

小野 美喜、森 加苗愛

成人期の発達課題や健康問題への理解を深め、健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法を探求することを目的とした。

学生の臨床経験に基づき、成人期の看護実践において感じている臨床課題や関心事を深めるための看護理論の講義を行った。その後、学生が実践した「良い看護ができたと評価した事例」、「良い看護ができなかったと評価した事例」に基づき、なぜそのような評価を行ったのかを看護理論において事例を振り返りながら根拠に基づき看護実践とは何かをゼミ形式で探求した。

日々の実践に追われる中、自己の看護の根拠に気づくことができ今後の看護実践に活かす講義に繋がったと考える。

看護管理学演習

2年次

福田 広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画を立案するよう教育を行った。さらに、立案した計画をもとに演習と文献による考察を行い看護管理の実践向上に繋げることを目指し、演習を行った。受講者は、臨床現場の課題について現状分析を行い、課題解決に繋がる研修ならびに計画を立案、他施設等における研修を行い、看護管理について新たな視点や学びを深めた。最終的に、受講者が演習成果をポートフォリオにまとめ、受講者間で発表と意見交換を行った。

地域看護学特論

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋 幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリ・ヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

広域看護学演習

2年次

赤星 琴美、福田 広美、崔 明愛

公衆衛生看護、看護管理、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。

特に、各保健領域での法改正や事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、具体的に理解できるように教授した。

広域看護学概論

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋 幸代、緒方 文子、藤内 修二

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリ・ヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

地域保健特論

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、大津 孝彦、佐藤 紀子

地域で生活する個人・家族・集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。受講生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

学校保健特論

2年次

赤星 琴美、関司 和子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的方法について教授した。

養護教諭であり、公立中学校の校長をされていた方を講師にお招きし、現在の学校が抱えている健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況を教授して頂いた。さらに最新の文献を用い、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健の連携や組織的な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。

産業保健特論

1 年次後期

川崎 涼子、高波 利恵、緒方 文子、吉田 愛

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割、具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論およびモデルを用いて教授した。

現在企業で働く保健師により、産業における保健師活動の現状と課題についてディスカッションを含めた講義を行った。

健康危機管理論

1 年次後期

川崎 涼子、赤星 琴美、緒方 文子、本山 秀樹、甲斐 倫明、末永 宏、玉井 文洋

地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する基本的な考え方や保健師活動の展開方法について理解を深めることができるよう、実際の事例を用いた講義を行った。また、健康危機管理における多職種連携について理解を深めるため、県健康危機管理の経験者、県食品課の担当者を講師として招き、地域での健康危機管理の実際や課題、具体的な活動方法について事例を使いながら講義を行った。

また、大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して、トリアージの実際を経験し、大規模災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、実践に即した学習内容を構成した。

健康増進技術演習

1 年次

関根 剛、安部 眞佐子、稲垣 敦、堀田 貴子

本講義は、対象者の健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、より効果的な疾病予防・健康増進のための知識と能力を養うことを目的としたものである。疾病予防のためのアプローチとして、運動指導、栄養指導、心理相談という3つの領域を設定し、それぞれ6回、7回、8回の講義・演習を実施した。運動指導については、はじめに科学について概説し、測定（数量化）の重要性を解説してから、タイムスタディや加速度計による身体活動量・強度の測定、自転車エルゴメーターによる最大下負荷法による最大酸素摂取量の測定（推定）、科学的根拠に基づいたストレッチングの効果の実験的検証等を行った。体力や運動機能とその老化、トレーニングについての講義やエクササイズ・ウォーキングや介護予防運動の実技指導も行った。栄養指導については主としてエネルギー代謝と栄養素、消化吸収、食事摂取基準、ライフステージ別トピックスなどについて。心理相談については、心理相談技術、集団指導、PTSD 支援などについて、解説とロールプレイなど、実践的なスキル習得を目指

しておこなった。評価はそれぞれの講師がレポートなどを課し、3名の合計による総合的な評価を行った。

広域看護アセスメント学演習

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、大島 敦子、横山 光政、村嶋 幸代

地域社会の健康課題の抽出および評価の方法として地域看護診断の基礎的考え方や方法論を教授した。既存資料の活用や地区視診を行うことで、対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。また、大分県国民健康保険団体連合会の保健師等により、国保データとKDBシステムの理解を深める講義を実施した。さらに、地域看護診断の演習は、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて、実習科目との連動を図った。

健康リスクアセスメント演習

1年次後期

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

社会保障システム特論

1年次前期

平野 互

保健師に必要な知識である社会保障制度の意義および理念と構造に対する理解を深めるために講義を構築した。社会保障の存在理由である生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、諸制度の内容と課題を理解することを目的に、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度について講義した。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の2回、情報を収集しその解釈を求めるレポートにより行った。

疫学特論

1 年次前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、確認のための小テストを組み合わせることで学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

疾病予防学特論

1 年次前期

赤星 琴美、藤内 修二、池邊 淑子、三浦 源太、増井 玲子

さまざまな健康レベルにある個人、集団を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を取得できるように教授した。

保健医療福祉政策論

1 年次後期

平野 互、阿部 実

保健師の職務に必要な政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の基本的な政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状と課題、保健活動と社会福祉の事業評価、障がい論とくに社会モデルの意味と課題、自立支援について講義し、さらに県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿部講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画とその実施の歴史と課題について 2 回の講義をいただいた。

成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

保健統計学

1 年次前期

佐伯 圭一郎、野津 昭文

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体

系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を教授した。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、野津 昭文

疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

薬剤マネジメント学特論

1 年次

川崎 涼子、赤星 琴美、平川 英俊

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、薬剤コンプライアンスの基礎知識を学ぶとともに、ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬剤管理（残薬管理等）と服薬方法などについて実践に繋がる知識が得られるよう教授した。さらに、健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法や内服方法、効能などについての薬剤指導法（抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮痛剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱いと服薬方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。

環境保健学特論

1 年次後期

甲斐 倫明

健康に関する最新のニュースおよび英語原著論文を資料として、健康と物理的要因、化学的要因、生物的要因あるいは社会的要因との関係について講義を行った。個々の問題について、基礎概念の解説を行うと共に、最新のニュースおよび原著論文の結果に対する討論を行い、問題の多面性（自然科学的側面、統計学的側面、社会的側面など）を学生が考えるように努めた。

地域生活支援実習

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として県内8か所の市町及び保健所において保健師に同行あるいは院生単独で訪問し、実習を行った。6月から2月までの9か月に合計4回～8回の訪問を行い、成果報告会を2月1日に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。8名全員が事故なく実習を終了することができた。

広域看護活動研究実習

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体のQOLを向上させる活動について研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

県内の保健所および市において、5週間の合計25日で構成した。8名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

12月14日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

地域マネジメント実習

1年次

赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代

広域看護アセスメント学演習や健康教育特論と連動し実習が効果的に行えるようにした。地域看護診断では、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うこと、地域資源の過不足をアセスメントする力を養うことを目的に実習を展開した。

県内9か所の市町において、4週間の合計20日で構成した。9名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

10月5日に実習施設の方々の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果の共有とともに各市町の健康課題についての意見交換を行った。

周産期特論

1 年次前期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、嶺 真一郎、後藤 清美、梅野 貴恵

すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、主な疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施した。

助産学概論

1 年次前期

梅野 貴恵、林 猪都子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に取り組む姿勢や助産師のキャリアラダーについて系統的に教授した。授業は、資料を用いた講義と学生が事前課題についてプレゼンテーションし、ディスカッションを行う方法をとった。「出産の満足度」に関する研究論文を各自でクリティークし発表した。また『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、妊産婦が望む出産、社会に求められる助産師の役割について自己の考えを述べ、他者の考えを知る機会とした。

リプロダクティブ・ヘルスト論

1 年次前期

井上 貴史、中村 聡、嶺 真一郎、宇津宮 隆史、西田 欣広、梅野 貴恵

すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。性分化の機序、生殖器に関する形態機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向についても教授された。評価は、筆記試験を実施した。

母子成育支援特論

1 年次前期

高野 政子、平野 互、吉村 匠平、桑野 紀子、佐藤 敬子、井上 祥明、上野 桂子、梅野 貴恵

母子関係や家族をめぐる問題、女性のライフサイクルにおける不妊や出生前診断、愛着喪失などの心理・社会的問題、子育てを取り巻く問題や虐待、子育て支援制度を理解し、助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。各分野の専門性を考慮し、学内外の講師のオムニバス形式で実施した。子育て体験は、子育て仕様のベビー人形を自宅に持ち帰らせ、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。体験後、夜間に激しく啼泣すると近所迷惑になるなど子育てに不安をもつ母親の気持ちを理解する機会になっていた。

ウィメンズヘルス特論

1 年次前期

梅野 貴恵、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、林 猪都子、桑野 紀子、實崎 美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる健康問題を理解し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を考慮したオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

妊娠期診断技術特論

1 年次前期

梅野 貴恵、樋口 幸、吉田 成一、安部 眞佐子、小嶋 光明、渡邊 しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術について講義と事例を用いたシミュレーション演習を取り入れた。妊産褥婦と薬剤については国家試験に出題される具体的事例を基に教授した。妊婦の日常生活適応へ向けての保健指導を実施するにあたっての基盤となる妊産褥婦の栄養、母子に対する放射線の影響、出生前診断に関する知識も教授した。さらに近年増加するハイリスク妊婦の助産ケアに必要な知識と技術について教授した。

産褥・新生児期診断技術特論

1 年次

樋口 幸、大矢 七瀬

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践す

るための内容を教授した。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU 課題探究セミナー」の導入とした。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。また、退院後の生活も見据えた退院指導と家庭訪問の充実を目標に、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。母乳育児支援に向けて、学内の乳房モデルや模型を使用し、乳房トラブル予防のためのマッサージ（堤式）方法や授乳指導の演習を取り入れ、実際の事例や場面を想定した演習を行った。学生は積極的に講義、演習に参加し、活発なディスカッションとリフレクションを行った。

分娩期診断技術特論

1 年次前期後半

樋口 幸、梅野 貴恵、生野 末子

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的に、講義と事例を用いたシミュレーション演習を取り入れたことで、より臨床での場面をイメージしながら、母児の生命の安全維持かつ、母親が主体的に分娩に臨み、満足感を得ることができるよう支援するための基本的な助産の実践能力を習得できた。また、段階的に様々な事例を展開することで、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る基本的な知識及び技術を習得できるよう講義と演習を行った。

周産期診断技術演習

1 年次前期

樋口 幸、佐藤 昌司、梅野 貴恵、姫野 綾

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。胎児の健康状態の診断については、高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCEで到達度チェックを行った。さらに、CTG波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティーピクス、骨盤矯正や産褥体操など、分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授し実際に体験した。学生は、自分自身の心身と向き合い変化を感じることで、対象者の状態に合わせた保健指導の質の向上について考えることができた。また、宗教的背景や早産児等の様々な状況に合わせて柔軟に対応できるよう、母乳育児支援の他に人工栄養の

基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

助産保健指導演習

1 年次

安部 真紀、梅野 貴恵、樋口 幸、林 猪都子、大矢 七瀬、姫野 綾

助産保健指導演習は、女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する健康問題を理解し、個人や集団に対する指導技術を学ぶ演習科目である。講義では、女性のみならず対象者とその家族の個別性の理解がすすむよう指導対象の情報を詳細に設定し、演習で個別性に合わせた指導方法を実施することが出来た。また、学童期の性教育指導の実践や、指導案・教材を利用し学内でプレゼンテーションを行うことで健康問題の理解と指導技術の向上が図れたと考えられる。ただ、一部学生にとっては、媒体（パンフレット）作成に時間がかかることや、指導項目が自身の苦手な項目である場合は、教員の個別指導回数に差が出た。次年度以降は、媒体作成の演習時間への配分を考慮して、さらに学生への指導技術向上を図りたい。

助産マネジメント論

1 年次後期

梅野 貴恵、生野 末子、戸高 佐枝子、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等を取りあげ、オムニバス形式で実施した。

助産過程展開演習

1 年次後期

梅野 貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシメントを用いて習得し、実践へ応用する能力を身につけさせるために教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦 1 事例、正常経過をたどる分娩期事例 1 例、正常から逸脱する可能性の高い分娩期事例 1 例の計 3 事例を用いて助産過程の展開を実施した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークを行った。特に分娩期事例では、思考の確認をするために学生が発表し教員とディスカッションするなどの方法を取り入れ、グループディスカッションが円滑に進むようにした。評価は、提出されたレポート、発表内容から行った。

NICU 課題探究セミナー

1 年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICU で、2 週間ずつ実習を行った。学生はハイリスク新生児（経験者は超低出生体重児）1 名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICU に入院中の超低出生体重児の看護や他部門との連携を見学・参加することで、母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整、助産師として妊娠期から果たすべき役割について学ぶ機会となった。

妊娠期課題探究セミナー

1 年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸、姫野 綾、大矢 七瀬、安部 真紀

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習としている。前半の 8 週間で大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、12 月からは、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、国立病院機構別府医療センターに分かれて実習した。12 月実習前に、前半の実習の学びと後半実習の自己の課題を明確にするために中間報告会を実施した。2 月第 2 週からは 6～7 月に出産する予定の妊婦を継続事例として受持ち健診日に実習した。臨地での産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査 20 例と個別に応じた保健指導の実際 12 例以上の目標は到達することができた。

地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野 貴恵、赤星 琴美、清水 久美恵、佐藤 紀子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援についてディスカッションを取り入れるなどして実施した。

分娩期実践演習

2年次前期

梅野 貴恵、樋口 幸、大矢 七瀬、姫野 綾、江藤 由布子

産婦に対する助産実践に必要な基本的分娩介助技術を習得することを主な目的に教授した。講義やVTR、デモンストレーションで一通りの分娩介助技術を指導した。1年次より分娩介助時の技術に必要な清潔操作などの基礎看護技術OSCEを終えていることもあり、分娩介助に必要な技術を中心に指導した。学生は産婦をイメージしたトレーニング不足があり、実際を想定したOSCEに不合格となった学生もいた。再試験で合格できたが、全体的に練習不足であった。今年度は、産婦の陣痛発来時の入院対応や分娩第1期の胎児心拍数低下事例などを設定したシミュレーションと振り返り学習を実施した。臨床助産師に報告する場面などは、学生自身の知識とアセスメント不足に気づく機会となった。ひとつおりの学んだあと、産婦の状況や希望に応じて介助を実施するフリースタイル分娩の方法や会陰裂傷縫合の技術についても、デモンストレーションを行い、実演により学びを深める機会とした。

助産マネジメント演習

2年次後期

梅野 貴恵、安部 真紀、徳丸 由布子、生野 末子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習科目とした。総合周産期母子医療センターの母体搬送事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアについてディスカッションし、シミュレーション学習を行った。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定してシミュレーション学習を行った。さらに、助産院において院長が行う日常的な助産院管理全般を経験し学びを深め、将来の目標と自己の課題を明確にし、助産師としてのアイデンティティを培うことにつなげた。

地域母子保健演習

2年次後期

梅野 貴恵、佐藤 紀子、渡邊 しおり、別府市保健師

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習科目とした。大分市・別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、大分市・別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。4か月児健康診査（大分市は個別健診のため、堀永産婦人科で開催されている3か月児健康診査）、1歳6か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組、他機関との連携を理解した。特に、4か月児健康診査では、継続事例または分娩介助実習での受け持ち母子の健診に付き添うこ

とで、家族や地域の人に支えられ成長していく母子への助産師としての役割を認識する機会とした。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2年次前期

梅野 貴恵、大矢 七瀬、姫野 綾

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで2週間の実習を行った。臨床指導者や担当教員の指導を受け、受持ち対象者のリスク状況を判断し、母児の安全に配慮し助産過程を展開することができた。総合周産期母子医療センターにおける助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携の重要性について学びを深める機会となった。

分娩介助実習

2年次前期

梅野 貴恵、樋口 幸、大矢 七瀬、姫野 綾

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケア実践能力を養うことを目的に8週間の実習を行った。実習施設は、診療所2施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数は13例以上としていたが、平均9.9例（9～11例）の実施となった。学生個々の学習意欲・態度に差があるうえ、夜間・休日の実習や待機などによる疲労もあったため、実習4週目に帰学日をもうけ、分娩介助の振り返りや施設毎の情報交換を行った。また、中間カンファレンス後に専任教員が学内で個別面談を実施し、学生個々の課題の明確化と行動目標を再認識させた。その後も、学生控室での生活態度やチーム内の連携の重要性を指導したが改善がみられなかった。継続事例3例を妊娠期から産後1か月まで受け持ち助産実践を行うことで、学生個々の到達度に差はみられたものの、妊産褥婦個々の問題に寄り添い助産ケアを展開できた。

NP実習

1年次7月

甲斐 博美、小野 美喜、森 加苗愛、石田 佳代子、濱中 良志

NPの診療活動に同行し、診察の実際を体験することでNPの役割を理解し、必要な高度看護実践能力と事故の課題を明確にすることをねらいに7名が履修した。病院や老人保健施設など様々な分野で活動するNPに同行し、包括的健康アセスメントと看護的治療マネジメントの実際を理解し、施設内における安全管理体制やチーム医療におけるNPの役割を学んだ。

終了後に、修了生からの講義を受け、NP の役割と NP を目指すために必要な学びと姿勢についてグループワークをしたことが、自己の振り返りと今後の学習における課題の明確化につながることができた。

老年 NP 特論

1 年次後期

甲斐 博美、小野 美喜、森 加苗愛、佐藤 弥生、安部 眞佐子、庄山 由美、高根 利衣子

EBN に基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NP としての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NP の看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する診療看護師などがオムニバス方式で教授した。今年度は学習を統合させる目的で、学生の身近な高齢者ケースをアセスメントシマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。意見交換によって各自の課題や、NP としての看護実践の展開における課題が明らかになり、今後の学び方に影響する到達度であった。来年度も、同様の指導方法を継続し、事例と統合して思考の整理ができ、主体的な学習につながる支援を強化していく。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中 良志、糸永 一郎、工藤 欣邦、一万田 正彦、財前 博文、竹下 泰、甲原 芳範、小寺 隆元、塩月 成則、木村 成志

NP としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病および継続医療における臨床評価について学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

老年臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田 成一

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。また、大分大学医学部附属病院薬剤部の見学を行い、臨床現場における医薬品の管理等について理解を深めた。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見されたが、全員単位修得する学習習得状況に達した。

老年アセスメント学演習

2年次前期前半

甲斐 博美、立川 洋一、久保 徳彦、宮川 ミカ、小野 美喜、石田 佳代子、森 加苗愛、濱中 良志

老年期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。長期履修者を含む10名が履修した。慢性疾患や症状を伴う高齢者（成人を含む）の事例を通して、情報を整理しアセスメントを行い、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。事例のプレゼンテーションを通じ、基礎知識や求められる能力の確認を行い、学生間での意見交換や医師やNPからの助言で、アセスメント能力の強化やマネジメントに必要な能力の促進ができた。1年次に履修した基礎知識の統合や事例を通じた展開に際し、同時期に履修する老年薬理学演習とともに強化できる科目となった。今後、実習時の記録を医師とともに再考し、演習を実践へつなげていく。

老年診察診断学特論

1年次後期

濱中 良志、岩波 栄逸、山口 豊、工藤 欣邦、糸永 一朗、阿部 航、安藤 優

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって専門医師による講義、実習を行った。

老年実践演習

2年次前期

甲斐 博美、古川 雅英、佐藤 博、迫 秀則、前田 徹、竹内 山水、山本 真、田村 委子、藤谷 悦子、小野 美喜、恵谷 玲央

老年期の対象者への看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。

老年NPに必要な医療行為を習得するために専門医の指導のもとで演習をおこなった。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにした。

老年薬理学演習

2 年次前期

甲斐 博美、塩月 成則、小寺 隆元、小野 剛志

老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を事例による趣味レーションを通じて学んだ。症例を通じて、病態の理解や検査や処方判断、治療マネジメントも含めた薬理学の習得をディスカッションによる演習で強化した。同時に履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で学生の到達度をあげている。

老年 NP 実習 I

2 年次 8 月～10 月

甲斐 博美、小野 美喜、森 加苗愛、石田 佳代子、濱中 良志

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的に NP 実習を展開した。今年度は病院施設 10 週間（老年 NP 実習 I）、診療所 2 週間（老年 NP 実習 II）、老健施設 2 週間（老年 NP 実習 III）の 14 週間で構成した。

1 施設 1～2 名の学生配置で 8 名の学生が履修し、医師、NP、大学教員ともほぼマンツーマンでの指導体制とした。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、修了生（NP）、大学側との合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解、評価を共有し大学と各施設との連携を図った。臨床実習では特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力強化の指導を強化した。NP に必要な 7 つの能力を客観的に評価できる様式を活用し、適宜、自己の課題を意識できる機会を持つように活用した。医療スタッフとの連携・協働の実践を強化し、元々持っている看護実践能力の更なる強化と NP に必要な 7 つの能力を伸ばしていくことが今後の課題である。

老年 NP 実習 II

2 年次 10 月

甲斐 博美、小野 美喜、森 加苗愛、石田 佳代子、濱中 良志

外来にて軽微な症状の初期診療、慢性疾患の診療について学び、指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ことをねらいとし、2 週間の診療所実習を 8 名が履修した。指導の元で医療面接や身体診察などを実施し、在宅での継続療養中の患者に対する包括的アセスメントを学んだ。老年 NP 実習 I を経て、在宅医療の中で求められる能力を意識した実習の取り組みができるように支援した。

老年 NP 実習 III

2 年次 11 月

甲斐 博美、小野 美喜、森 加苗愛、石田 佳代子、濱中 良志

入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護的知将マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。2 週間の老人保健施設での実習において、担当となる対象者やご家族に対しての看護的治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。老年 NP 実習 I、II との統合で、NP に必要な能力を探求していける支援をした。学生のこれまでの教育・就業背景の違いを考慮して、在宅分野の看護実践能力を強化していくことが課題である。

老年 NP 探究セミナー論

2 年次前期

小野 美喜、森 加苗愛、甲斐 博美、濱中 良志

老年 NP コース 8 名が履修した。老年 NP 実習で担当した症例を振り返り、NP としての包括的アセスメントや看護治療的マネジメントを再検討することを目的に個人のワークとグループディスカッションを組み入れて実施した。最終的に老年 NP として対象者やチームの中で果たす役割を全体討議し、実習経験を深めることができた。学生により探究に格差が生じているため、個々の面接を取り入れながらセミナーを進めることが課題である。

NP 論

1 年次前期

小野 美喜、村嶋 幸代、藤内 美保、廣瀬 福美、光根 美保、田村 委子、高野 政子、草間 朋子

NP コースの必須科目として NP の役割、現状について考えるとともに、チーム医療の中で活動するための医療安全や手順書作成についてワークを実施した。最終講義は日本で NP を立ち上げた前学長であり日本 NP 教育大学院協議会会長である草間朋子先生を招聘した。履修生 9 名以外にも教員や修了生も参加し講義と質疑応答の中で活発な議論が行われた。今後も NP の基本的な考え方を伝え考える科目として組み立てていく。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次前期

藤内 美保、石田 佳代子、濱中 良志

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように、試験は中間試験と総合試験を実施し、それぞれ筆記試験および OSCE を行った。

放射線健康科学演習

2 年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

最新の医療被ばくおよび健康影響リスクに関する原著論文を与え、論文の抄読を行った。抄読会形式で行い、抄読の最後に論文の解説を行った。抄読会で取り上げた論文は次の通りである。

- 1) S. Paul, Radiat Res (2014)
- 2) HC. Turner, PLoS ONE (2015)
- 3) N. Ohuchi, Lancet (2016)
- 4) H. Gilbert, N Engl J Med (2016)
- 5) EJ.Grant, Radiat Res (2017)
- 6) EK. Cahoon, Radiat Res (2017)
- 7) NM Journy, BJR (2016)
- 8) G.Tettamanti, Cancer Epi Prev Bio (2017)
- 9) E. Vañó, Annals of the ICRP (2017).

放射線生物物理演習

2 年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

CT 診断に伴う小児の臓器吸収線量を計算する WAZA-ARI（科研費で開発した Web ツールで現在）を用いた演習を行った。施設ごとの撮影条件を用いて、年齢依存性を調べ、施設によって異なる理由を考察した。また、現在の小児の診断参考レベルの問題点についても考察した。

メンタルヘルス学特別演習

2年次

影山 隆之

メンタルヘルスに関する調査研究を例として、データの収集と分析の手法について、実際の文献を素材としたゼミを開講した。

3-7-2 博士（後期）課程

精神保健学特論

1 年次前期

影山 隆之

地域・職域における精神保健活動に必要な知識として、精神健康のモデルと評価法、事例のアセスメント、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。

放射線保健学特論

1 年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明

最新の放射線健康影響に関する原著論文をレビューさせ、その概要とポイントのレポートを作成させた。それを受けて、理解が不足している基礎的な知識を整理し、最新の研究動向について教授した。

放射線健康科学特論 II

1 年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、恵谷 玲央

最新の医療被ばくおよび健康影響リスクに関する原著論文を与え、論文の抄読を行った。抄読会形式で行い、抄読の最後に論文の解説を行った。抄読会で取り上げた論文は次の通りである。

1) S. Paul, Radiat Res (2014) 2) HC. Turner, PLoS ONE (2015) 3) N. Ohuchi, Lancet (2016) 4) H. Gilbert, N Engl J Med (2016) 5) EJ.Grant, Radiat Res (2017) 6) EK. Cahoon, Radiat Res (2017) 7) NM Journy, BJR (2016) 8) G.Tettamanti, Cancer Epi Prev Bio (2017) 9) E. Vañó, Annals of the ICRP (2017).

健康統計学特論 II

1 年次

佐伯 圭一郎、野津 昭文

受講者は2名であったが、個別に開講し、生物統計学の理論的基礎の習得状況を確認の後、研究テーマに対応する応用的統計手法を中心に教授した。特に、Rによる解析手法の実践を指導した。

対人援助特論 II

1 年次後期

吉村 匠平

対人援助活動を相対化する視点の獲得を目的とし、近代家族、社会福祉制度、学校教育制度、医療制度の歴史的な起源、成立背景に関する論文をレビューした。

4 学内セミナー

4-1 CALL 英語学習システム講座

Gerald Shirley

CALL システムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

5 学内研究活動

5-1 プロジェクト研究

予防的家庭訪問実習の経験が協力者と学生に及ぼす効果に関する研究

研究者：影山 隆之、岩崎 りほ、平井 和明、藤内 美保、佐藤 弥生、定金 香里、巻野 雄介、山田 貴子、野津 昭文

学部生が行う予防的家庭訪問実習が協力者（大学周辺の在宅高齢者）の健康に及ぼす影響と、学生にとっての学びの効果、及び学生が地域づくりについて考えたことの検証をする目的で、2年計画で研究を計画した。実習を立ち上げるまでの経過と、開始してからの学生の実習記録を内容分析した結果については、英文誌に論文を投稿した。平成27年度から追跡調査を始めた協力者群と対照群について、今年度まで健康・生活に関する情報収集を行い、足かけ2年間の変化を比較した。このうち平成28年度までの変化については、分析結果を学会発表した。2年分の変化についての分析結果は、次年度の学会で発表する予定である。この他、対照群調査の機会を利用して実施した5つの研究が、卒業研究として提出された。これらについては補足のデータ整理を行った上で、地域に報告するとともに学会等で発表する予定である。

特定行為が必要な利用者へのNPと看護師の介入比較

研究者：小野 美喜（リーダー）、甲斐 博美（副リーダー）村嶋 幸代、藤内 美保、高野 政子、石田 佳代子、佐伯 圭一郎、濱中 良志、福田 広美、宮内 信治、森 加苗愛、草野 淳子、大嶋 佐智子

在宅（訪問看護や老人保健施設）での特定行為を必要とする利用者に対して、NP（診療看護師）の介入と看護師の介入を調査比較した。平成28年度は訪問記録からのアセスメント内容、実施内容の比較分析をおこなったが、平成29年度は事例を深く分析するための事例研究を行った。医師や看護管理者とも連携をとりながら事例を分析した。プロジェクトメンバーが日本NP学会等の各学会でNPの活動や成果を公表した。

5-2 先端研究

鉄濃度による骨細胞機能調節

研究者：岩崎 香子

慢性腎臓病（Chronic kidney disease: CKD）患者は病初期から骨ミネラル代謝異常（CKD-MBD）が生じる。この機序の一部には線維芽細胞増殖因子 fibroblast growth factor 23 : FGF23)の血中濃度上昇が関与する。FGF23 は骨細胞が産生するタンパク質で腎の尿細管に作用しリン利尿を亢進させる。この FGF23 が心筋細胞を肥大させることや CKD 患者の死亡率と関連することなどが最近報告された。血中 FGF23 濃度をコントロールすることは CKD 患者の生命予後改善に重要であると考えられるものの、CKD で FGF23 産生が亢進する機序が不明である。一方、貧血を合併している CKD 患者の多くが鉄欠乏状態を伴っている。最近の臨床研究から鉄剤の投与によって血中リン濃度が低下するという結果が散見されており、鉄欠乏状態が血中 FGF23 濃度上昇に関与する可能性が示唆されている。そこで本研究では、鉄濃度低下が骨細胞の FGF23 産生を亢進させるか否かについて検討を行った。

成長期マウスから下肢長管骨を採取し、骨細胞を単離した。鉄キレート剤 deferoxamine (DFO) を培地中に添加し、鉄濃度を低下させた状態で骨細胞機能を検討した。

20 μ M の DFO 添加により培地中の鉄濃度が 30% 低下した条件では、骨細胞が産生分泌した FGF23 量が増加していた。また、DFO 添加によって DNA フラグメント増加が観察され、細胞生存率が低下していた。低鉄濃度の培地では細胞内 ATP 量の増加がみられたが、この ATP 増加は ATP 放出チャネル阻害剤処理によってさらに増加すること、ATP 取り込みチャネルの阻害剤によって一部減少することが確認された。DFO 添加による FGF23 量は ATP 取り込みチャネル阻害剤処理によって一部減少することが確認された。以上より、鉄濃度が低下している状態では FGF23 産生が亢進することが確認された。また細胞内 ATP はシグナル分子として低鉄状態での FGF23 産生に関与する可能性が示唆された。

微小粒子付着有機化学物質の胎仔期曝露による出生仔生殖機能への影響とそのメカニズム解明

研究者：吉田 成一

これまでの研究で黄砂や PM2.5 を妊娠マウスに投与すると、出生した雄性マウスの生殖機能が悪化することを示した。粒子構成成分の微生物由来成分 LPS の胎仔期曝露により雄性出生仔の生殖機能が低下したがその程度はわずかであり、影響寄与因子は不明である。一方、多環芳香族炭化水素類の胎仔期曝露は出生後の生殖機能に影響を与えることが示されている。そこで、本研究では、PM2.5 付着有機化学物質 (Organic Chemicals : OC)を妊娠マウスに気管内投与し、出生仔の雄性生殖系にどのような影響が生じるのかを検討した。

ICR 系妊娠マウスを OC 投与群 20 匹と対照群 20 匹に分け、OC 投与群に PM2.5 より抽出した OC (10 μ g/匹)を妊娠 7 及び 14 日目に気管内投与した。5、10、15 週齢における出生雄性マウスの体重、精巣重量、造精機能などを指標に、胎仔期 OC 曝露による雄性出生マウスの生殖系に及ぼす影響を解析した。

胎仔期に OC 曝露を受けた出生マウスの各週齢における体重、精巣重量に有意な変動は認められなかった。胎仔期 OC 曝露による出生仔の造精機能は 5 週齢の OC 群で対照群と比較して 81% に有意に低下した。しかし、10 週齢、15 週齢では造精機能に有意な変動は認められなかった。5 週齢の精巣機能の評価するため DNA マイクロアレイにより発現遺伝子解析を行ったところ、精子形成過程の進行に伴い発現が上昇するポリコム群遺伝子 *Scmh1* や精子形成に関与する *Urb2* の発現を抑制する知見を得た。以上より、胎仔期 OC 曝露は雄性出生仔の精巣で発現する精子形成関連遺伝子発現の抑制を介し、幼若マウスの雄性生殖機能を低下することが示唆された。

マイクロスコープ画像を用いた新生児の皮膚評価ツールの開発

研究者：樋口 幸、品川 佳満、波多野 豊（大分大学医学部）、市田 秀樹（日本文理大学）、森竹 隆広（シェルエレクトロニクス株式会社）

新生児の皮膚バリア機能を良好に保つことは、アトピー性皮膚炎の発症率を 3 割減少させるため（Horimukai 2014）、近年新生児期のスキンケアの重要性が示唆されている。外部環境の影響を受けやすい新生児の皮膚は、日常の中で状態を評価し、適切に対応を行うことがトラブルの予防のために不可欠である。一方で、1 か月児を持つ母親の 8 割が実際の児の皮膚状態を正しく認識できておらず、スキンケアの実施率は 4 割程度であることも明らかになっている（樋口 2017）。そこで、母親が簡便かつ迅速に児の状態を把握して対応ができる皮膚評価ツールが必要であると考え。その一環として本研究では、新生児の皮膚状態を評価するための方法を探るために、皮膚の拡大画像と、従来の皮膚測定機器を用いた客観的測定データの関連について分析し、皮膚拡大画像が新生児の皮膚評価ツールとなり得るのかを検討している。

現時点までに新生児 40 名に対して調査を実施した結果、通常の写真よりも拡大画像の方が、皮膚状態の評価が低い傾向があり、皮膚の異常を早期発見できる可能性がある。今後は客観的評価指標と詳細な画像分析、炎症性サイトカインの結果も含めて、皮膚の拡大画像が、新生児の皮膚状態を反映しているのか詳細な検討を行う。

5-3 奨励研究

アトピー性皮膚炎既往歴がアレルギー性喘息の発症及び病態に及ぼす影響に関する実験的研究

研究者：定金 香里

乳幼児期にアトピー性皮膚炎にかかった人でも、大人になるにつれて自然に治癒する人は多い。その中で、大人になって別のアレルギー（例えば気管支喘息や花粉症など）にかかる人がいるが、乳幼児期にアトピー性皮膚炎にかかったことが、どのように関係しているのかは不明である。本研究では、離乳一週間後のマウスにアトピー性皮膚炎を発症させた後、自然に治癒させ、大人になってから、今度はアレルギー性喘息を発症させたマウスと、大人になってからアレルギー性喘息だけを発症させたマウスで、病態に違いがあるのか比較検討した。肺の状態を調べたところ、アトピー性皮膚炎にかかったことのあるマウスの方が、アレルギー性喘息の病態が軽かった。この動物実験から、子どもの時にアトピー性皮膚炎にかかった経験のある人は、そうでない人に比べて、大人になってアレルギー性喘息にかかっても、症状が軽い、あるいは重症化しないことが推察される。

精神科デイケアにおける精神障害者のリカバリー支援に関する研究—IMRの導入と実施

研究者：杉本 圭以子、影山 隆之

本研究は、精神障害者を対象とした心理教育プログラムの一つ IMR (Illness Management and Recovery : 疾患管理とリカバリー) を実施経験のない精神科デイケアで実施し、その前後の質問紙調査により、生活満足度、リカバリー志向の改善等、生活の質向上につながる効果を明らかにすることと、特にどのような参加者に効果が認められたかを明らかにすることを目的とした。

対象者は A 県内 2 つの精神科病院デイケアを利用する IMR 参加者 28 名と IMR 以外のプログラムに参加した対照群 25 名であった。調査内容は、属性、生活満足度 (Life satisfaction Scale :LSS)、リカバリー志向 (Recovery Assessment Scale: RAS)、デイケアスタッフによる社会生活評価(Life Assessment Scale for the Mentally III : LASMI)とした。

平成 28 年 4 月～平成 29 年 12 月に 2 病院で、9～12 か月のプログラムを 3 クール実施した。IMR 中断者、デイケア中断者を除き参加群 20 名、対照群 21 名を分析対象とした。IMR 実施前後の各尺度得点の変化を分析した。対照群のすべての尺度項目で有意差は認められず、参加群において生活満足度、リカバリー志向、スタッフ評価による社会生活の項目に改善が認められた。さらに参加者の属性と各尺度項目変化量の相関をみると、「罹病期間」と生活満足度尺度の 3 項目に負の相関、「年齢」と社会生活評価の 1 項目に正の相関があり、本研究の IMR 参加者には、罹病期間が短く、年齢が若い人に効果が認められた。今後さらに IMR 実施による効果検証を積み重ねることが必要である。

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発—新卒訪問看護師教育に向けて—

研究者：山田 貴子、藤内 美保

我が国では急速な高齢化を背景に、地域包括ケアシステムの構築が推進されている。在宅医療のニーズが増大する中、訪問看護の充実と人材育成が重点課題である。新卒の訪問看護師は「利用者の変

化する病態や状況を的確に判断し適切な技術を提供するのが難しい」といった困難さを報告している。一方で、熟練訪問看護師は決められた時間内に、五感を使って利用者のバイタルサインや、表情、行動、周囲の環境などの情報を収集し、収集した内容を利用者個々に合わせて判断し適切な援助に繋げている。

本研究では、熟練訪問看護師は利用者の何を観察し情報収集しているのか、情報収集した内容をどのように判断しているのか、その思考過程を可視化し、臨床判断モデルを構築することを目的としている。

医療用 X 線 CT による部分照射が造血幹細胞に与える影響の基礎的検討

研究者：恵谷 玲央

現在医療被ばくによる健康リスクが懸念されている。例えば、医療被ばくに関する疫学調査について、CT 検査の回数（総被ばく線量）に依存して小児白血病や脳腫瘍の発症リスクが増加することが報告されている。つまり、白血病の発症に、低線量放射線照射後の中長期にわたって生物学的影響の蓄積がしている可能性が示唆される。一方で、照射と照射の時間間隔が十分であれば生物学的影響の蓄積はみられない可能性が細胞を用いた実験で示されている。このように、医療用 X 線 CT などの低線量放射線の頭部等への部分的な照射が、どのように白血病発症に関与するのかについて生物学的には明らかでない。本研究は、実際に動物用 X 線 CT 検査装置を使用して、放射線誘発白血病のモデルマウスである C3H マウスの頭部または大腿骨に X 線を照射し、照射後の造血幹細胞中の染色体異常・遺伝子異常の変化について調べ、医療被ばくの部分照射による生物学的影響の差異を明らかにすることを目的にする。この研究を通して、X 線 CT の部分照射による白血病のリスクに関連する生物学的変化を明らかにする上で有意義なデータが得られると考える。

喉頭摘出者の永久気管孔に関するセルフマネジメントに関連する要因

研究者：吉川 加奈子、福田 広美、野津 昭文（静岡県立がんセンター）

喉頭摘出術とは、頸部の進行がんに対して行われる根治的手術のひとつである。喉頭の摘出により咽頭と気管を分離するため、喉頭摘出者は前頸部に新たに造設する永久気管孔で生涯呼吸を行う。これにより、鼻腔の機能である吸気の加温・加湿・除塵効果が損なわれ、咳や痰が増加するだけでなく、永久気管孔から直接異物が入り込むという生命の危険を抱えながら生活しなければならない。本研究は、喉頭摘出者が永久気管孔の管理に重点を置いた健康管理能力を向上できるよう、その関連要因を明らかにすることを目的に行った。

本調査は、NPO 法人日本喉摘社団体連合会の患者会会員を対象に、2017 年 4 月から 9 月の期間で 825 部の質問紙を配布し、郵送法によって回答を回収した。質問項目は 1) 独自に作成した永久気管孔に関するセルフマネジメント能力尺度、2) 属性、3) 健康管理に関するセルフケア能力尺度 (SCAQ)、4) ソーシャルネットワーク・ソーシャルサポートとし、作成した永久気管孔に関するセルフマネジメント能力尺度の合計点を従属変数とした重回帰分析を行った。

429 部の有効回答をもとに分析を行った結果、性別、セルフケア能力の「健康管理法の獲得と継続」

および「体調の調整」、ソーシャルサポートの評価的支援が有意な関連項目であった。永久気管孔に関するセルフマネジメント能力との関連で最も大きな説明力を示したソーシャルサポートの「評価的支援」とは、自己評価に対して支持的なフィードバックを返していくことである。喉頭摘出者自身が日々セルフマネジメントを行うにあたり、後押しするための重要な支援であることが示唆された。また、自分自身の要因であるセルフケア能力の中でも、「自分なりの健康管理法を獲得し継続できる能力」「自分の弱みを理解しながら、自分で体調を調整できる能力」は、喉頭摘出者が行う永久気管孔に関するセルフマネジメントを支える重要なセルフケア能力である可能性が示唆された。喉頭摘出者が安全で健康的な生活を送れるように、看護師は、喉頭摘出者のセルフケア能力等の内的要因とソーシャルサポート等の外的要因の両者に着目しながら、本人や家族の生活を支えられるようかかわることが重要である。今後はさらに作成尺度の精度を高め、より具体的な支援内容や経時的変化にも注目した分析を行う必要がある。

産科施設における小児期予防接種教育の実態調査

研究者：足立 綾、高野 政子

小児期の予防接種は、定期接種の対象疾患にインフルエンザ菌 b 型感染症、肺炎球菌感染症、水痘、B 型肝炎が追加されるなど過密化、複雑化している。予防接種の情報収集を始めた時期が早い保護者は、生後 1 か月時のワクチン接種の種類が増加することが報告されている。本研究は、全国の産科施設における妊産婦への小児期予防接種教育の実態を明らかにすることを目的とした。

調査は、全国の分娩取り扱い施設に勤務する看護管理者 500 名を対象とし、無記名自記式質問紙法で実施した。調査項目は、対象者の属性、所属施設の属性、予防接種の認識、予防接種の支援、自由記述とした。115 部の回収が得られ、113 部を分析した。今回の調査では、予防接種教育を実施している施設は妊娠期では 1 割にも満たず、産褥期ではおよそ 8 割であった。教育内容は、妊娠期「予防接種の必要性」、産褥期「定期接種の種類やスケジュール」であった。産科施設の看護職は妊娠初期から妊婦と関わることができ、出産前から子どもの予防接種についての情報共有をすることが可能である。予防接種率を向上するためには、産科、小児科が連携して啓発教育に取り組むことでより効果的な支援を行うことができる。産科施設における妊産婦に対しての看護職の効果的な介入や、予防接種教育の在り方が課題と考える。

6 業績

6-1 著書

影山 隆之：「はたらく」を支える！女性のメンタルヘルス，南山堂，2017，64-70，ライフサイクルからみた女性のメンタルヘルス.

影山 隆之：学校メンタルヘルスハンドブック，大修館書店，2017，12-17，学校メンタルヘルスの近接領域.

影山 隆之：学校メンタルヘルスハンドブック，大修館書店，2017，187-192，自殺・自死.

Kuwano N : Global applications of culturally competent health care: guidelines for practice, Springer, 2017, 369-373, Sources of psychological stress for a Japanese immigrant woman.

井伊 久美子、荒木田 美香子、松本 珠美、堀井 とよみ、村嶋 幸代、平野 かよ子(編)：保健師業務要覧第3版 2017年版，日本看護協会出版会，2017。（村嶋 幸代：第1部基礎編 第5章 実践に必要な研究力 1 実践に不可欠な「研究力」,172-177. 高野 百里、村嶋 幸代：第2部実践編 第2章 地域診断に基づく展開事例 1 母子保健, 260-267.）

森 加苗愛、山本 寿実：ヒト医療に学ぶ動物の体重管理 減量を「自分事」にしてもらう伝え方 前編，動物看護専門誌『as』2月号，2018，78-80

森 加苗愛、山本 寿実：ヒト医療に学ぶ動物の体重管理 減量を「自分事」にしてもらう伝え方 後編，動物看護専門誌『as』3月号，2018，78-80

吉村 匠平：発達と老いの心理学，サイエンス社，2017，109-128，青年期.

6-2 研究論文

足立 綾、高野 政子：ワクチン同時接種に関する乳幼児の保護者の意識調査, 小児保健研究, 76(4), 328-336, 2017.

Choe MA, Kuwano N, Bang KS, Cho MK, Yatsushiro R, Kawata Y : Japanese and Korean nursing students' motivation for joining disaster relief activities as nurses in the future, *Journal of Trauma Nursing*, 24(3), 208-218, 2017.

Kanzaki N, Kataoka T, Etani R, Sasaoka K, Kanagawa A, Yamaoka K : Analysis of liver damage from radon, X-ray, or alcohol treatments in mice using a self-organizing map., *Journal of Radiation Research*, 58(1), 33-40, 2017.

Kataoka T, Etani R, Kanzaki N, Kobashi Y, Yunoki Y, Ishida T, Sakoda A, Ishimori Y, Yamaoka K : Radon inhalation induces manganese-superoxide dismutase in mouse brain via nuclear factor- κ B activation., *Journal of Radiation Research*, 58(6), 887-893, 2017.

Etani R, Kataoka T, Kanzaki N, Sakoda A, Tanaka H, Ishimori Y, Mitsunobu F, Taguchi T, Yamaoka K : Protective effects of hot spring water drinking and radon inhalation on ethanol-induced gastric mucosal injury in mice., *Journal of Radiation Research*, 58(5), 614-625, 2017.

Hamanaka R : Regulation of type I collagen expression by microRNA-29 following ionizing radiation, *Radiat Environ Biophys.*, 57, 41-54, 2018.

Hamanaka R : Overexpression of cannabinoid receptor 1 in esophageal squamous cell carcinoma is correlated with metastasis to lymph nodes and distant organs, and poor prognosis., *Pathol Int.*, 67, 83-90, 2017.

樋口 幸、野津 昭文、梅野 貴恵、安部 真紀：日本における早期新生児期の保清・スキンケアの現状と課題, 母性衛生, 58(1), 91-99, 2017.

He M, Ichinose T, Yoshida S, Ito T, He C, Yoshida Y, Arashidani K, Takano H, Sun G, Shibamoto T : PM2.5-induced lung inflammation in mice: Differences of inflammatory response in macrophages and type II alveolar cells., *Journal of Applied Toxicology*, 37(10), 1203-1218, 2017.

Chowdhury PH, Kitamura G, Honda A, Sawahara T, Hayashi T, Fukushima W, Kudo H, Ito S,

Yoshida S, Ichinose T, Ueda K, Takano H : Synergistic effect of carbon nuclei and polyaromatic hydrocarbons on respiratory and immune responses, *Environmental Toxicology*, 32(9), 2172-2181, 2017.

He M, Ichinose T, Yoshida Y, Arashidani K, Yoshida S, Takano H, Sun G, Shibamoto T : Urban PM2.5 exacerbates allergic inflammation in the murine lung via a TLR2/TLR4/MyD88-signaling pathway, *Scientific Reports*, 8;7(1), 11027, 2017.

Honda A, Sawahara T, Hayashi T, Tsuji K, Fukushima W, Oishi M, Kitamura G, Kudo H, Ito S, Yoshida S, Ichinose T, Ueda K, Takano H : Biological factor related to Asian sand dust particles contributes to the exacerbation of asthma, *Journal of Applied Toxicology*, 37(5), 583-590, 2017.

Iwasaki Y, Kazama JJ, Fukagawa M : Molecular abnormalities underlying bone fragility in chronic kidney disease, *Bio Med Research International*, 2017: 3485785, 2017.

甲斐 倫明 : リスクのものさし, *日本リスク研究学会誌*, 27(1), 29-32, 2017.

関澤 純、甲斐 倫明 : リスク報道におけるメディアと専門家との連携のあり方, *日本リスク研究学会誌*, 27(1), 23-27, 2017.

Wardaningsih S, Kageyama T : The correlation between demographic data of Kaders to health locus of control score and the opinion about mental health services in Indonesia, *Advanced Science Letters*, 23(12), 12580-12583, 2017.

草野 淳子 : 在宅療養児の母親が子育ての喜びを感じるまでのプロセス, *母性衛生*, 57(4), 728-725, 2017.

Kuwano N, Lee, S. W., Jang S, Fukuda H. : Japanese nurses' perception of their experiences caring for culturally diverse patients: Comparison with Korean nurses, *Health and Primary Care*, 1(3), 3-8, 2017.

宮内 信治 : 『分別と多感』retold 版, 完全版, 映画版における音調変動の解釈と検討, *英語音声学*, (22), 103-113, 2018.

Eto M, Miyauchi S : Falls after ophthalmological surgery experience among the community-dwelling elderly in Japan, *Journal of Community Health Nursing*, 34(1), 1-9, 2017.

峰松 恵理、村嶋 幸代、長村 杏奈、荒田 尚子：地域母子保健における糖尿病ハイリスク者の抽出を目指して－妊娠糖尿病既往女性が産後 3～15 年に糖代謝以上を発症するリスクの分析－，母性衛生, 58(2), 380-388, 2017.

村嶋 幸代：自治体保健師のキャリアラダーと人材育成体制の構築 保健師の能力を開発し、地域保健を効果的に進めるために，保健師教育, 1(1), 8-15, 2017.

中釜 英里佳、小野 美喜：ブログによる闘病記を研究対象にする際の倫理的配慮，日本看護倫理学会誌, 10(1), 67-72, 2018.

Ogata A, Hatono Y : Expression and fluctuation in fatigue over five consecutive night shifts, Japanese Journal of Occupational Medicine and Traumatology, 65(4), 190-200, 2017.

6-3 その他の論文等

福田 広美：大分県版中小規模病院等看護管理者支援事業報告書，平成 29 年度厚生労働省看護職員確保対策特別事業，2017.

影山 隆之：学会誌「自殺予防と危機介入」の展開，自殺予防と危機介入，38(1)，17-20，2018.

宮内 信治，Shirley GT，福田広美：Dr. Loretta C. Ford からのメッセージ新しい専門職としてのナースプラクティショナーの創設～課題と解決策～，日本 NP 学会誌，1(2)，2017.

村嶋 幸代：「国際保健医療のキャリアナビ」（日本国際保健医療学会 編）に対する書評，保健の科学，59(5)，333，2017.

村嶋 幸代：「からだのしくみーナースの視点ー」（杉崎紀子 著）に対する書評，保健の科学，59(6)，405，2017.

村嶋 幸代：働き方改革とチーム医療の推進に向けて～NP の制度化に向けた議論を～，医療と社会，353-354，2017.

村嶋 幸代、中板 育美、藤原 啓子、國井 隆弘、山崎 直子：新春座談会 地域をプロデュースする保健師の力，週刊保健衛生ニュース，1941，2-31，2018.

村嶋 幸代：私の紙面批評 “事実” の収集は丹念に，大分合同新聞 3 月 19 日号，9，2017.

村嶋 幸代：私の紙面批評 地域の先進事例紹介を，大分合同新聞 6 月 11 日号，9，2017.

村嶋 幸代：私の紙面批評 “減塩” での県民の健康応援，大分合同新聞 9 月 3 日号，9，2017.

村嶋 幸代：私の紙面批評 医療分野 もっと発信を，大分合同新聞 12 月 24 日号，9，2017.

村嶋 幸代：私の紙面批評 地方包括ケア活動、伝えて，大分合同新聞 3 月 4 日号，9，2018.

品川 佳満、橋本 勇人：【在宅でもロボット介護】一人暮らしの安心に 古くて新しい高齢者見守り機器 見守られる側への配慮忘れずに，月刊ケアマネジメント，28(6)，28-31，2017.

吉川 加奈子：「看護職の専門性向上?マグネットホスピタルからの発信?」(Dr. Pauline J. Abraham の講演から)，看護科学研究，15(1)，21-24，2017.

大原 裕子、瀬戸 奈津子、柴山 大賀、黒田 久美子、飯田 直子、金子 佳世、田井 さやか、照沼 則子、任 和子、法月 章子、畑中 あかね、森 加苗愛：認定教育施設における外来糖尿病教室の実態調査-開催スケジュールならびに内容と実施担当者に焦点をあてて，日本糖尿病教育・看護学会誌，21(2)，119-129，2017.

6-4 学術講演等

岩崎 香子：CKD における骨折と骨細胞機能変化，第 35 回日本骨代謝学会学術集会，2017.

小野 美喜：地域医療のゲートキーパーを目指す診療看護師（NP）の活動と成果，第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017.

小野 美喜：医療における看護の役割と倫理，日本医療マネジメント学会第 16 回九州山口連合大会，2017.

影山 隆之：過重労働とコーピング特性，第 15 回日本予防医学会，2017.

影山 隆之：実践と研究の対話：学会誌と論文掲載の意義—本学会誌への投稿について，日本精神衛生学会第 33 回大会，2017.

影山 隆之：日本自殺予防学会の歴史と法人化後の展望：学会誌「自殺予防と危機介入」の展開，第 41 回日本自殺予防学会，2017.

一瀬 美帆、長島 優佳、深水 志帆、影山 隆之：地域包括ケア時代に地域を志向した新しい看護学実習（予防的家庭訪問実習）を経験して，日本地域看護学会第 20 回学術集会，2017.

影山 隆之：COC+事業が目指すもの，そして，それを越えるもの，九州・沖縄COC /COC+合同シンポジウム in おおいた 2017, 2017.

平野 互：合理的配慮の定着に向けて，第 70 回九州弁護士連合会定期大会シンポジウム，2017.

平野 互：事例検討会，日本看護倫理学会第 10 回年次大会，2017.

宮内 信治：よい実践を導き支える高度実践看護師，日本看護倫理学会第 10 回年次大会海外招聘講演，2017.

村嶋 幸代：地域のニーズに応えることは未来につながる，日本看護倫理学会第 10 回年次大会，2017.

村嶋 幸代：地域の未来を支える地域看護学の構築に向けて，日本地域看護学会第 20 回学術集会学術集会長講演，2017.

村嶋 幸代：いのちをまもり、暮らしをつむぐ看護の創造—課題先進国日本で、看護職ができること、しなければならないこと—，一般社団法人日本看護研究学会第 22 回九州・沖縄地方会学術集会，2017.

村嶋 幸代：大学院修士課程 NP コースで特定行為を教育する意義をあらためて考える，第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017.

6-5 学会発表

若竹 理沙、赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋 幸代：萌出期前からの児の歯の健康づくりに取り組んだ保健師活動の展開-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-, 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2017.

工藤 咲季、赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋幸代：CKD リスクのある住民へのインタビューから見た、CKD 重症化予防のための働きかけ-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-, 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2017.

山本 真悠子、赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋 幸代：漁村地区の食文化に着目した高血圧予防一次予防のための保健活動-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-, 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2017.

山本 真悠子、赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋 幸代：漁協共同組合に健康づくりを広めるための方策 -修士課程保健師教育における実習報告-, 日本地域看護学会第20回学術集会, 2017.

若竹 理沙、赤星 琴美、川崎 涼子、村嶋 幸代：健康寿命延伸のための青壮年期で行う歯・口腔の健康づくり-修士課程保健師教育における実習報告-, 日本地域看護学会第20回学術集会, 2017.

一丸 あゆみ、赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代：特定健診未受診者の実態の把握と未受診者対策の検討—修士課程保健師教育における地域マネジメント実習—, 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2017.

松尾 有梨沙、赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子、村嶋 幸代：A市における子どものう歯保有に関連する生活習慣—修士課程保健師教育における地域マネジメント実習—, 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2017.

森 友莉佳、赤星 琴美、川崎 涼子、緒方 文子：1歳6か月児を育てる母親の不安に関連する要因, 日本地域看護学会第20回学術集会, 2017.

足立 綾、高野 政子、草野 淳子：小学校に通う慢性疾患患児と発達障害児に関わる養護教諭の活動, 日本小児看護学会第27回学術集会, 2017.

Abe M : Effect of egg and folic acid supplement consumption by pregnant women on food

allergies in their children. European Academy of Allergy and Clinical Immunology, 2017.

石田 佳代子：災害超急性期における黒タグ者および遺族対応に必要とされる能力—熊本地震における看護師の対応事例より—, 第 48 回日本看護学会—急性期看護—学術集会, 2017.

石田 佳代子：避難所における被災者の血圧管理について災害支援ナースに必要と思われる活動—平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害における活動を振り返って—, 第 23 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 2017.

石丸 智子：全国の救急外来における院内トリアージの現状と今後の課題, 第 12 回医療の質・安全学会学術集会, 2017.

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、嵐谷 奎一：PM_{2.5} と黄砂の複合曝露による肺のアレルギー炎症増悪作用, 第 58 回大気環境学会年会, 2017.

市瀬 孝道、吉田 成一：PM_{2.5} と黄砂の単一及び複合曝露がアレルギー気道炎症に与える影響, 日本薬学会第 137 年会, 2018.

市瀬 孝道、吉田 成一：PM_{2.5} の炎症反応と肺のアレルギー炎症増悪における銅の関与, フォーラム 2017：衛生薬学・環境トキシコロジー, 2017.

嵐谷 奎一、伊藤 真滉、川波 葵、木村 遙香、島田 遥香、高橋 佳容、菌田 理央、山村 由貴、秋山 幸雄、吉田 成一、市瀬孝道：2016 年春季の北九州地域の汚染物質濃度の調査, 第 18 回大気環境学会九州支部研究発表会, 2018.

稲垣 敦：ゲームの勝敗や優勝の不確実性からみたスポーツ振興策, 第 9 回大分県スポーツ学会学術大会, 2017.

稲垣 敦：ファジィ多重ロジスティック回帰分析の提案, 日本体育測定評価学会第 17 回大会, 2017.

稲垣 敦：離島住民の健康寿命と家庭菜園：大分県姫島村について, 第 76 回日本公衆衛生学会総会, 2017.

岩崎 香子、田中 寿絵、大和 英之、丸山 徹、深川 雅史：尿毒症物質 p-cresyl sulfate の濃度上昇は慢性腎臓病の骨脆弱性に関与する, 第 19 回日本骨粗鬆症学会学術集会, 2017.

岩崎 香子、田中 寿絵、大和 英之、渡邊 博志、丸山 徹、深川 雅史：骨細胞機能変化を介した尿毒症物質 p-cresyl sulfate の骨脆弱性への関与，第 37 回日本骨形態計測学会学術集会，2017.

松井 咲樹、梅野 貴恵、樋口 幸：妊産婦の温泉入浴についての禁忌事項認知と利用頻度に関する実態調査，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

水町 祐理、梅野 貴恵、樋口 幸：地方で出産する母親のマタニティマークの利用状況と認識，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

照井 遥、梅野 貴恵、安部 真紀：妊活の講座を受講した 20-30 代男女のライフプランと生殖・不妊に関する認識，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

梅野 貴恵、樋口 幸、姫野 綾：閉経後女性の糖・脂質代謝，SMI に対するエクオール摂取の効果 授乳経験別の検討，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

中城 紗也子、梅野 貴恵、安倍 真紀、宇留嶋 美弥：産衣への助産師の認識と産婦の快適性・医療者の利便性を考慮した産衣の改良に関する研究，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

恵谷 玲央、甲斐 倫明：放射性セシウムの内部被曝による健康影響の文献レビュー：非がん影響に関する動物実験，日本保健物理学会第 50 回研究発表会/日本放射線安全管理学会第 16 回学術大会合同大会，2017.

北里 隆文、古場 裕介、吉武 貴康、恵谷 玲央、橋爪 信浩、小野 孝二：CT 被ばく線量評価システム WAZA-ARI のための 80 列 CT 装置の線源データ測定，日本放射線技術学会第 45 回秋季学術大会，2017.

小嶋 光明、井 佑美、恵谷 玲央、甲斐 倫明：放射誘発マウス急性骨髄性白血病の起因となる Sfp1 遺伝子欠失細胞の動態に与えるカロリー制限の影響，日本放射線影響学会第 60 回大会，2017.

小嶋 光明：放射線の繰り返し照射による染色体異常の蓄積性から線量率効果のメカニズムを考える—in vitro と in vivo における実験の結果から—，日本保健物理学会第 50 回研究発表会・日本放射線安全管理学会第 16 回学術大会合同大会，2017.

緒方 文子、鳩野 洋子：5 日間連続夜勤を行う交代制勤務者の勤務初日の疲労の比較，第 6 回日本公衆衛生看護学会学術集会，2017.

Sakomura M, Ueno Y, Takagi Y, Shinohara A, Ogata A, Kawasaki R : Elderly residents' perception of a call for ambulance in a hilled rural area of Oita prefecture, Japan., 2018 Joint Internal Symposium of GISUP-KOGSIS, 2018.

小野 美喜：看護の役割拡大の礎となる倫理，日本看護倫理学会第 10 回年次大会，2017.

小野 美喜：診療看護師（NP）が職務上経験した倫理的問題の傾向，日本 NP 学会第 3 回学術集会，2017.

小野 美喜、甲斐 博美：診療看護師（NP）が職務上経験した倫理的問題の事例に関する調査研究（第一報），日本看護倫理学会第 10 回年次大会，2017.

小野 美喜：診療看護師(NP)の育成と地域医療に求められる活動成果，第 21 回日本看護管理学会学術集会，2017.

甲斐 博美、草野 淳子、小野 美喜：大学院 NP コースにおける修了生のフォローアップ研修の報告，日本 NP 学会第 3 回学術集会，2017.

甲斐 博美：診療看護師（NP）が経験した特定行為に係る倫理的場面とその対応，日本間誤倫理学会第 10 回年次大会，2017.

甲斐 博美：診療看護師（NP）とは～大学院修士課程における診療看護師（NP）教育～，第 16 回日本病院総合診療医学会学術総会，2018.

甲斐 倫明、川西 光帆：喫煙歴のないコホート研究がリスク推定に及ぼす影響：シミュレーション研究，2017.

影山 隆之、久保 杏奈、大平 ひろみ：在宅高齢者の首尾一貫感覚とソーシャルサポート，抑うつ症状，物忘れの自覚との関連，日本精神衛生学会第 33 回大会，2017.

影山 隆之、門林 秀弥、小林 敏生：12 時間夜勤シミュレーション実験における休憩時間帯と早朝の各制度，第 90 回日本産業衛生学会，2017.

小林 敏生、久保 陽子、影山 隆之：男性労働者における主観的健康観の関連要因，第 76 回日本公衆衛生学会総会，2017.

小林 敏生、古屋敷 明美、花岡 匡子、八橋 孝介、河原 大陸、上岡 はつみ、影山 隆之、張 峻屹、田淵 啓二：宿泊型の森林セラピーが心理および生理機能に及ぼす効果—抑うつの有無別の比較，第 90 回日本産業衛生学会，2017.

Kawatsu L, Ohnishi M, Uchimura K, Kawasaki R, Ohkado A : Can we turn the challenge into chance? Drug abuse and tuberculosis in prisons in Japan., International Meeting on Prisons and Health, 2017.

西田 隆宏、西原 三佳、川崎 涼子、中尾 理恵子、本田 純久：地域在住の虚弱高齢者におけるマインドフルネスとメンタルヘルス指標との関連，日本公衆衛生学会，2017.

Kawasaki R : Preparedness for disaster among elderly residents living in a hilled rural area of Oita prefecture, Japan., 2018 Joint Internal Symposium of GISUP-KOGSIS, 2018.

川崎 涼子、矢野 亜紀子、緒方 文子、岩崎 りほ、赤星 琴美：中山間地域在住高齢者の在宅療養生活の継続の意向と実現可能性の認識，第 76 回日本公衆衛生学会総会，2017.

草野 淳子、高野 政子：在宅療養児者と家族に対する訪問看護師が行う医療的ケアの支援の現状，第 64 回小児保健協会学術集会，2017.

草野 淳子、高野 政子、足立 綾：乳幼児期の在宅療養児の母親が医療的ケアの技術を獲得するプロセス，第 23 回大分県小児保健学会，2017.

草野 淳子、小野 美喜、福田 広美、甲斐 博美、森 加苗愛、宮内 信治、高野 政子、濱中 良志、藤内 美保、村嶋 幸代：プライマリケア領域の NP 教育に求められるもの—修了生の意見分析から，日本 NP 学会第 3 回学術集会，2017.

草野 淳子：NICU に入院した子どもの母親の愛着形成のプロセスと看護介入に関する国内文献レビュー，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

草野 淳子：在宅療養児の母親が子どもの成長発達を実感するまでのプロセス，第 58 回日本母性衛生学会，2017.

桑野 紀子：地域で取り組む在留外国人への予防的看護，日本地域看護学会第 20 回学術集会，2017.

金城 芳秀、宮里 暁乃、大城 真理子、佐伯 圭一郎、西川 浩昭、李 廷秀：看護学生が認識する教員の civility と incivility，第 82 回日本健康学会総会，2017.

佐伯 圭一郎：教育場面での活用に向けた「看護系大学共用試験 CBT システム」ソフトウェアの汎用化改修，第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017.

縣 俊彦、佐伯 圭一郎、西川 浩昭、佐々木 美奈子、金城 芳秀、黒沢 美智子：保健機能食品の科学的根拠に関する検討，第 82 回日本健康学会総会，2017.

定金 香里：環境汚染物質がアレルギー疾患に及ぼす影響—動物モデルを用いた研究—，第 44 回本毒性学会学術年会，2017.

定金 香里、市瀬 孝道、西川 雅高、高野 裕久：黄砂が惹起するアレルギー性気道炎症増悪における酸化ストレス寄与についての検討，第 58 回大気環境学会年会，2017.

定金 香里、市瀬 孝道、牧 輝弥：黄砂バイオエアロゾルから分離した真菌を経気道曝露した時の肺への影響，第 48 回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会，2017.

品川 佳満、橋本 勇人：アメリカの事例から作成した医療提供者による個人情報漏えいの事故原因モデルの検証—日本の事故事例への適用—，日本医療情報学会看護学術大会論文集，2017.

秦 さと子、首藤 信通、梶原 里紗、石丸 智子：有酸素運動による血流量の変化と嚔下反射潜時との関連，第 82 回日本健康学会総会，2017.

杉本 圭以子、藤原 朋子、山本 隆正：精神科デイケア利用者の IMR 参加による生活の質と満足度，リカバリー志向及び社会生活の変化，日本精神障害者リハビリテーション学会第 25 回久留米大会，2017.

関根 剛：看護場面のタッチングが第三者に与える看護師の印象，九州心理学会第 78 回大会，2017.

高野 政子、安部 由紀恵、足立 綾：普通校における医療的ニーズのある慢性疾患をもつ児童生徒の実態と養護教諭の意識, 第 64 回日本小児保健協会学術集会, 2017.

Takano M : A study of pediatric cancer patients who interacted with their school through information and communication technology(ICT) during hospitalization, 49th Congress of the International Society of Pediatric Oncology, 2017.

高野 政子：小児 NP の活動に対する看護師・スタッフの満足度とその効果, 日本 NP 学会第 3 回学術集会, 2017.

高野 政子：小児がん患児が入院中に原籍校と ICT を用いて交流した復学プロセス, 第 14 回日本小児がん看護学会学術集会, 2017.

高野 政子：特別支援学校で医療的ケアに関わる看護師の特性と役割遂行上の認識, 日本小児看護学会第 27 回学術集会, 2017.

高野 政子：特別支援学校に勤務する看護師の医療的ケア技術の自己評価と研修ニーズ, 日本小児看護学会第 27 回学術集会, 2017.

高野 政子：普通校における医療的ニーズのある慢性疾患をもつ児童生徒の実態と養護教諭の意識, 2) 第 64 回日本小児保健協会学術集会, 2017.

田中 佳子：血液透析患者におけるシャント血流音の周波数特性に関する基礎的研究, 第 82 回日本健康学会, 2017.

Miho Tonai, Kanoko Kawano, Takako Yamada : Perceptions of nursing students and nurses assessed using an eye movement observations device. Primary Healthcare and Nursing, 4th Annual Congress and Medicare Expo 45,2017.

藤内 美保：急性期医療から在宅医療における診療看護師の現状と展望, シンポジウム, 大学院 NP 養成の教育と修了生の活動, 日本医療マネジメント学会 第 16 回九州・山口, 2017.

武野 真、藤内 美保、佐藤 弥生：病院と地域の看護職のネットワーク構築における保健所保健師の役割 ～看護の地域ネットワーク推進事業を通して～, 日本地域看護学会, 2017.

徳丸 由布子、林 猪都子：A市の産科医療機関による産後ケアの現状と展望，第58回日本母性衛生学会学術集会，2017.

平井 和明、岩崎 りほ、巻野 希和、影山 隆之、村嶋 幸代：看護学生による予防的家庭訪問実習(第5報)：高齢者の生活機能と健康への関心の変化，第76回日本公衆衛生学会総会，2017.

平野 互：NPO 法人「患者の権利オンブズマン」の18年—「苦情から学ぶ医療」を目指して—，第36回日本医学哲学・倫理学会大会，2017.

宮内 信治：『分別と多感』retold 版，完全版，映画版における音調変動の解釈と検討，日本英語音声学会第22回全国大会兼 第3回国際英語音声学者大会，2017.

宮内 信治、甲斐 博美：離島におけるナースプラクティショナーの現状と活動：ハワイNP 研修報告，日本NP 学会第3回学術集会，2017.

森 加苗愛：患者の思いに寄り添った体重管理指導のコツ，第14回日本獣医内科学アカデミー学術大会，2017.

中西 可奈子、山田 貴子、藤内 美保：筋萎縮性側索硬化症患者が経験している困難と心の支え—患者の語りより—，日本地域看護学会第20回学術集会講演集，2017.

吉田 成一、市瀬 孝道：胎仔期 LPS 曝露による雄性出生仔生殖系への影響，日本薬学会第137年会，2018.

吉田 成一、村木 直美、伊藤 剛、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：胎仔期 LPS 曝露による出生仔免疫系への影響，フォーラム2017：衛生薬学・環境トキシコロジー，2017.

吉田 成一、村木 直美、伊藤 剛、嵐谷 奎一、市瀬 孝道：胎仔期 LPS 曝露による雄性出生仔の生殖機能への影響，第58回大気環境学会年会，2017.

吉村 匠平、秋本 慶子：ペア学習における学生の類型論的理解（2），第24回大学教育研究フォーラム，2017.

6-5 受賞

学術論文奨励賞

樋口 幸：生後 1 か月児の皮膚状態と母親の認識との比較研究，日本母性衛生学会，2017.

第 25 回総合リハビリテーション賞

加藤 貴志、岸本 周作、井野辺 純一、稲垣 敦：脳損傷者の実車運転技能に関連する神経心理学的検査について：システマティックレビューとメタ分析，金原一郎記念医学医療振興財団，2017.

優秀ポスター賞

秦 さと子、首藤 信通、梶原 里紗、石丸 智子：有酸素運動による血流量の変化と嚔下反射潜時との関連，第 82 回日本健康学会総会，2017.

7 地域貢献

7-1 講演等

石田 佳代子

看護診断 講義・演習, 平成 29 年度大分県立病院看護師研修会, 大分市.

看護診断とアセスメント 講義・演習, 平成 29 年度豊後大野市民病院看護師研修会, 豊後大野市.

看護診断とアセスメント 講義・演習, 平成 29 年度豊後大野市民病院看護師研修会, 豊後大野市.

実習指導案作成演習, 大分県立病院平成 29 年度臨地実習指導者短期教育プログラム, 大分市.

フィジカルアセスメント(心音・呼吸音・全身皮膚), 平成 29 年度看護力再開発講習会(研修Ⅱ) ～看護技術研修～, 2017.

看護過程, 平成 29 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 2017.

災害時のトリアージの実際, 平成 29 年度大分県立看護科学大学公開講座 災害に備える—熊本地震から学ぶ, 大分市.

フィジカルアセスメントの基礎—触診と聴診の看護技術—, 平成 29 年度大分県立中津北高校出前講義, 中津市.

梅野 貴恵

平成 29 年度大分市立三佐小学校「いのちの教育」, 4 年生「第二次性徴」と「生命誕生と命の大切さ」, 大分市.

平成 29 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会「助産師教育課程」, 大分市.

恵谷 玲央

平成 29 年度文部科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング (第 4 回), 大分市

平成 29 年度文部科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング (第 9 回), 大分市

小嶋 光明

診療放射線技師に必要な放射線生物の基礎, 線量適正化講習会 (九州地域), 大分市.

第 4 回看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズ研修, 大分市.

第 9 回看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズ研修, 大分市.

小野 美喜

平成 29 年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修, 看護専門職論, 看護実践における倫理, 大分市

平成 29 年度, 大分県看護協会, 実習指導者講習会, 「実習指導計画・指導案作成の実際」の講義・演習, 大分市

大分県看護協会, 看護専任教員養成課程, 看護論演習「成人看護」, 大分市

平成 29 年度, 大分県看護協会, 看護倫理の理解(基礎編), 大分市

平成 29 年度, 大分県看護協会, 看護倫理の理解(実践編), 大分市

中津ファビオラ看護専門学校, 看護倫理, 中津市

大分県立病院, 「実習指導者養成短期プログラム」, 大分市

大分県看護協会, 「高齢者のフィジカルアセスメント」, 大分市

影山 隆之

アルコール, うつ, 自殺のトライアングル, アルコール関連問題と自殺予防シンポジウム, 大分市.

ストレスチェック制度の活用ー労働者のセルフケアに活かす, 大分産業保健総合推進センター衛生管理者研修, 大分市.

ストレスへの対処力SOC, 大曲やすらぎサロン, 大仙市.

メンタルヘルス, マネジメント研修, 惨事ストレスおよび平時のストレスマネジメント, 消防職員幹部教育上級幹部科, 由布市.

自殺の早期発見ーサインに気づいてつなごう, 豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修, 豊後大野市.

職場で可能な自殺対策とメンタルヘルスーストレスチェック制度をふまえたメンタルヘルス活動の進め方, 大分産業保健総合推進センター産業医研修, 大分市.

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センターマネジメント研修, 大分市.

メンタルヘルス, 大分県自治人材育成センター課長級研修, 大分市.

青年の居場所感とSOSの出し方・受け止め方, 大分県専修学校各種学校連合会研修会, 大分市.

地域ですすめる自殺対策について, 平成 29 年度日出町自殺対策連絡協議会実務者部会, 日出町.

自殺の早期発見ーサインに気づいてつなごう, 平成 29 年度豊後大野市自殺対策ゲートキーパー研修会, 豊後大野市.

惨事ストレスー消防団員が知っておきたいこと, 平成 29 年度日向市消防団員研修会, 日向市.

地域ですすめる自殺対策について, 平成 29 年度宇佐市自殺対策研修会, 宇佐市.

川崎 涼子

平成 29 年度大分県中堅保健師研修会, 中堅だからできる保健師活動, 大分市.

草野 淳子

平成 29 年度第 2, 3 回医療的ケア研修会, 大分市

平成 29 年度第 2 回医療的ケア看護師研修会, 大分市

杉本 圭以子

やってみよう看護研究 テーマの絞り方から研究開始まで, 大分県看護協会教育研修.
やってみよう看護研究 看護研究のまとめ方とプレゼンテーション, 大分県看護協会
教育研修.

大分県専任教員養成講習会「専門領域別看護論演習 精神看護学」, 大分県看護協会
教育研修.

関根 剛

カウンセリングの理論と実際 (1)、大分いのちの電話相談員養成講座、大分市

カウンセリングの理論と実際 (4)、大分いのちの電話相談員養成講座、大分市

グループ討議、全国被害者支援ネットワーク NNVS 支援活動会議、東京都

研修の企画、NNVS 認定コーディネーター研修前期、東京都

コミュニケーション作りについて、別府市いきいき健幸サポーター養成講座、別府市
ちよっとだけコミュニケーション上手になってみよう、大分工業高等専門学校特別
活動、大分市

メンタルヘルス (3 回)、大分県自治人材育成センター、新任係長級研修、大分市

ロールプレイ・聴くということ、大分チャイルドライン受け手養成講座、大分市

学生との効果的なコミュニケーションのとり方とポイント、大分工業高等専門学校
第 3 回 FD 研修会、大分市

教育研修の企画、全国被害者支援ネットワーク NNVS 認定コーディネーター研修前
期、東京都

国民の期待に応える警察活動、大分県警察学校ブラッシュアップ教養 (警察官)、大
分市

災害のあとのこころの健康維持、消防庁メンタルサポートチーム (朝倉市消防団対
象)、福岡県

災害のあとのこころの健康維持、消防庁メンタルサポートチーム (朝倉市消防本部対
象)、福岡県

惨事ストレス対策、大分県消防学校 (消防団員対象)、大分市

惨事ストレス対策、大分県消防学校 (救急救命対象)、大分市

惨事ストレス対策、大分県消防学校（消防職員専科教育警防科対象）、大分市
子どものサインに気づいてあげられますか、大分市男女共同参画センター男女共生
セミナー、大分市
支援センターにおけるコーディネーターの役割、全国被害者支援ネットワーク NNVS
認定コーディネーター研修前期、東京都
事例検討会、大分被害者支援センター継続研修、大分市
児童生徒や保護者との信頼関係を築くコミュニケーション、大分県教育センターフ
ォローアップ研修コミュニケーション力向上研修、大分市
自殺対策と自死遺族・自死未遂者の支援のあり方、自死遺族支援ネット設立5周年記
念講演会、大分市
職場のメンタルヘルス、大分県自治人材育成センター新任監督者研修、大分市
人材育成：育成される側から育成する側へ、全国被害者支援ネットワーク九州沖縄ブ
ロック質の向上研修、宮崎県
人材育成：助言・指導のあり方、全国被害者支援ネットワーク中国四国ブロック質の
向上研修、香川県
精神疾患に関わる電話の応答、和歌山いのちの電話協会、和歌山県
対話の基本、大分県警察学校警察安全相談実務専科、大分市
電話相談員スーパービジョン、大分いのちの電話、大分市
地域のコミュニケーションから始める健康づくり、田染健康サミット、豊後高田市
地域の住民だからこそできる自殺予防、大分市保健所ゲートキーパー養成研修会、大
分市
犯罪被害者の心理と対応、大分県警察学校性犯罪捜査専科、大分市
犯罪被害者支援とは何か、紀の国被害者支援センター被害者支援活動員養成講座、和
歌山県
被害を受けた人たちの話を細やかに聞き取るには、山口県男女共同参画相談センタ
ー市町等配偶者暴力相談担当者研修会(専門研修)、山口県
カウンセリングの原理と実際、大分県看護協会保健師・助産師・看護師実習指導者講
習会、大分市
面接技術、大分県看護協会訪問看護eラーニングを利用した訪問看護師養成講習会、
大分市
災害時のこころのケア総論、こころとからだの相談支援センターCRT退院養成及
び隊員フォローアップ研修、大分市
演習：指揮のポイントと演習助言、こころとからだの相談支援センターCRT退院養
成及び隊員フォローアップ研修、大分市
こころの健康－友達のことを知る・上手に聴く、臼杵市役所保険健康課ゲートキーパ
ー研修、臼杵市

田中 佳子

大分県看護協会研修, フィジカルアセスメント研修, 大分市.
豊後大野市民病院看護職員研修会, 看護診断とアセスメント研修-事例による演習,
豊後大野市.

高野 政子

平成 29 年度大分県教育委員会主催第 1 回医療的ケア看護師研修, 大分市
平成 29 年度大分県教育委員会主催医療的ケア実施校担当者等研修会, 大分市
平成 29 年度臨地実習指導者短期教育プログラム, 大分市
平成 29 年度大分県教育委員会主催 重度・重複障がい教育研修, 大分市
平成 29 年度大分県立大分支援学校校内医療的ケア研修会, 大分市
平成 29 年度大分県立日出支援学校校内医療的ケア研修会, 日出町
平成 29 年度大分県教育委員会主催第 2 回医療的ケア看護師研修, 大分市
平成 29 年度大分県教育委員会主催第 2 回、第 3 回医療的ケア研修会, 大分市
平成 29 年度大分県立臼杵支援学校校内医療的ケア研修会, 臼杵市
平成 29 年度大分県立中津支援学校校内医療的ケア研修会, 中津市
平成 29 年度大分県立日田支援学校校内医療的ケア研修会, 日田市
平成 29 年度大分県看護協会主催 実習指導者講習会, 大分市
平成 29 年度大分県専任教員養成講習会 専門領域別看護論演習, 大分市
平成 29 年度大分県教育委員会主催第 3 回医療的ケア看護師研修, 大分市

藤内 美保

高めようアセスメントの能力 事例を中心に 大分県看護協会研修会, 大分市.
観察力を高めよう 呼吸器・循環器 大分赤十字病院看護師研修会, 大分市.
実習指導案・指導計画 大分県看護協会, 大分市.
フィジカルアセスメント (呼吸・循環), 別府市医師会看護研修会, 大分市.
チーム医療, 認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程, 広島市.
知っておきたい基本的なフィジカルアセスメント, 福岡県医師会看護師卒後研修会,
福岡市.
看護研究とは, 西部地区研究学会, 日田市.
看護研究, 豊後大野市看護研究学会, 豊後大野市.

藤内 美保、石田 佳代子、田中 佳子、山田 貴子

臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編, 平成 29 年度大分県看護協会研修会,
大分市.

平野 亙

ASD 児の未来のために ～専門職に寄せる親の願い～, 平成 27 年度発達障がい者支援専門員養成研修 (初級), 大分市.

障がい者の差別解消から権利擁護, そして自立支援へ, 平成 29 年度人権教育研修会, 大分市.

障がい者の人権 ～かけがえのない存在であること, 大分県精神障がい者社会復帰施設協議会, 第 16 回全職員交流研修会, 別府市.

特別支援教育に望むこと -障がい児の生きる力を育てるために-, 平成 29 年度初任者研修に係る郊外研修「学級経営 2」, 大分市.

福祉における権利擁護, 平成 29 年度県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市.

村嶋 幸代

「大学の教育課程」. 大分県看護協会 保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市.

行政保健師の役割と難病保健活動への期待. 公益財団法人東京都医学総合研究所 都医学研夏のセミナー「難病の地域ケアコース」, 東京.

保健師としてイキイキと働き続けるために, 私のキャリアデザインを考える. 平成 29 年度広島県保健師職能研究会, 広島.

「地域診断の進め方」-地域の課題を共有し、協働するために-. 平成 29 年度生涯教育研修会 公衆衛生実務研修, 福岡.

「看護とものづくり」-大分県立看護科学大学における産学連携推進の取り組み-. 第 20 回日本看護系学会協議会 公開シンポジウム, 仙台.

「効果的な保健師の人材育成計画策定に向けて」～組織内での人材育成体制の構築を目指して～. 平成 29 年度全国保健師長会高知県支部研修会, 高知.

森 加苗愛

第 3 回 KADEN (九州糖尿病看護認定看護師の会) 研修会 「効果的な調査研究の進め方について」, 福岡.

第 22 回青森県糖尿病患者の看護を考える会 「糖尿病と成人期男性のセクシュアリティ」, 青森.

公益社団法人 大分県看護協会 新人看護職員研修 7「看護記録の基礎」 大分県看護協会, 大分市

公益社団法人 大分県看護協会 高齢者の看護 2「高齢者のフィジカルアセスメント」 大分県看護協会, 大分市.

日本獣医内科学アカデミー 「患者の思いに寄り添った体重管理指導のコツ」, 神奈川県.

山田 貴子

看護診断とアセスメント, 平成 29 年度豊後大野市民病院看護師研修会, 豊後大野市.
フィジカルアセスメント, 大分県看護協会研修, 大分市.

吉村 匠平

大分市立中学校運動部活動外部指導者, 大分市.

アイスブレイクによる関係性の構築, 社会福祉法人皆輪会コミュニケーション研修,
別府市.

アイスブレイクによる関係性の構築, 大分医師会立アルメイダ病院コミュニケーション研修, 大分市.

アイスブレイクによる関係性の構築, 大分市保健所 新人看護職員交流会, 大分市.

インシデントプロセス法について, 豊後大野市養護教諭部会研修, 豊後大野市.

クラス会議形式による問題解決コミュニティの創造, 九重町教育委員会 教育支援員
研修, 九重町.

ライフスタイルの理解, 大分県立病院実習指導者講習会, 大分市.

安全運転と効果的な午睡, 国東市, 玖珠町, 九重町 安全運転管理講習, 国東市, 玖珠
町, 九重町.

育児相談, 社会福祉法人皆輪会, 別府市.

合理的配慮推進事業に係る専門家チーム会議, 大分県立新生支援学校, 大分市.

合理的配慮推進事業に係る専門家チーム会議, 大分県立日田支援学校, 大分市.

災害時における外部支援の利用, 大分県学校心理士会公開学習会, 大分市.

勇気づけの心理学, 大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修, 大分市.

7-2 研究指導

大分赤十字病院

国立病院機構西別府病院

大分県立病院

大分市医師会アルメイダ病院

独立行政法人国立長寿医療研究センター

衛藤病院

平野 亙、定金 香里

巻野 雄介、草野 淳子

秦 さと子、田中 佳子

石丸 智子、関根 剛

福田 広美

後藤 成人、小嶋 光明

7-3 学会その他の役員等

赤星 琴美

大分県介護保険審査会委員
大分県後期高齢者医療審査会委員
大分県国民健康保険審査会委員
大分市介護保険事業計画策定委員会委員
大分市高齢者福祉計画委員会委員
大分市社会福祉審議会委員
第3期大分市食育推進計画策定検討委員会委員
日本地域看護学会大分支部長

石田 佳代子

中津ファビオラ看護学校非常勤講師
実習指導者・大学教員交流会企画委員

岩崎 香子

ROD21 研究会評議員合理的配慮推進事業に係る専門家チームプログラム委員日本骨粗鬆症学会 幹事 評議員
日本 CKD-MBD 研究会 評議員
大分大学医学部看護学科 非常勤講師
大分大学福祉健康科学部 非常勤講師

梅野 貴恵

大分県母性衛生学会 理事 副会長 事務局長
大分県ナースセンター事業運営委員

緒方 文子

全国保健師教育機関協議会 機関誌「保健教育」査読委員
日本地域看護学会第20回学術集会（別府市）事務局
日本看護倫理学会第10回年次大会（大分市）実行委員

小嶋 光明

大分大学医学部附属病院臨床研究審査委員会 委員

小野 美喜

日本 NP 学会 理事
日本看護倫理学会第 10 回年次大会 大会長
日本看護倫理学会 評議員
日本看護倫理学会 査読委員
日本看護協会ナースプラクティショナー制度検討委員会 委員

甲斐 博美

日本看護倫理学会第 10 回年次大会 企画委員

甲斐 倫明

国際放射線防護学会 (ICRP)主委員会 委員
国際放射線防護学会 TG93 座長
一般社団法人日本保健物理学会 会長
日本保健物理学会第 50 回研究発表会 大会長
一般社団法人日本放射線影響学会学術 評議員
公益財団法人放射線影響研究所科学 諮問委員
原子力規制委員会放射線審議会 委員
国立研究開発法人審議会 委員
環境省環境回復検討会 委員
人事院安全専門委員会 委員
大分県防災会議 委員
大分県防災対策推進委員会原子力災害対策部会 委員
鳥取県原子力安全 顧問
福岡県防災会議原子力部門 専門委員
鹿児島県環境放射線モニタリング技術委員会 委員

影山 隆之

大分県アルコール健康障がい対策推進協議会 委員
大分県医療ロボット・機器産業協議会 看護関連機器開発部会 会長
大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県自殺対策連絡協議会 副会長
大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 審査委員
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会 会長 日本
産業ストレス学会 評議員
日本産業衛生学会 編集委員

日本学校メンタルヘルス学会 評議員 編集委員
日本自殺予防学会 常務理事 編集委員長
日本精神衛生学会 副理事長 編集委員長
日本看護科学学会 編集委員
豊後大野市自殺対策連絡協議会 助言者

川崎 涼子

日本公衆衛生学会 代議員
日本地域看護学会第 20 回学術集会実行委員会 委員

桑野 紀子

日本地域看護学会第 20 回学術集会実行委員会委員

定金 香里

大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県リサイクル認定製品審査会 委員
大気環境学会健康影響分科会 幹事
日本生理学会評議員・エデュケーター
大分県理科化学教育懇談会 幹事
大分リハビリテーション専門学校 非常勤講師

佐藤 栄治

日本看護倫理学会第 10 回年次大会 企画委員

宿利 優子

日本看護倫理学会第 10 回年次大会 企画委員

秦 さと子

大分県脳卒中懇話会 世話人
大分県看護協会教育委員会 副委員長

高野 政子

日本小児看護学会 評議員
日本看護研究学会九州沖縄地方会 幹事
九州沖縄小児看護教育研究会 幹事
大分県小児保健協会 理事

大分県医療的ケア連絡協議会 会長
大分県特別支援学校第三者評価委員会 委員
大分県小児在宅医療連絡会 委員
大分市特別支援教育メディカルサポート事業委託事業者選定委員会 委員
日本小児看護学会 災害対策委員会 委員
日本小児がん看護学会誌 査読委員

田中 佳子

日本看護倫理学会第10回年次大会企画委員

藤内 美保

大分県看護協会 理事
大分県専任教員養成講習会検討委員会 委員
大分県医療計画策定協議会 委員
大分県医療費適正化推進協議会 委員
大分県公立学校教員教育成協議会 委員
日本看護学会急性期看護 大分県看護協会主催 実行委員長
日本NP学会 理事
日本NP教育大学院協議会 社員
私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本型地域ケア実践開発研究事業」事業評価委員会 委員
自治医科大学特定行為研修管理委員会 委員
大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会 委員
広島県認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師
広島大学 客員教授
名桜大学 非常勤講師
中津ファビオラ看護学校 非常勤講師
COC+ 教育開発部会 委員

中釜 英里佳

日本看護倫理学会第10回年次大会 企画委員

平野 亙

大分県発達障がい研究会 委員
大分県発達障がい支援センター連絡協議会 理事
大分県発達障がい者支援体制検討会議 委員・アドバイザー

大分県立特別支援学校第三者評価委員会 委員
第 16 回日本看護研究大分県人権尊重社会づくり推進審議会助言者
学会九州・沖縄地方会学術集会 委員

堀 裕子

日本看護倫理学会第 10 回年次大会 企画委員
第 49 回 日本看護学会-急性期看護-学術集会 準備委員

宮内 信治

日本英語音声学会 理事
大分県高等学校教育研究会英語部会 顧問
大分市立横瀬小学校 学校評議員
日本看護倫理学会第 10 回年次大会 企画委員

村嶋 幸代

日本学術会議 連携会員
一般社団法人 日本看護系大学協議会 監事
一般社団法人 全国保健師教育機関協議会 監事
一般社団法人 日本 NP 教育大学院協議会 副会長
一般社団法人 日本 NP 学会 副理事長
一般社団法人 日本地域看護学会 理事・代議員・教育委員長
日本公衆衛生看護学会 理事・代議員・広報委員長
日本公衆衛生学会 理事（職能別）・評議員（職能別）・代議員（職能別）
日本看護科学学会 理事(会計)・社員(代議員)
一般社団法人 公立大学協会 理事・第 2 委員会・看護保健医療部会 部会長
公益財団法人日本看護協会 保健師のキャリア形成支援検討委員会 委員長
国立保健医療科学院 評価委員会 委員
宮崎県地方独立行政法人評価委員会 評価委員
大分県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会 評価委員
大分県医療審議会 委員(学識経験者)
健康寿命日本一おおい創造会議 委員
生涯健康県おおい 21 推進協議会 委員

吉田 成一

日本薬学会 代議員

日本アンドロロジー学会 評議員

精子形成・精巣毒性研究会 評議員

フォーラム 2018：衛生薬学・環境トキシコロジー 実行委員

第 59 回大気環境学会 プログラム委員

吉村 匠平

学校心理士会大分支部 支部長

8 研究・開発・事業助成

麻生 優恵

高齢者施設用木製椅子の座り心地に関する研究
中津家具株式会社 受託研究

石田 佳代子

災害時における黒タグ者に対する活動モデルの実用化に向けた教育プログラムの開発
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

市瀬 孝道, 吉田 成一

大陸から越境輸送される有害な空中微生物の検出と実験研究による呼吸器系への影響評価
日本科学振興会 科学研究費助成事業（科学研究費補助金） 基盤研究（B）

市瀬 孝道

東アジア沙漠地帯における黄砂バイオエアロゾルの発生過程とその越境輸送ルート
の解明
日本科学振興会 科学研究費助成事業（科学研究費補助金） 基盤研究（A）（海外学
術調査）（分担）

伊東 朋子

看護基礎教育における放射線教育パッケージの製作および教育支援システムの開発
日本科学振興会 科学研究費助成事業（科学研究費補助金） 基盤研究（B）（分担）

岩崎 りほ

人口減少社会における小規模市町村保健師育成の新たな現任教育モデルの開発と検
証
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 若手研究(B)

梅野 貴恵

母乳育児経験のある更年期女性の糖・脂質代謝に対するエクオールサプリメントの
効果
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

梅野 貴恵

助産師能力強化研修事業

平成 29 年度大分県地域医療介護総合確保基金補助事業

緒方 文子

5 日間連続夜勤における疲労とストレスの変動

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 若手研究(B)

小野 美喜

特定行為に係る看護師が経験する倫理的問題と問題解決の方略に関する研究

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

小野 美喜

看護師の特定行為研修支援事業

平成 29 年度大分県地域医療介護総合確保基金補助事業

甲斐 倫明

小児 CT 診断の検査理由分析による白血病・脳腫瘍罹患率の放射線リスクの逆因果分析

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

甲斐 倫明

低線量率放射線長期連続照射によるマウス急性骨髄性白血病の起因となる PU.1 遺伝子変異の線量率依存性の解析 -放射線発がんの線量率効果の仕組みを考える-

平成 29 年度放射線健康管理・健康不安対策事業（放射線の健康影響に係る研究調査事業）

影山 隆之

交代勤務者の業務上エラーのリスク要因に関する研究：職種・労働時間・睡眠との関連

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

影山 隆之

労働者の健康保持増進のための森林資源を活用した職域と地域が連携した健康支援の開発

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)（分

担)

川崎 涼子

結核等の健康課題をもつ刑事施設被収容者等の包括的継続健康生活支援
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

川崎 涼子

地理的不利条件下の住民の防災とソーシャルキャピタルの活用：長崎市傾斜面市街地の調査
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)
（分担）

川崎 涼子

倫理的課題・ジレンマに対応する保健医療人材育成のための基盤的研究
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

草野 淳子、高野 政子、足立 綾

在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

佐伯 圭一郎

看護系大学共用試験 CBT システムソフトウェアの汎用化改修と教育場面への導入
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

佐伯 圭一郎

看護教育におけるインシビリティー（incivility）尺度の開発
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C）（分担）

定金 香里

除菌成分塩化ベンザルコニウムの低濃度吸入曝露がアレルギーに及ぼす影響
日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

品川 佳満

高校までの連続性と現場への連動性をパッケージ化した看護情報倫理教育モデルの開発

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

秦 さと子

加齢による嚥下機能低下予防のための運動方法の検討

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

秦 さと子

加齢性の嚥下機能低下に対するケール搾汁粉末溶液の改善効果の研究

ヤクルトヘルスフーズ株式会社 共同研究

高野 政子

タブレット端末使用により ICT 環境を整備し院内学級と原籍校を結ぶ学童の復学支援

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 挑戦的萌芽研究

田中 佳子

血液透析患者のシャント血流音と狭窄度関連

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 若手研究(B)

藤内 美保, 福田 広美, 山田 貴子, 田中 佳子

高度実践看護師の臨床推論に基づくフィジカルアセスメント継続教育支援プログラム開発

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

濱中 良志

骨形成を制御する新規分泌機構の解明

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

樋口 幸

分娩監視装置開発に向けた筋肉の収縮運動の検出法における加速度センサの応用展開の可能性

大分県医療ロボット・機器産業協議会 平成 29 年度医療関連機器開発ワーキンググループ活動支援事業費（分担）

樋口 幸

助産師能力強化研修事業

平成 29 年度大分県地域医療介護総合確保基金補助事業

樋口 幸

母体環境と新生児の胎脂脂質組成との関連とその過酸化脂質が皮膚に与える影響

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 若手研究(B)

樋口 幸、濱中 良志、巻野 雄介、田中 佳子

微酸性電解水の皮膚に対する安全性の検証

鳥繁産業株式会社 受託研究

平井 和明

犯罪被害者へのアウトリーチ支援体制モデルの構築

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究(C)

巻野 雄介

わが国の末梢静脈穿刺におけるウェアラブル静脈透過デバイスの有用性

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 若手研究(B)

巻野 雄介

日本の看護場面で実践可能な超音波ガイド下末梢穿刺法の開発と有用性の検証

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 若手研究(B)

村嶋 幸代

公衆衛生のリーダー養成に資する修士課程保健師教育の強化：公衆衛生学との連携可能性

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 挑戦的萌芽研究

村嶋 幸代

高齢者プライマリ・ケア領域の高度実践看護師（NP）の養成効果と教育モデルの開発

日本科学振興会 科学研究費助成事業（科学研究費補助金） 基盤研究（B）

吉田 成一

妊娠期の微小粒子曝露が母体環境に与える影響

日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 挑戦的萌芽研究

9 国内研修

杉本 圭以子

派遣先 東京成徳大学「コンパッションフォーカストセラピー 3日間のコアスキルトレーニング」

研修期間

7月15日～7月17日

本研修は、認知行動療法を基にしたコンパッションフォーカストセラピー（CFT）について学ぶことを目的とし、特に対人援助職者として対象者のセルフコンパッションを育てる CFT のスキルを習得することを目的としたものであった。研究支援旅費を受け、上記研修に参加した。3日間の研修を通して学内教育、研究に活かすことのできる知識を得ることができた。

杉本 圭以子

派遣先 マインドフルネスストレス低減法のトレーニングプログラムに基づく
Navigating Life's Challenges

研修期間

7月25日～7月29日

本研修は、マインドフルネスストレス低減法のカリキュラムを基に、マインドフルネスの基本を学び、実践を通して学ぶことを目的としたものであった。研究支援旅費を受け、上記研修に参加した。5日間の研修を通して、不安感やストレスに対処する方法としてのマインドフルネスを実践的に学び、今後の学内教育、研究に活かすことのできる知識、スキルを得ることができた。

10 役員及び審議会委員名簿

1 役員

理事長 (学長)		村嶋 幸代
理事	学部長	藤内 美保
理事	研究科長	影山 隆之
理事	事務局長	飯田 隆次
理事 (非常勤)	大分大学医学部附属病院長	津村 弘
理事 (非常勤)	社会医療法人小寺会理事長	小寺 隆
理事 (非常勤)	大分経済同友会恒久監事	高橋 靖周
監事 (非常勤)	大分県看護協会専務理事	神品 實子
監事 (非常勤)	公認会計士	福田 安孝

2 経営審議会

学内委員	理事長	村嶋 幸代
学内委員	理事	藤内 美保
学内委員	理事	影山 隆之
学内委員	理事	飯田 隆次
学内委員	理事 (非常勤)	津村 弘
学内委員	理事 (非常勤)	小寺 隆
学内委員	理事 (非常勤)	高橋 靖周
学外委員	弁護士	千野 博之
学外委員	立命館大学 大学評価室長	上子 秋生
学外委員	大分合同新聞社論説編集委員室長	松尾 和行
学外委員	大分県看護協会会長	竹中 愛子

3 教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋 幸代
学内委員	学部長	藤内 美保
学内委員	研究科長	影山 隆之
学内委員	事務局長	飯田 隆次
学内委員	生体科学教授	濱中 良志
学内委員	生体反応学教授	市瀬 孝道
学内委員	健康運動学教授	稲垣 敦
学内委員	人間関係学准教授	吉村 匠平
学内委員	環境保健学教授	甲斐 倫明
学内委員	健康情報科学教授	佐伯 圭一郎
学内委員	言語学教授	G.T.Shirley
学内委員	基礎看護学准教授	伊東 朋子
学内委員	成人・老年看護学教授	小野 美喜
学内委員	小児看護学教授	高野 政子
学内委員	母性看護学教授	林 猪都子
学内委員	助産学教授	梅野 貴恵
学内委員	保健管理学教授	福田 広美
学内委員	地域看護学准教授	赤星 琴美
学内委員	国際看護学特任教授	崔 明愛
学外委員	大分大学名誉教授	葉玉 哲生

15 教職員名簿

1 専任教員

生体科学	教授	濱中 良志	
	准教授	安部 眞佐子	
生体反応学	学内講師	岩崎 香子	
	教授	市瀬 孝道	
健康運動学	准教授	吉田 成一	
	学内講師	定金 香里	
人間関係学	教授	稲垣 敦	
	准教授	吉村 匠平	
環境保健学	准教授	関根 剛	
	非常勤助手	秋本 慶子	
健康情報科学	教授	甲斐 倫明	
	准教授	小嶋 光明	
言語学	助教	恵谷 玲央	
	教授	佐伯 圭一郎	
基礎看護学	准教授	品川 佳満	H30.1.31 退職
	講師	野津 昭文	
看護アセスメント学	助教	G.T.Shirley	
	非常勤助手	宮内 信治	H29.7.31 退職
成人・老年看護学	非常勤助手	馬場 奈穂	H29.8.21 採用
	非常勤助手	藤原 やよい	H30.2.17 退職
(NPコース担当)	准教授	伊東 朋子	
	講師	秦 さと子	
小児看護学	助教	巻野 雄介	H30.3.31 退職
	助教	石丸 智子	
母性看護学	臨時助手	麻生 優恵	H30.3.31 退職
	教授	藤内 美保	
助産学	准教授	石田 佳代子	
	助教	田中 佳子	
精神看護学	助教	山田 貴子	
	教授	小野 美喜	
保健管理学	准教授	森 加苗愛	
	助教	中釜 英里佳	
助産学	助教	堀 裕子	
	助教	宿利 優子	
母性看護学	助手	佐藤 栄治	H29.4.1 採用
	臨時助手	中村 伊都子	H29.6.12 採用
小児看護学	助教	甲斐 博美	
	非常勤助手	生野 直子	H29.8.31 退職
母性看護学	非常勤助手	大嶋 佐智子	H29.11.1 採用
	教授	高野 政子	
助産学	講師	草野 淳子	
	助手	足立 綾	
精神看護学	教授	林 猪都子	
	助教	徳丸 由布子	
助産学	臨時助手	財津 友美	H29.4.1 採用
	教授	今村 知子	H29.7.31 退職
保健管理学	助教	梅野 貴恵	H29.8.21 採用
	助教	安部 真紀	
精神看護学	助教	樋口 幸	
	助教	大矢 七瀬	H29.4.1 採用
保健管理学	臨時助手	姫野 綾	H29.11.10 退職
	教授	影山 隆之	
助産学	講師	杉本 圭以子	
	助教	後藤 成人	
精神看護学	教授	福田 広美	
	准教授	平野 互	
保健管理学	助教	佐藤 弥生	H30.3.31 退職
	助手	吉川 加奈子	

	非常勤助手	中光 淳一郎	H29.10.1 採用 H30.3.31 退職
地域看護学	准教授 准教授 助教 助手 臨時助手 臨時助手	赤星 琴美 川崎 涼子 緒方 文子 佐藤 愛 篠原 彩	H29.4.1 採用 H29.8.23 退職
国際看護学 看護研究交流センター	講師 助教 特任助教	渡辺 康人 桑野 紀子 岩崎 りほ 平井 和明	H29.8.31 退職 H30.3.31 退職
2 特任教授	特任教授	崔 明愛	H30.3.31 退職
3 就職相談員	就職相談員	小川 三代子	
4-1 非常勤講師（学部）	松田 美香 劉 美貞 西 英久 二宮 孝富 石本 田鶴子 大杉 至 足立 恵理 西園 晃 松本 昂 麻生 良太 横山 秀樹 小川 伊作 澤田 佳孝 堀本 フカエ 鈴木 篤 長谷川 祐介 柴田 雄企 飯田 法子 河野 伸子 藤田 文 今井 航 生田 淳一 松 久美	言語表現法 韓国語 哲学入門 法学入門（日本国憲法） 大学ナビ講座 社会学入門 文化人類学入門 微生物免疫論 微生物免疫論 教職概論、教育方法論 教職概論 音楽とこころ 美術とこころ 養護概論Ⅰ、養護概論Ⅱ、 学校保健学 教育学概論 道德教育と特別活動 生徒指導 教育相談 教育相談 教育相談 学校教育心理学 教育課程論、教育制度論 教育方法論 災害看護論	
4-1 非常勤講師（大学院）	岩波 栄逸 山口 豊 阿部 航 安東 優 工藤 欣邦 糸永 一朗 古川 雅英 佐藤 博 山本 真 迫 秀則 財前 博文 小寺 隆元 甲原 芳範 一万田 正彦 平井 健一 木村 成志 廣瀬 福美	老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論 老年診察・診断学特論 老年疾病特論 老年診察・診断学特論 老年疾病特論 老年実践演習 老年実践演習 老年実践演習 老年実践演習 老年疾病特論 老年疾病特論 老年薬理学演習 老年疾病特論 老年疾病特論 老年疾病特論 老年疾病特論 NP論	

田村 委子	NP論、老年実践演習
草間 朋子	NP論
光根 美保	老年NP論
増井 玲子	疾病予防学特論
玉井 文洋	健康危機管理論
三浦 源太	疾病予防学特論
平川 英敏	薬剤マネジメント特論
藤内 修二	広域看護学概論、健康危機管理論、疾病予防学特論
関根 綾希子	広域看護学概論
池邊 淑子	疾病予防学特論
清水 久美恵	地域母子保健学特論
佐藤 昌司	周産期特論
	周産期診断技術演習
飯田 浩一	周産期特論
豊福 一輝	周産期特論
後藤 清美	周産期特論
中村 聡	ソフトウェア・ヘルステクニク
嶺 真一郎	リプロダクティブ・ヘルステクニク、周産期特論
西田 欣広	ソフトウェア・ヘルステクニク
井上 貴史	ソフトウェア・ヘルステクニク
宇津宮 隆史	ソフトウェア・ヘルステクニク
戸高 佐枝子	助産マネジメント論
生野 末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、助産マネジメント演習
上野 桂子	母子成育支援特論
井上 祥明	母子成育支援特論
佐藤 敬子	母子成育支援特論
實崎 美奈	ウイメンズヘルステクニク
立川 洋一	老年アセスメント学演習
久保 徳彦	老年アセスメント演習
宮川 ミカ	老年アセスメント演習
塩月 成則	老年薬理学特論
	老年疾病特論、老年実践演習
	老年薬理学演習
大田 えりか	看護科学研究
小野 剛志	老年薬理学演習
甲斐 仁美	看護管理学特論
小山 秀夫	看護政策論
小池 智子	看護政策論
立森 久照	看護政策論
中西 三春	看護政策論
前田 徹	老年実践演習
竹内 山水	老年実践演習
伊東 弘樹	老年臨床薬理学特論
佐藤 雄己	老年臨床薬理学特論
阿部 実	保健医療福祉政策論
式田 由美子	小児看護学特論
本山 秀樹	健康危機管理論
末永 宏	健康危機管理論
大津 孝彦	地域保健特論
佐藤 紀子	地域保健特論
	地域母子保健学特論
山崎 清男	看護教育特論
高波 利恵	産業保健特論
吉田 愛	産業保健特論
関司 和子	学校保健特論
野津 昭文	健康統計学特論

5 事務職員

	事務局長	飯田 隆次	H30.3.31 退職	
・総務グループ	課長補佐	高橋 勝三	H29.4.1 転入	
	主幹	矢部 美香	H29.4.1 転入	
	副主幹	矢野 昌哉		
	主査	高橋 めぐみ	H30.3.31 転出	
	主任	中野 麻梨子	H29.5.31 退職	
	主事	久保 紘子		
	事務職員	奈須 真由美		
	事務職員	安部 浩	H29.4.1 採用	
	事務職員	宮川 眞美	H29.4.1 採用	
	事務職員	有馬 沙希	H30.3.31 退職	
	・教務学生グループ	課長補佐	浜松 弘一	H30.3.31 転出
		主査	染矢 哲朗	
		主査	近藤 亜矢	H29.4.1 転入
		主任	神崎 正太	
事務職員		藤川 智美	H29.4.1 採用	
事務職員		北川 知美	H29.8.31 退職	
保健師		工藤 優	H29.9.1 採用	
保健師		酒井 敦美	H30.3.18 退職	
事務職員		神崎 純子	H29.6.30 退職	
事務職員		生野 法子	H29.7.1 採用	
・図書館管理グループ	非常勤職員	白川 裕子	H30.3.31 退職	
	非常勤職員	挾間 由布子		
	非常勤職員	工藤 信二		
	非常勤職員			